

# Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

■主催: **JEITA** 一般社団法人電子情報技術産業協会

■お問い合わせ: 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル5階

電話: (03) 6212-5231 FAX: (03) 6212-5225 E-mail: contact2015@inter-bee.com

# Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

International Broadcast Equipment Exhibition Inter BEE

## REVIEW 2014

REVIEW 2014

INTER BEE ONLINE  
[www.inter-bee.com](http://www.inter-bee.com)



Inter BEE 2014〔第50回〕2014年国際放送機器展は、平成26年11月19日(水)から11月21日(金)までの3日間、千葉市・幕張メッセにおいて、5省庁・団体の後援、34団体の協力により開催した。

### ■国内随一の「国際メディア総合展示会」

50回目となる節目の開催を迎えたInter BEEは、「映像・放送関連機材部門」、「プロオーディオ部門」、「プロライティング部門」、「ICT／クロスメディア部門」の4部門で構成し、放送事業者、関連機器メーカ、サービス事業者、コンテンツビジネス関係者、クリエイターやデザイナーなど、幅広いステークホルダーが一堂に会し、年に一度の最新トレンドの情報発信、情報交流のハブとなる機会として活用された。

また、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を見据えて進められる放送サービスの高度化に向けた取り組みは、4K／8K等の超高精細映像技術、セカンドスクリーンやスマートテレビ、HTML5動画配信、デジタルサイネージ、パブリックビューイング等への期待が高まり、国内外の様々な企業からメディア産業の今とこれからの指し示す注目の提案が相次いだ。

### ■国内外エキスパートによる 多彩なコンファレンスの同時開催

Inter BEEには、海外から音や映像の専門家やキーパーソンが来日するため、日本に居ながらにして、世界の最新の動向を共有できる点も大きな魅力となっている。

開催初日の基調講演をはじめ、特別講演や招待講演などを連日紹介した。

米国NAB Showで開催されている有料セッションの日本版を今年も開催。米国で人気が高かったトピックス4テーマを海外一流講師がレクチャーした。

さらに、毎回注目を集める「映像シンポジウム」、「音響シンポジウム」、「チュートリアル・セッション」、「Asia Contents Forum」など、国内外からエキスパートを迎え、最新動向を発信した。

### ■第50回開催記念イベントと放送通信連携の新企画

第50回開催を迎えたInter BEEは、展示会としての機能をもう一步高めるべく、体験を通じてユーザと製品・技術・情報がより効果的に触れ合うことのできる場を目指し、記念イベントとして「INTER BEE EXPERIENCE」を実施。国内展示会では初となる、ラインアレイスピーカーの体験デモンストレーションを展開した。

また、放送と通信の連携やインターネットを通じたメディアビジネスの可能性、コンテンツ制作インフラとしてのクラウドの利活用進展、これからの社会システムに不可欠なデジタルコンテンツとビッグデータ活用など、映像とICTの最新動向を発信する場として、新企画「INTER BEE CONNECTED」を実施した。



## Exhibitors

### 過去最多の出展者が参加した 記念開催

クラウドサービス、ICTベンダー等、従来にない顔ぶれが加わり、「放送・通信の連携」や「ICTの利活用」が急速に進展した。各社より放送ビジネスの新しい可能性が提案された。

出展者：**977**社（過去最多）  
海外出展者：**543**社（過去最多）

## Trading Visitors

### 多分野から過去最多の 来場者を迎えた

展示領域の拡大にあわせ、新しい来場者層が急激に増加した。各社の提案に対し、積極的な体験と情報交流の場が持たれた。プレス取材も多く、国内外に広く紹介された。

来場者：**37,959**名（過去最多）  
報道関係者：**411**名（過去最多）

## International

### 世界が注目する最先端技術と 日本の動向

東京オリンピック・パラリンピック開催に向けてオールジャパンで進める、4K/8K等の放送サービスの高度化に向けた先進的な取り組みは、海外からも大きな注目を集めた。

海外出展者：**33**ヶ国・地域  
海外来場者：**42**ヶ国・地域



開催概要


- 名 称  
 (第50回)2014年国際放送機器展  
 International Broadcast Equipment Exhibition 2014  
 (略称: Inter BEE 2014)
- 会 期  
 2014年11月19日(水)~21日(金) [3日間]
- 開場時間  
 11月19日(水) 午前10時~午後5時30分  
 11月20日(木) 午前10時~午後5時30分  
 11月21日(金) 午前10時~午後5時
- 会 場  
 幕張メッセ/展示ホール1~6・国際会議場、イベントホール
- 入 場  
 無料(全来場者登録入場制)
- 主 催  
 一般社団法人電子情報技術産業協会 (JEITA)
- 後 援  
 総務省、経済産業省 (建制順)  
 日本放送協会 (NHK)  
 一般社団法人日本民間放送連盟 (JBA)  
 一般社団法人電波産業会 (ARIB) (以上順不同)
- 協 力  
 IPDC フォーラム、一般社団法人衛星放送協会、特定非営利活動法人映像産業振興機構、公益社団法人映像文化製作者連盟、一般社団法人カメラ映像機器工業会、公益社団法人劇場演出空間技術協会、一般社団法人次世代放送推進フォーラム、3D コンソーシアム、全国舞台テレビ照明事業協同組合、超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム、特定非営利活動法人デジタルシネマ・コンソーシアム、一般財団法人デジタルコンテンツ協会、デジタルサイネージコンソーシアム、一般社団法人デジタルメディア協会、一般財団法人電波技術協会、一般社団法人特定ラジオマイク運用調整機構、一般社団法人日本アド・コンテンツ制作社連盟、協同組合日本映画撮影監督協会、一般社団法人日本映画テレビ技術協会、協同組合日本映画テレビ照明協会、一般社団法人日本オーディオ協会、一般社団法人日本音楽スタジオ協会、一般社団法人日本ケーブルテレビ連盟、一般社団法人日本CATV技術協会、公益社団法人日本照明家協会、一般社団法人日本パブリックビューイング協会、一般社団法人日本動画協会、一般社団法人日本舞台音響家協会、日本舞台音響事業協同組合、一般社団法人日本ポストプロダクション協会、一般財団法人プロジェクションマッピング協会、マルチスクリーン型放送研究会、一般社団法人モバイルブロードバンド協会 (50音順)
- 海外パートナー  

- 運 営  
 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)  
 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-3 大手センタービル  
 電話: (03)6212-5231 FAX: (03)6212-5225



Table of Contents

Topics

- 50th Anniversary Event ..... 04  
 INTER BEE EXPERIENCE
- Guest Interview 1 ..... 08  
 アマゾン ウェブサービス ジェネラル マネージャ マーク・ランバーク氏
- Guest Interview 2 ..... 12  
 ニールセン シニア・バイス・プレジデント エリック・ソロモン氏
- Guest Interview 3 ..... 16  
 ライソマティクス
- Guest Interview 4 ..... 20  
 DigiCon6 ASIA Session
- Guest Interview 5 ..... 22  
 4K New Wave Session Powered by コマーシャル・フォト
- Guest Interview 6 ..... 24  
 JPPA DAY
- Guest Interview 7 ..... 27  
 VES Session
- Guest Interview 8 ..... 29  
 Woman's Session

Ceremony Report

- Opening Ceremony ..... 32
- Reception Party ..... 34

Exhibition Report

- News Center Pick up 1 ..... 36  
 NEC
- News Center Pick up 2 ..... 40  
 株式会社タムラ製作所
- News Center Pick up 3 ..... 44  
 日本通信株式会社
- News Center Pick up 4 ..... 48  
 株式会社日立国際電気
- Exhibit Map ..... 52  
 展示会場図
- Exhibitor List ..... 56  
 出展者一覧
- Online Magazine Headline ..... 58  
 INTER BEE ONLINE 掲載記事 (展示会レポート) サマリー

Forum Report

- News Center Pick up 5 ..... 76  
 日本放送協会 理事・技師長 浜田 泰人氏
- News Center Pick up 6 ..... 78  
 NAB (全米放送事業者協会)  
 IABM (国際放送機器工業会)  
 IBC (国際放送機器展示会)  
 SET (ブラジルテレビ放送技術協会)
- News Center Pick up 7 ..... 82  
 INTER BEE CONNECTED
- Programs ..... 90  
 プログラム一覧

Results

- Visitor Profile ..... 96  
 来場者アンケート実施結果
- Exhibitor Profile ..... 99  
 出展者アンケート実施結果
- Publication and Promotion ..... 100  
 来場者誘致プロモーション活動報告



## 50回を記念して始まった 体験型展示の 新たな挑戦。

今年で第50回の開催となるInter BEEにおける新たな催しとして、開催前から多くの関係者の関心を集めた「INTER BEE EXPERIENCE」。Inter BEEの2日目にあたる11月20日の開催当日、会場となった幕張メッセイベントホールは午前中から多くの人々が詰めかけ、第1部、第2部ともに大盛況。会場は終日、多くの来場者でにぎわった。

第1部は、9社が参加したラインアレイスピーカーの体験デモ。展示会場ではこれまで、音量規制などの関係で十分な性能を発揮できなかったライブ用のスピーカーが一堂に会し、各スピーカーの性能を存分に発揮するデモが繰り広げられた。

第2部は、50回開催を記念するアニバーサリー・ライブパーティー。クリエイター集団「ライゾマティクス」との共同制作による「ライブ・エンターテインメント」など、最新機材を駆使した音と映像のクリエイティブなパフォーマンスが展開された。

(第2部については、16-19ページ「ライゾマティクス・インタビュー」参照)

Live  
Performed by LILI

### 圧倒的なリアリティ。 最新のラインアレイスピーカーが揃い踏み！

第1部の「ラインアレイスピーカー体験デモ」では、本邦初公開も含め、9社の最新ラインアレイスピーカーが参加した。幕張メッセイベントホールは、展示ホールと隣接しながら、最大9,000人を収容できる本格的なホールだ。年間、いくつもの音楽イベントが催されるこのイベントホールを使用することで、実際の状況により近い環境でスピーカーを体験することができる。文字通り、製品を実際の利用環境に近い形で「体験」する新しい試みだ。

スピーカーのセッティングも、床置き(グランドスタック)ではなく、ステージ上に吊り下げる「フライング設置」という、ラインアレイスピーカーならではのセッティング方法を採用した。海外では、ドイツと米国のイベントで、ラインアレイスピーカーの比較デモがあるが、いずれも屋外で実施しており、屋内での比較試聴は世界的にも珍しい。

サウンドデザイナーの大内健司氏は、サウンドディレクター兼エンジニアとして、計画段階から参加してきた。大内氏はこれまでに、数多くのアーティストのコンサートのPAを担当したほか、テレビ朝日の生放送音楽番組『ミュージックステーション』(Mステ)のPA担当として長年活躍している。Mステの特別番組として、年

末に開催される「スーパーライブ」は、2005年からこの幕張メッセイベントホールが会場となっている。PAの経験も豊富であり、また会場の特性も理解している大内氏だが、9セットのラインアレイスピーカーを同時に吊り下げるのは、もちろん初の試みだ。スピーカーの重量は片側で約800kgのものもある。事前に構造物の強度計算など、入念な準備が重ねられた。「実際のコンサートでも、1台吊すだけで大変な作業なのを知っているの、大丈夫かな、という思いはありましたね」(大内氏)







## 9セットの特性を1日で聴きくらべ

大内氏は、今回の体験デモの意義について次のように話す。「どのホールにどういったスピーカーがあるかを全部把握している人は、プロでもいません。ましてや、同じ環境で異なるスピーカーを聞き比べることはめったにない状況。スピーカーの特性や違いを知ることは、PAにとってもコンサートなどの参考になります。同じ音源、同じ環境で聞き比べることができるのは、今回の『体験デモ』の醍醐味といえるでしょう」

今回参加した9セットのスピーカーは、大型・中型・小型と大きさも異なり、それぞれに特徴を持つ。スペースや重量バランスを考慮し、前列に小型・中型スピーカー、後列に大型スピーカーを並べて吊された。スピーカーの特性・特徴は、音圧以外にもさまざまな要素がある。

「ハイテクを駆使したラインアレイスピーカーですが、それぞれ設計思想やデザインが異なります。1台のスピーカーの中に何十台ものDSPを搭載しているものや、アンプが別になっているものなど、いろいろあります。ステージ前には、それぞれのアンプも展示してありますので、そちらも確認してもらえます。各社とも、今回のイベントに向け、チューニングからプレゼン内容まで、腕によりをかけ、相当な力を入れて取り組みました」(大内氏)

## 見て、聴いて、感じる30分間

デモは、10時30分から16時40分まで、30分づつの持ち時間を利用して9製品が順番にデモを実施した。30分のうち、はじめの5分は全製品共通の内容で、ナレーションと音楽のCD音源、それに加え生バンドによるリファレンス楽曲の演奏が行われた。残りの25分は、各社が思い思いの趣向を凝らして、自社の製品の特徴をアピールした。各社の担当者がPA卓からスピーカーの説明をしながら、それぞれの特徴にあわせた音源を出し、音量の調整や音の位置の移動など、各社ともさまざまなデモを実施した。

会場の中央にはPA卓を設置し、それを囲んで18m×18mの「リスニングエリア」を設け椅子が設置された。ラインアレイスピーカーは、特定のエリアに任意の音量で音を飛ばすことが特徴であり、エリア以外に音が行かないようにすることもできる。リスニングエリアを設定することで、各社のスピーカーがそうした機能を実証できるようにした。デモの間、このエリアに音を飛ばすだけでなく、会場内のさまざまな位置に音を飛ばすデモも実施された。

## イメージを膨らませて、展示ブースへ

EXPERIENCE第1部の参加企業は、同時に展示ホールでもブースを構え、同一の機材を展示しているところもあった。各ブースでは、イベントホールで実際の音を確認してからブースに来場する例もあり、ブースの担当者からは「エクスペリエンス会場で音を聞いていただいた後に、ブースでも展示を見ていただくことができ、来場者からも好評だった」といった意見もあった。

ラインアレイスピーカーは大型装置であり、しかも大音量であることからデモの機会が少ない。「今回、国内でお客様にお聞きいただくのは初めて。非常に良いタイミングの機会となった。エクスペリエンスの後、ブースのチラシがなくなり、補充をしなければならぬほど、たくさんのお客様にきていただいた」という。「スピーカーの見た目の大きさと比較して、どれだけパワフルな音が出るかを実感していただくことができた」というコメントもあった。

「比較ができたことで当社の製品の良さを理解してもらうことができた。デモの依頼も複数いただくことができ、今回の視聴会は良かった」と、総じて高い評価を得ることができた。

## 体験型へ！高まる来場者の期待

会場は、リスニングエリアに常時多くの人々が着座していたが、ほかのエリアにも、多くの人々がさまざまな場所で、音の聞き比べをしようと移動しながら真剣な表情で音を聞き比べていた。

来場者の何人かから感想を聞いたところ、すべての人から「同じ条件で同じ音源の聞き比べができる」という点について、高く評価された。また「各社のキャラクターがひきあって良かった」という意見があった。「もう少し中規模でもいいので、よりコンパクトな形で開催してほしい」、あるいは「新製品の情報をチェックするのが良い。新しい機材を見られるのはとても興味深い」といった感想や、「デモ品や中古商品の即売会もあれば」、さらに「同じ音源は、各社連続で聞きたい」といった意見もあった。

来場者はサウンドエンジニアや、イベント、ホール音響担当者、PA、映像関係から、ホテルの音響関係者など、音響に携わる幅広い関係者が来場した。





## 複雑化するコンテンツ・ビジネス クラウドの活用で迅速な収益化を 米MPAAが認める高い安全性と柔軟な拡張性

アマゾン ウェブサービス マーク・ランバーク氏インタビュー

Inter BEE 2014の会期二日目にあたる11月20日、米アマゾンウェブサービス社メディア&エンタテインメント部門ジェネラルマネージャのマーク・ランバーク氏と、アマゾン データ サービス ジャパン株式会社ソリューションアーキテクトの北迫清訓氏が登壇し、「クラウド活用によるメディアワークフローの進化」と題した講演を実施した。来日したマーク・ランバーク氏にメディアビジネスにおけるクラウドの利点、アマゾン ウェブ サービスの特徴などについて聞いた。



## 「求められるアジリティへの解決策」

### ■現在のメディア企業の課題に ついてどのように考えているか

映像の高精細化とコンピューターの発達、そしてそれをベースにしたアプリケーションの充実や利用デバイスの多様化といった状況は、放送局ばかりでなく、映画やゲーム、あるいは文字メディアなども含めたデジタルコンテンツの視聴の形態を大幅に拡大した。

それによって、メディア企業にとっては、自社のコンテンツを収益化する機会が増えている。しかし、収益性を考えながらさまざまなメディア、デバイスにコンテンツを提供していくことは、実際には非常に複雑だ。新たなメディアやデバイス、配信技術は、これからも短期間に次々と登場してくるだろう。従来のように、社内で配信設備を構築し、ソフトウェアを対応させていく形では、投資コストが莫大になり、対応しきれない。

急激な環境の変化に対して、短期間にコストダウンを図りながらビジネスを構築していく。そのための新たな解決方法として、AWSが注目されている。重要なのは、問題解決をする速さではなく、ビジネスを開始するまでのスピード(アジリティ)だ。これまではアジリティを実現するには、大量のコストをかけなくてはできなかった。それが、クラウドによって「安価に且つ速くビジネスを展開できる」ようになってきた。

クラウドが持つ、スケーラブルという点もこうしたアジリティを支える要素だ。ネットにおける動画配信を実施する際、特定のイベントにおいて急激に利用が高まることもある。ネット上でこうした状況に対応するために、常時広い帯域や大量の容量を確保するのはコスト高になるし、非効率だ。利用状況の変化に柔軟に対応し、それに伴って利用しただけのコストを支払うことができる点がクラウド

ドならではのメリットといえるだろう。

### ■アマゾン ウェブ サービスについて

アマゾン ウェブ サービス (AWS) は、2006年にサービスを開始し、現在190を超える国・地域で100万以上のユーザーが利用している。中には、900以上の政府・行政機関、3400以上の教育機関なども含まれる。日本でも2006年からサービスを提供していたが、2011年3月に日本国内にデータセンター群(東京リージョン)が開設され、さらに利用の幅が広がっている。現在、日本にも2万を超えるユーザーがいる。この信頼性は、メディアビジネスの業界においても高い評価を得ている米国映画協会(MPAA)の「Best Practice」(最良の評価)を満たしており、RAWマスターから配信用のデータまで扱うだけの安全性を備えていると認証されている。



アマゾンウェブサービス  
メディア&エンタテインメント部門 ジェネラルマネージャ  
マーク・ランバーク氏





## 「放送・映像制作向け機能も多数」

### ■AWSの特徴について

AWSは開始以来、短期間で非常に多くの拡張を続けており、2014年末までに1100を超える新サービスや新機能を提供している。追加された機能にはウェブアプリケーション、モバイルアプリケーション、基幹系システムのほか、ビッグデータ処理、データウェアハウス、HPC(ハイパフォーマンス・コンピューティング)、ストレージ、アーカイブといった機能も追加されている。こうした機能強化によって、放送をはじめとしたコンテンツビジネスにおける制作ワークフロー、データ資産管理、さらにはマルチデバイス配信といった業務にも活用されてきている。

AWSの大きな特徴は、サーバーやネットワーク帯域の規模など、スケラビリティの利点を業務に生かすことができる

とともに、事業の拡大の過程で、事業内容に応じたサービス、技術を付加していくことができる点にある。メディア業界における利用も活発化してきている。中でも、映像のコンテンツ制作や配信にクラウドの活用を検討する企業が増えている。

## 「ハリウッドで実績」

### ■コンテンツ企業向けの機能について

前述のように、AWSでは、安心して利用できるプラットフォームにおいて、必要な手続きを、すべて処理できるように構築している。このプラットフォーム上に、パートナー企業が多くの機能を載せている点が特徴だ。

たとえば、Zync Render社が提供するクラウドベースのレンダリング機能は、実際に映画「アメリカン・ハッスル」(2013年公開)など、ハリウッド作品での使用実績がある。また、高度なビデオ編集をク

ラウドで行う事例もある。ソース映像はすべてクラウドに上げられており、これによりコントロールが楽になる。AWSのプラットフォーム上では、大きなデータを極力動かさない作業フローを実現している。コンテンツを動かす代わりにアクセスを集める「Contents Gravity」という考えに基づいているもので、これにより、ネットの帯域幅の狭さ・不安定さによるボトルネックの課題を回避している。

AWSは、各種のストレージサービス(Amazon EBS, Amazon S3, Amazon Glacier, Amazon Storage Gateway)を提供しており、用途にあったストレージを選択できる。また、Amazon Elastic Transcoderによりトランスコードを自動化、抽象化でき、展開性を高めることができる。

コンテンツ制作のためには、アプリケーションのライセンスがクラウド向きに用意されたものもある。顧客が選択できる幅は、拡がりを見せている。

## 「Netflixが導入、月間200億リクエスト処理」

### ■どのようなメディア企業が導入しているか

Netflixはほぼ100%、AWSのサービスを利用している。同社は当初、PS3向け配信のトランスコードのために、2009年にAWSの利用を開始した。その後、AWSを利用する度合いを増やし、現在に至っている。2010年の間に、同社のオンラインサービス規模は37倍となり、2011年1月時点では月間200億リクエストを処理した。この間、AWSが拡大に対応している。

米国の公共放送システムPublic Broadcasting Service (PBS)は、月間2.5 PBytes(ペタバイト)のビデオデータを、当社のCDNサービスであるAmazon

Cloud Frontで配信している。PBSは、このサービスをきっかけにAWSの使用を開始した。

upLink (Disney/ABC Television Group) は、ABC Family、ABC、Disney、Disney XBなどのチャンネルを扱う配信システムをAWS上に構築した。この配信システムは、自動化された字幕生成やライブ番組への対応、リアルタイムの広告削除、各種デバイス用マルチビットレート・エンコードなどの機能が必要とされ、すべて実装している。現在、インジェストから配信にまで対応する、スケラブルなシステムとなっている。

Samsung Electronicsは、スマートテレビ用のSmart HubをAWSで運用して

いる。クラウド運用の結果、自社でシステムを構築した場合に比べて、ハードウェアおよびメンテナンスコストを85%削減した。これは、3400万ドルに相当する。

BBCが開発した「iPlayer in the Cloud」は、毎日700万のリクエストがある英国最大のVoDシステムだ。BBCは、局内のわずか18人のエンジニアによって、1年でこのシステムを完成した。システムはメッセージ駆動型のクラウドベース・アーキテクチャを採用し、Amazon SQS(Simple Queuing Service)で構成している。

このほかにも、格闘技チャンネルのUFCや、SonyのMedia Cloudなど、さまざまなメディアが活用している。



## 「世界最高の品質を誇るCDNも」

### ■CDNではどのような機能が提供されているか

Amazon Cloud FrontはAWSのCDNサービスだ。現在、日本向けに3つのエッジサーバー拠点がある。二つは東京に、もう一つは大阪にある。世界では、52のエッジサーバー拠点を持っている。測定専門企業によると、Amazon Cloud Frontのクライアント側の可用率は、業界トップの評価を得ている。特に日本では、非常に高いレスポンス速度を達成してい

る。通常多くは500msec以内の反応だが、Amazon Cloud Frontの日本におけるレスポンス速度は280msec以下を達成しており、多くの反応は40-60msecを達成しているという測定結果もある。上記の米PBSや、Ooyala、IMDbなど、世界の多くのメディア関連企業に利用されている。

### ■今後の日本での展開について

MPAAにも高い評価を受けている信

頼性の高いAWSは今、ハリウッドの多くのスタジオにおいても、制作環境に取り込まれようとしている。いずれ、導入事例も紹介していきたい。日本においても、放送業界をはじめとしたメディア業界やゲーム会社において、今後ますます、スピーディなビジネスの構築と収益化、すなわちアジリティが重要になっており、AWSはそうした企業に貢献できると考えている。





## 急激に変化する番組視聴スタイル 求められる新たな視聴計測技術 放送局と出稿企業を結ぶ新たな基準の構築へ

ニールセン エリック・ソロモン氏 インタビュー

Inter BEEの50回開催を記念した新たな催しの一つ、INTER BEE CONNECTEDにおいて、ニールセン シニア・バイス・プレジデントのエリック・ソロモン氏が基調講演「USにおけるメディア視聴動向と視聴率計測の最新トレンド」に登壇。米国で進むテレビ番組のデジタル視聴計測に関する最新状況を生々しく語ってくれた。1時間にわたる講演の後、ニールセンの消費者視聴行動分析部門である、ニールセン株式会社 CEO 福德俊弘氏が加わり、来場者とのアクティブな質疑応答となった。質疑応答も約1時間に及び、満席となった会場から活発な質問が寄せられた。



利用	23-34歳	35歳以上
35歳	42.8	53.9
40歳	41.0	50.4
45歳	-4%	-1%

## 「全世界の40.0%が定額制VODを契約」

ソロモン氏は最初に、米国での「クロスプラットフォームでの視聴動向」に言及し、米国におけるテレビ番組の視聴動向について、データをもとに丁寧に説明した。

まず、クロスプラットフォームについて「ネットと配信技術の発達により、様々なデバイスやアプリを通じて、テレビ番組が視聴されるようになってきた。この傾向は今後10年でさらに強まる」と述べた。

その象徴的な動きの一つとして、番組視聴形態の半数以上を占めていたケーブルテレビがこの数年間で45.4%まで比率が下がってきたことを挙げた。これに対して比率を高めているのが家庭用光ファイバー（FTTH）で、現在11.6%に及ぶ。また最近では、Netflixやアマゾンプライムなどの定額制VODの利用が急激に増加しており、2014年後半には全世界の40.0%が定額制VODを契約しているという統計データを紹介。「これはもう最先端ということではなく、テレビ番組視聴の主流になってきている」と話した。

番組を視聴するデバイスの一つ、タブレットは、すでに全世界の46%に普及。スマートフォンに至っては全世界の75%に

普及していると述べた。

ソロモン氏は、こうした激しい視聴環境の変化の中で、クロスプラットフォームの視聴をどのように計測していくかにテーマを移し、まず基本的な従来型の視聴率の計測方法を説明した。

米国では210のローカル放送エリアがあり、全国視聴率とこのローカル放送エリア全ての視聴率を、計測対象のサイズに基づき異なる手法で計測している。また、全国の約2万世帯（5万人）を「パネル」と呼び、音声透かし技術を用いた計測をしている。ソロモン氏によると、音声透かしによってテレビ番組に埋め込んだコンテンツIDによって、リアルタイム視聴（放送中の視聴）のみでなく、タイムシフト視聴やオンデマンドなどの視聴方法についての情報も得ることができるという。

テレビ番組の視聴形態は現在、ライブ視聴のみならず、タイムシフトも含め、「複合的な視聴が当たり前」になってきているという。割合としては、ライブ視聴（放送中の視聴）が75%弱、タイムシフト視聴が25%弱、オンデマンド視聴は約2%と、ライブ視聴が急減している。

### ■放映後の視聴計測も 広告料金カウントに加算

米国ではこうした状況から、放送局と出稿企業、そして視聴計測のニールセンとの間で交渉が進められた。その結果、ライブ視聴以外の視聴についてもCMについて一定の効果があるとし、タイムシフト視聴、オンデマンド視聴による効果もカウントすることになった。現在、全国放送における広告取引の基本となっているのは、放映後3日間の視聴数をカウントする「C3」。一部の放送局と広告代理店の間では、放映後7日間の視聴数をカウントする「C7」による広告取引も行われ始めている。

ニールセンは、ライブ視聴以外の視聴数を測定するための技術の研究・開発を急テンポで進めており、2014年には視聴計測の範囲をテレビとPCに加え、タブレットとスマートフォンにまで広げたという。

また、テレビ番組のみでなく、ビデオクリップなど放送では提供されない映像コンテンツや、ESPNのようなネットワークを介して配信されるラジオ視聴などの測定も実施しているという。このよう







にさまざまな形態のコンテンツの視聴計測をする理由について、ソロモン氏は「広告主からの要望」だと述べ、次のように説明した。「広告主は、多様な広告手段を使って宣伝を実施するため、それらを全て評価することが求められる。そのため、それぞれの異なるプラットフォーム、異なるコンテンツタイプについて、一貫した測定をしている」(ソロモン氏)

また、放送時の広告を「リア広告」、オンデマンドの広告を「ダイナミック広告」と説明。ダイナミック広告ではプログラムにより、視聴者の特性に応じて自動的に広告が配信される。これにより、同じ番組を視聴していても、広告内容は異なる。そのため「ニールセンでは2007年から番組視聴率とともに、広告視聴率と提供している」とした。

ソロモン氏は、こうした広告の状況も含め、「かつてなかったようなデジタル化が進んでいる」と指摘。ニールセンは、そうした時代の流れと業界の要望に応じて、新たな視聴計測技術を開発し、2014年に新しい視聴計測方法を導入した。

その一つ、「デジタル・プログラム・

ルーティング(DPR)」により、新たにタブレット、スマートフォンも含めた視聴デバイスの計測が可能になったという。また、「モバイル・インプレッション」と呼ぶ計測では、ダイナミック広告の計測、分類を実施している。これには、FaceBookなどのSNSでの視聴や、広告視聴に至るまでの流れについてのデータも収集される。

ニールセンでは今後、アップルTVや、マイクロソフト、ソニーなどのゲーム機による番組視聴も計測の対象にしてく計画だ。

このような多種多様なプラットフォームにおける番組やCM視聴動向を把握するために、ニールセンは視聴率計測に「全数調査」の概念を取り入れ、テレビ視聴の延長線上にある視聴(エクステンディッド・スクリーン)を包括的に計測していくという。

講演終了後、ソロモン氏に、クロスプラットフォーム時代におけるテレビ番組のありかた、あるいは米国における放送局の動きなどについて聞いた。

### ■対応を模索する米放送局

「ニールセンはちょうど広告主とテレビネットワークをはじめとするメディアの間に居る。視聴形態が分散しはじめていることは、課題でもあるが、それはある意味では変わりつつある時代に対応して業界の慣習を壊し、新たな状態へと移行する段階だといえる。実際、放送局の中には「昔に戻りたい」と思っている人もいるが、視聴形態・視聴態度の変化はもう避けようのないものであることは、彼らも良く理解している。destructionという言葉が使われるが、広告主の側もそれを受け入れ、活用していかなければいけないという理解になっていると感じている」

「例えば、講演でも紹介した取引指標のC3からC7への移行という議論についても、技術的な進化に伴う視聴形態の変化に応じていこうとする両社の姿勢があったから行われているもの。視聴計測もまた、そうした変化に応じていこう、技術開発を積極的に進めているところだ。ちなみに、現状ではC7を採用しているのは一部であり、特に映画の公開日な

## 「デバイスが変わっても変わらないテレビ番組の魅力」

ど、タイムリーなメッセージを含むCMは、C3が採用されている。C7は「エバーグリーン」、すなわち、ある程度時間を経ても広告メッセージが劣化しないCMで採用されている。例えば、「マカロニ&チーズ」についてのテレビ広告などだ。

### ■始まった広告メディアとしての「主導権争い」

「まず前提として、テレビコマーシャルのスポットCMは今でも、ベストな広告媒体だといえる。テレビCMの予算が今後もマーケティング予算の中で大きな割合を占めていくことは変わらないと思う。しかしそれは、「テレビ」をどう定義するかに非常に深く関わっている。家庭でテレビを介して視聴する場合でも、ネット上のビデオコンテンツとして視聴する場合でも、「テレビ番組」自体の魅力は衰えないだろう。ただ、Netflixやアマゾン、あるいはYouTubeといったメディアは、放送局と共に広告予算を勝ち取る為に戦っている。Netflixは広告モデルではないが、彼らも視聴者の視聴時間を奪い合っているということでは同じだろう。放送局は今後も優れたコンテンツを作り続けるとともに、どうやってそれを視聴者に届けるかということも考えなくてはならないだろう」

### ■ABCネットワークの新たな挑戦

「クロスプラットフォームの時代への模索をしているネットワークもある。先進的な取り組みをしているABCネットワークでは、クロスプラットフォームを前提とした『ABCユニファイド』という番組企画を進めている。これは、番組の視聴率予測の対象を、テレビに加え、PC、モバイル、タブレットなどに広げ、どんな属性にどのぐらいリーチするかをクライアントに提示し、パッケージで販売しようというものだ。広告代理店を介したスポットCMの販売とは大きく異なるアプローチだ。視聴行動が急激に変化しつつある

中、彼等自身が遅れた存在にならないよう積極的に取り組んでいる」

「ニールセンの『クロスプラットフォームキャンペーンレイティングス』は、こうしたクロスプラットフォームの効果を計測する技術だ。今はまだABCが放送、配信しているすべてをカバーできていないが、こうしたネットワークの意欲的な企画を実現するための指標となるよう、今、まさにその実現に向けて開発をしている」

### ■ネットがもたらすグローバル化の波

「正直に言って、ローカル放送局は非常に大きなストレスに晒されていると思う。もともとは、電波の物理的な特性からローカル放送エリアができていたという技術的な側面と、カーディーラーなどのような地域の商圏のマーケティングに

適合してきたという面があった。ところがネットの時代になると、アマゾンのようにローカルな商圏というものが基本的に存在しない。視聴計測においても、ローカルを意識した態勢を維持すること自体がコスト的な問題を抱え始めている」

「個人的には、今後さらに放送ビジネスはグローバルな方向に発展すると思っている。なぜなら、1つはインターネットという技術がグローバルであること、そして、ローカルのビジネスをドライブしていた要因というのが段々減ってきてしまっているからだ。しかも、今までのグローバルは、ローカルのビジネスの寄せ集めのようなものだったが、これからは本当に統合化したグローバル・ビジネスという形に変化していくのではないかと思う」



ニールセン  
シニア・バイス・プレジデント  
エリック・ソロモン氏





写真左から  
株式会社ライゾマティクス  
真鍋 大度 氏  
石橋 素 氏  
千葉 秀憲 氏

## 最新機材とクリエイターの饗宴 展示会の枠を越えた新たな試み 最新映像・音響機器を駆使したパフォーマンスを実現

Inter BEE 2014の2日目にあたる11月20日に開催した「INTER BEE EXPERIENCE」。夕方から開催した第2部「アニバーサリー・ライブパーティー」の「Live Entertainment」では、Inter BEEとの共同制作により、出展した企業の最新機器を用いて、クリエイター集団ライゾマティクスがライブ・パフォーマンスをプロデュースするという、初のコラボレーションが展開された。世界が注目する先端パフォーマンスを手掛けるクリエイターたちと、最新の映像・音響機材が出会う希有(けう)な場となった。

プロデュースを担当したライゾマティクスは、デザイン、アート、建築、数学、工学など、様々なバックグラウンドを持つ個性豊かなメンバーからなるクリエイター集団だ。人気女性3人組テクノポップユニットPerfumeのライブにおけるプロジェクションマッピングをはじめ、CM、PV、ステージパフォーマンスなど、幅広い表現領域で活躍しており、日本ばかりでなく、世界のアートシーン、エンターテインメント業界から注目を集めている。



## 「国際的に活躍する最先端クリエイターが集結」

今回、ライゾマティクスがオーガナイズした3つのパフォーマンスに参加したクリエイターは、いずれも、エレクトロニック・アート、ライブ・パフォーマンスの領域で、国際的に活躍する最先端のクリエイターたちだ。会場となったイベントホールには、早くから開演を待っていた来場者に続き、催しの終わった展示会場や国際会議場から続々と人が流れ込み、開始前には開催を待つ観衆でいっぱいとなった。3つのパフォーマンスは、来場者を最後まで惹きつけ、最後に登壇した関係者に惜しみない拍手がおくられた。

「Performance 1」では、メディア・パフォーマンスグループ「SJQ++」による、即興的な現代音楽と、リアルタイムに呼応するアーティスティックなプロジェクション

映像のパフォーマンスが展開された。

SJQ++の即興演奏にあわせ、プロジェクターから投影された数字やさまざまなモノトーンのパターンなどの背景映像がダイナミックに変化し、音と映像の一体感が感じられた。

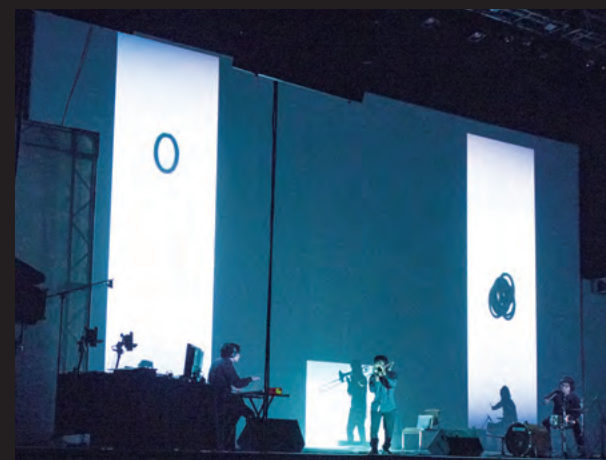
「Performance 2」は「onnacodomo×宮内優里」。ライブ映像を取り入れたパフォーマンスを得意とするVJユニットonnacodomo(オンナコドモ)と、ライブにおいて「音の実験室」ともいわれる多彩な電子音楽、クラブ音楽を操る演奏家、宮内優里のジョイント・パフォーマンスだ。

宮内優里のライブ演奏とマッチした影絵のような映像を、ステージ上のonnacodomoが次々と描き出す。カメ

ラを通じてスクリーンに映し出される映像は、ライブならではの臨場感を醸し出していた。

そして最後の「Performance 3」では、エレクトロニカアーティストとして世界で活動するAmetsub(アメツブ)の楽曲を背景に、ライゾマティクスとダンスカンパニー ELEVENPLAYによる、フィジカルな舞踊と無人飛行物体であるマルチコプターとの競演が繰り広げられた。

一人のダンサーを囲むようにして浮遊する複数のマルチコプター。それらに搭載したライトがダンサーやステージを照らし出す。ダンサーの動きと連動し、まるで自らが意志を持った生き物のように上下左右に動くことで、空間の広がり立体感が感じられた。



SJQ++



onnacodomo×宮内優里



Rhizomatiks×ELEVENPLAY







## ライゾマティクス インタビュー

Inter BEEとライゾマティクスのコラボレーションという今回の企画は、Inter BEEの50回開催を記念したものだ。最新の技術とノウハウが注ぎ込まれた新製品を、最新技術を次々と取り込んで作品に生かすライゾマティクスに使いこなしてもらおうという、これまでの展示会の常識を破る新しいコンセプトのもとに企画が立ち上げられた。機材はすべて、今回のInterBEEの出展企業の提供によるものだ。5月に企画が立ち上がり、7月の出展企業向けの説明会で、出展企業向けに企画が発表。その後、ライゾマティクスは、機材提供を申し入れてくれた十数社のメーカーに訪問して製品を使用し、その中からパフォーマンスと

合致する製品を選び出してきたという。ライゾマティクスのプロデューサー千葉秀憲氏、クリエイターの石橋素氏に、事前インタビューで今回のプロジェクトのねらいについて聞いた。

### ■未来につながる新たな展開

千葉氏は、今回のプロジェクトを引き受ける際の、最初のきっかけを次のように話す。

「50年の節目で、Inter BEEも意識を変えていこうということで、今までの機器展示のみの催しから、コンテンツも見てもらえるイベントにしていこうという考えだと聞きました。また、コンテンツ制作で使うための機材がたくさん出展されるので、それを活用してコンテンツをつくるという視点がとてもおもしろいと

思ったのが、プロジェクトに参加しようと考えたきっかけです」

既存のエンターテインメントでもなく、また、アドバイジングでもなく、自分たちから発信するアート作品ということでもない。「今まで受けてきた仕事の中では珍しいケース」(千葉氏)。

千葉氏はまた、「今回の企画が未来につながる新しい展開であることに意義を感じた」ともいう。「(今回のイベントは)未来に向けて展開するミッションという意味合いも強いと思う。従来型の機材展からコンテンツを発信する展示会へという動きは、米国でも出てきています。そういうタイミングで声をかけていただいたので、いいきっかけになればという気持ちです」(千葉氏)

## 「Inter BEEとのコラボだからこそ実現したライブ」

### ■十数社を巡り事前取材

機材の選定には、直接、十数社のメーカーを訪ねて取材を重ねている。「その中で、今回のパフォーマンスとつながるものを軸に、試行錯誤を続けました。個人的には、いろいろと使いたいものもあったのですが、今回の表現と合致するという出会いがあったものを使わせてもらうことになりました」(千葉氏)

### ■展示会のライブならではの醍醐味

千葉氏は、「プロデューサーの目線から見ても、こういう状況は珍しい」という。「通常の現場だと、これほど機材に触ることはできないですね。どうしても、制作コストの計算が入ってしまいますから。カメラやレンズを選ぶにしても、数字を気にせずに行けるので、欲張りすぎないようにしながらも、選択の幅が広がった点は嬉しい。また、カタログで選ぶのと、実物を見て選ぶのとはやはり違

うと感じました。まさに、展示会、見本市ならではの醍醐味といえます。選んだものをまた、「いつか使おう」というのではなく、その場ですぐに表現につなげていく、という点も、やりやすかったですね」ライゾマティクスが担当するパフォーマンスについて石橋氏は、「ライブ 配信や、VODでも見ることはできるのですが、ステージ上での身体表現など、実空間で行われているものを現場で見ていただくことにこそ意義のあるものになると思います」

### ■製品の技術を活かす 演出の重要性を実感

パフォーマンス終了直後、舞台袖下で、まだ興奮さめやらない様子の真鍋大度氏、千葉秀憲氏、石橋素氏にイベントについての感想を聞いた。

真鍋氏「今回は特殊なケースですが、製品の技術を活かすことを想定しながら

ら演出をするという点には苦労しました。ショーとしておもしろいものにするには、やはり演出が本当に大事なと感じました。同時に、今回参加してくれたクリエイターの方々のおかげでなんとかできた、感謝しています。用いた最新機器はいずれも良く性能を発揮してくれましたが、中でも音はむちゃくちゃ良かったですね」

千葉氏「ほっとしたというのが正直なところですね。思った以上に来場者の方がたくさんきてくれたので、驚きました。どういうスタイルにするか、どういう役割になるかはわかりませんが、来年以降も関わっていきたくと思います」

石橋氏は、「今回は、まったくゼロからのチャレンジだったので、ここまでできて、けっこう、良い感じになったと思います。今回、ライブパフォーマンスを見に来てくれた人が、Inter BEEでこういうものも見られるんだ、ということを知ってくれて、来年も来ようかなと思ってくれればうれしいですね」





## 映画祭を通して「映画」をつないでいく。 日本・アジアにおける映画製作の様々な形

TBS主催で行われている、アジア9地域(日本・中国・台湾・香港・インド・韓国・マレーシア・シンガポール・タイ)のデジタル映像コンテンツの祭典「DigiCon6」。2014年度は、InterBEE開催の前週、11月14日にアワードの発表が行われた。

そのDigiCon6の審査委員の一人である本広克行氏と、審査委員長である杉野希妃氏の二人に「Made in Asiaのクリエイティビティ」と題して、アジアにおける映像制作のこれからや、自身の体験談などを聞いた。

### アジアにおける特殊な映画制作環境

杉野氏は、2005年に女優としてデビュー後、2009年には映画監督も務め、その後プロデューサーなどさまざまな形で映画製作に携わっている。そのきっかけは「人と違うことをしたいな」という思いだった。

「国内のことばかり考えて作るよりは、海外に目を向けたいなと思ったんですね。そこで香港・釜山・カンヌなどの映画祭を飛び



株式会社プロダクション・アイジー  
企画室 監督 / 演出  
本広 克行 氏

まわって、まずはアジアの人たちがどんな作り方をしているのか勉強したり、知り合いを増やしていくことから始めたんですよ。私も普段は引きこもってずっと映画見てるような感じなんですけど、海外に出ると見知らぬ土地で寂しいので、海外から来た者同士で仲良くなれるんですよ

そして、初めて組むことになったのが、マレーシアの監督、リム・カーワイ氏との『マジック&ロス』だ。中国のスタッフに香港のカメラマン、など最終的には7か国の人々が関わった。ところが、アジアでの制作に最初は戸惑うところも多かったという。

「撮影が2週間というタイトなスケジュールなのに、カメラマンが2〜3時間遅れてきたりするんですよ。理由を聞くと「ペットが病気になったから、って。はじめはイライラしていたんですけど、それもばからしくなってしまう。受け入れてやっていくのが途中から楽しくなっていましたね(笑)」

どこかおほかたでないと難しそうなアジアでの映画製作だが、その気風には良い部分も多分にあったという。

「みなさん、自分の肩書を変えながら、仲間内で助け合って映画作りをしているんですよ。普段、監督をしている人が、友達が監督をするとプロデューサーを務めたり、役者として出演したりしているんです。いろいろな役割をこなすことで、映画作りをどんどん進めていく力強さがありますね」

### 娯楽映画だからこそその つながりを見つけていく

一方、『踊る大捜査線』シリーズや『SP』など、多くのヒット番組・映画を監督する本広氏は、地方の映画祭に注力。自身の出身地である香川の『さぬき映画祭』でディレクターを務めている。

「僕が作る映画は娯楽映画なので、僕自身は映画祭には呼ばれないんですよ。各国や地方にも同じような娯楽映画があるからなんです。でも、それならば、そういった娯楽映画を作るような人とかリスペクトしている人々を呼んで、みんなで仲良く観て話をしてもらおうというコンセプトでやっているんですよ」

2015年度は2月13〜22日。若手監督から巨匠まで50人ほどゲストを呼び、上映の後にティーチインも行う。こういったすべてのプログラムから、資金集めまで本広氏が手がけている。

「普段会いたいくて会えない方を呼んだり。ヤングシネマ部門



女優 / 映画プロデューサー  
映画監督  
杉野 希妃 氏

を作ったり、一般の方が出すコンペもありますよ。いろいろな人が交わるので、そこでビジネスが生まれるんです。映画監督は後輩に譲って、そろそろフェスティバルディレクターにでもなろうかな(笑)」

### 映画を作るときに 一番大切にしていること

映画製作にあたって、自分が作りたい映画ばかりではないこともあるのだと本広氏。そんなときは、見てもらう人や出資者に喜んでもらえるように考えて考え抜いて作るのだという。

「ぼくらは商業なので、単に好きなものを作るだけではダメなんです。だから、めちゃめちゃ考えます。また自由に作るのはすごくエネルギーがいることだなと思います」

もちろん、自由に作れる時もたまにはある。その1つが、2月28日に公開される『幕が上がる』という、高校演劇をテーマにした映画だ。

「ロー・バジェットで、最初は出資者もあんまりいなかったんですが、やり続けていたらみんな集まってきてくれて、自由に演出させてもらいました。ももクロ(ももいろクローバーZ)のみんなも、スケジュールをたっぷりとっててくれて。こういう時は、すべてのキャラクターを好きになって愛してやまなくなるんです。それが映画を作っているっていう実感ですね」





## 到来する4K。映像の解像度の向上で、 どのような表現が生まれるのか？

広告に関するビジュアルを扱っている専門誌『コマーシャル・フォト』。スチル、ムービー、そのどちらにも共通するテクニカル的な話題が4K以上の解像度だ。現状直面し、そして創意工夫している点について、同誌編集長・川本康氏をモデレータとして、映画サイド、広告サイドそれぞれについて語られた。



### フィルムの表現力をデジタルで再現する

撮影監督として数多くの映画を手がける山本英夫氏、カラーグレーダーの齋藤精二氏、VFXを手がける大屋哲男氏を招いてのセッションは、フィルムが持っていた色合い、光の表現性をデジタル上で再現するというチャレンジがテーマだ。

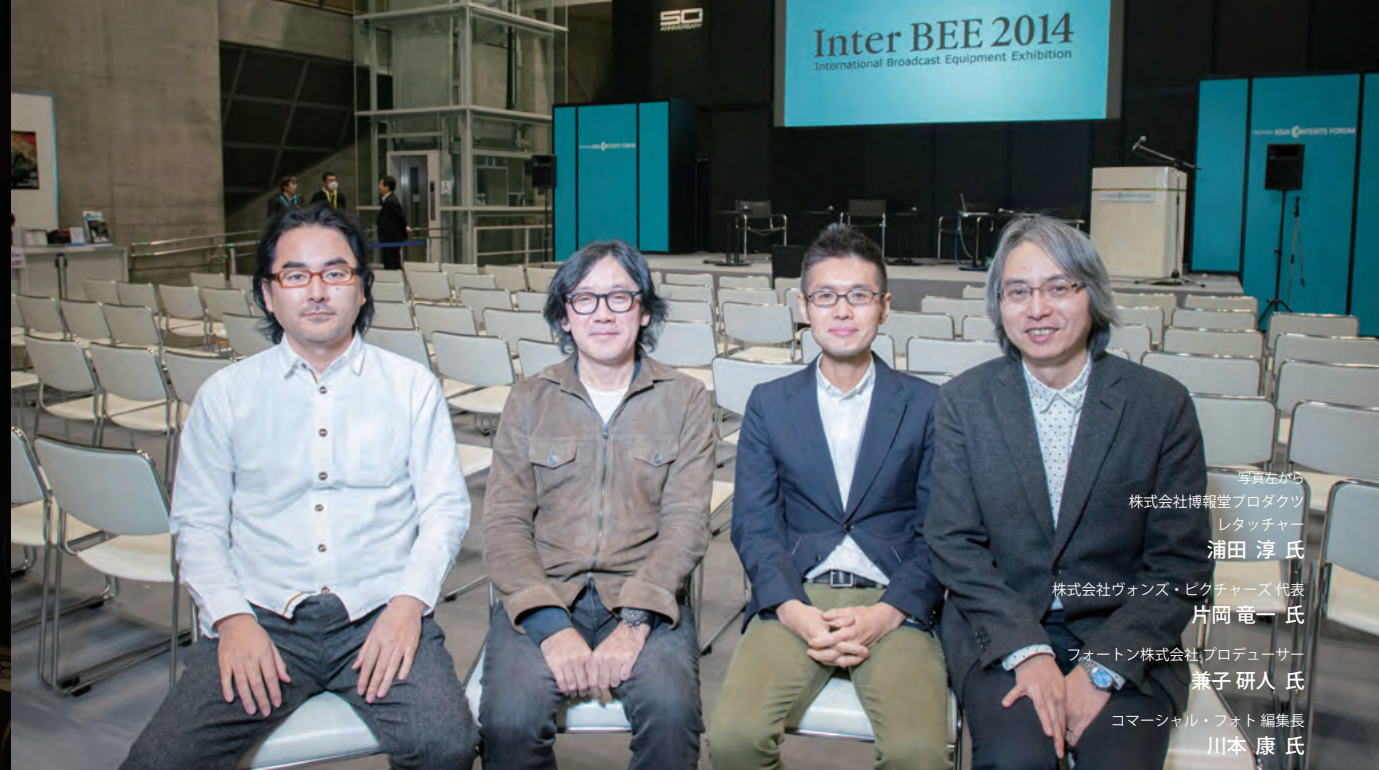
そもそも、富士フィルムが映画用のフィルム製造をやめるというタイミングで、フィルムルックを残しておきたいと思った齋藤氏が、同社のIS-100というデジタル映像制作用色管理システムを使って、フィルムルックを再現させようとしたのが始まりだ。

もともとIS-100は複数のカメラが混在した時に、カメラのカラーをマッチングさせるための機材だが、その機能を拡張した。もちろん、見た目でのマッチングではなく、富士フィルムが持っている実際の特性曲線をIS-100上に移植したものだ。「単なるノスタルジーではないんです。フィルムが何十年もかかってたどり着いた、テクニカルに優秀な色とカーブなんです。これは財産だから絶対に残すべきだと思いました」

そうして生まれた機能を現場で実際に使っているのが、山本氏。「フジのネガにフジのポジをかけあわせるだけではなく、今まで不可能だったフジのネガにコダックのポジをかけあわせる、なんてことも可能」だという。

そもそもこれがなぜ必要なのかと言えば、デジタルでの撮影の場合、最終的に目指す色味の指標が見えないことに難があるのだという。フィルムであれば、どのようなトーンを目指すかで、光をどう再現するのか、色をどう見せるかといった部分でフィルムを選ぶ。だが、デジタルでは、カメラ固有の特性があるだけで、ルックに至るものがない。「フィルムの頃は、合成結果がこのフィルムと同じ色で上がらなければいけない」という目標があったんです。ところがデジタルだと、

写真左から  
株式会社ビクチャーエレメント  
代表取締役 テクニカルプロデューサー  
大屋 哲男 氏  
撮影監督  
山本 英夫 氏  
株式会社ビクチャーエレメント  
取締役 DI プロデューサー  
カラーグレーダー  
齋藤 精二 氏



写真左から  
株式会社博報堂プロダクツ  
レタッチャー  
浦田 淳 氏  
株式会社ヴォンズ・ピクチャーズ代表  
片岡 竜一 氏  
フォートン株式会社プロデューサー  
兼子 研人 氏  
コマーシャル・フォト 編集長  
川本 康 氏

スクリーンで最終的に上映されるイメージを持つことが難しい。モニターで見ている色が、監督やカメラマンが、求めている仕上がりのものであるかが分からなくなったんです。そんな中、どういう表現を目指すのかというルックが出たことで、わかりやすい目標ができたわけですね」と大屋氏。

フィルムルックがデジタルで表現できるということは、現場ですぐさま結果を見られるというメリットにつながる。「どういうトーンにしたいのか、作品世界観を構築する際の出発点として使えますね。また、例えばセットの壁の色やメイク一つとっても、どのような色合いで映るかが、監督やカメラマンだけではなく他のスタッフにも見えることが重要です。現場から後工程まで、どういう方向性を目指しているのかが分かると、どこに注力すべきかもわかります」(山本氏)

セッションでは、このIS-100とRED Dragon 6Kを組み合わせるとどのような表現が可能なのか、テストし、その結果をレポート。300%まで寄っても破綻しない解像力に、新たな映像表現の可能性が垣間見えた。

### グラフィックとムービーが 4Kで融合していく!?

次のセッションは、広告のグラフィックを手がけている、フォートンの兼子研人氏、ヴォンズ・ピクチャーズの片岡竜一氏、博報堂プロダクツの浦田淳氏を迎え、4K以上の高精細映像が写真に影響してきている、という話題だ。

グラフィックでは、スチルによる印象的な写真をさらに演出するためにレタッチが行われる。3人はそれぞれそれらを手がけるが、4Kが出たことで解像度は写真に迫り、4Kからの切り出しや、4K動画のレタッチという、スチルとムービーの融合が始まっているという。

フォートンでは、3年前から自社開発をはじめ、4K映像のレタッチや、8000万画素の静止画カメラを使って撮影した画像から、120秒のCMを制作、ヴォンズでは、同じく4K動画からのグラフィックへの切り出しや、1.5秒ほどの新たな表現世界、デジタルサインエージの可能性を示唆。博報堂プロダクツも、4K映像のレタッチを行っている。

静止画だったからこそ可能に思われたレタッチが、動画へ拡張し始める。グラフィックだから可能だった演出・作画りが、動画へ進出する。「映像とグラフィックの差がなくなってきていると思います。広告はグラフィック先行でイメージが作られ、それをCMなどの映像にしていく流れがありますが、これを同じスタッフが行う可能性が出てきたわけですね」(兼子氏)。

「4Kの到来で、グラフィックをやっていたアートディレクターが、映像を監修するといったことも増えてくると思います」(片岡氏)。

「高精細な映像制作だからこそ、個人の感性や技量が生かされる時代が来ると思います」(浦田氏)。





## InterBEE×日本ポストプロダクション協会 新たなる試み、その一歩

今年の新企画として、Inter BEEと一般社団法人日本ポストプロダクション協会(JPPA)が  
がっちり組み、ポストプロダクションにおける映像技術・表現の今を伝える場を設けた。  
ASIA CONTENTS FORUMに JPPAパビリオンを併設したほか、11月20日は丸一日を『JPPA  
DAY』として、会員各社のプレゼンテーションを実施。

ブース出展はJPPA自体を含めて10社・団体になり、プレゼンテーション数は11社・団  
体に及んだ。

これら企画を精力的に進め、会員各社をまとめてきたのが、JPPA会員企業であるデジタ  
ルエッグの武田佳典氏とピラミッドフィルムの竹井直哉氏、JPPA事務局の柴原邦彦氏だ。



写真左から  
日本ポストプロダクション協会 事務局次長  
柴原 邦彦 氏

株式会社ピラミッドフィルム 執行役員  
ピースリービデオ事業本部 本部長  
竹井 直哉 氏

株式会社デジタルエッグ 常務取締役  
武田 佳典 氏

## 不安のあった企画当初と 会員企業からの意外な反応

はじめは2014年の初春。企画をしJPPA会員企業各社にブ  
ース出展とプレゼンテーションの案内をしたときには、ひょっとす  
ると応募数が少ないという結果もあり得るのではないかと感じて  
いたという。初の試みということもあって、まだ何も指標がなかつた  
ためだ。ところが思った以上の反応があり、ブースの数が足りな  
くなるなどで辞退となる会社も出たほどだった。

「ポストプロダクションという仕事をしている方たちも、こ  
ういう発表の場を求めている部分もあるのかな、と思いました。

加えて、昨今の人材不足という問題もあったと思います。会  
社を知ってもらい場所を出させていただく機会が得られたのは、  
リクルート面でも非常に面白い試みじゃないかなと思いますね」  
と竹井氏。

続いて武田氏も「以前もプロモーション&リクルーティングブ  
ースを、出させていただいたこともあったのですが、その時はJPPA  
の会員ブースは2~3ブースくらいでした。それが今回は9ブ  
ースの出展があり3倍になりました。ブースを出していただく企業には、  
プレゼンテーションも行っていただくのですが、都合でブースを出  
せない企業もプレゼンテーションだけはやりたい、ということで、  
結果11コマのプレゼンテーションにまでおよび、過密プログラム  
になりました。

出展各社のブースを見ると、ビックリするくらい気合いが入っ  
て、以前と違った賑やかさが出ています。プレゼンテーションも  
1社20分という短い時間ですが、その中にギュッと凝縮して、色々  
な取り組みを発表していただけます。こちらも相当気合いが入っ  
ていて、このためのオリジナルコンテンツを制作するのに500万  
円かけたという企業もあるほどです。

この気合いというか熱意が、学生さんやユーザーさんに伝わ  
っていければ、また来年もこういう機会をいただきバージョンアップ  
して、やりたいですね」と話す。

## 各社の特色を出した プレゼンテーションとブースづくり

プレゼンテーションのうち、6つは4Kをテーマとしたものだ。日  
テレ・テクニカル・リソースはドラマの撮影現場での4Kの現状  
を伝え、フィルムとの合わせを東京現像所が、4Kでの評価システ  
ムについてをキュー・テックが、自社の4K映像ソリューションにつ  
いてパナソニック映像がプレゼンを行った。また、マックレイはル  
ックの違う複数の4K撮影機材を使つてのルックマネージメントを  
行ったオリジナルムービーの制作発表を行い、映広では、4K RAW  
の撮影から仕上げまでを実演した。

ポストプロダクションにとって負担の高い4Kだが、各社ともに  
自社の特徴を生かした制作体制を整えていっているのがはっき  
り分かるプレゼンとなった。

このほか、字幕付きCMの制作について、受信機の性能差があ







り字幕表示タイミングの綿密なコントロールができない難しさを手話を交えてデジタルエッグが、東京サウンド・プロダクションは屋ドラ『聖母・聖美物語』のワークフローを、デジタル・ガーデンは中国の成都で行われた日産X-TRAILイベントでのARの制作についてプレゼン。

いずれも盛況だったが、JPPA DAYで一番注目を集めたのがオムニバス・ジャパンのプレゼンテーション「『実写版パトレイバー』撮影からCG合成まで」だ。会場に足を運んでいるメインのクリエイター層に親しみのあるタイトルに加え、中心となるのがCGによるロボットということもあり、VFXワークフローについての関心が高かったように見える。

「今年は、各社さん初めてのプレゼンということもあって、どううふうにやったらいいかを手探りの中でやっていたんですが、来年はもう少し派手になると思いますよ」(竹井)

各社のブースはこれらプレゼンテーションとリンクしたようになっており、映像を見られるだけでなく、直接クリエイターと話せた

り、ARを体験できるなど、各社の意匠が詰まった形となった。

### JPPAの新たな発表の場として

今回新たな試みとして、JPPAが行っているアワード『JPPA AWARDS』の受賞作品についてのプレゼンテーションも行った。JPPA AWARDSは、テレビ番組やCMなどの映像作品において、その中で使われている技術にスポットを当てた賞だ。

2014年度の経済産業大臣賞を授与された『ゴールデンタイム』について、受賞者であるIMAGICAの望月資泰氏に語っていただくなどもした。

竹井氏は言う。「ポストプロダクションという仕事は、なかなか外に発信できるような機会は少ないんですね。こうした場が設けられたのは非常に意義があったと思います。来年もつなげていければ、と考えていますね」



Inter BEE Review 2014 Topics  
Guest Interview 7  
ASIA CONTENTS FOURM

## VFXは何を求められどこに向かっていくのか？ 新たなる成長の兆しとは？

映画やテレビ番組をはじめ、もはや普通のものになってきているVFX。だからこそ、単なるVFXが売りになる時代は終わり、新たな局面を迎えている。VFXは今後、どのようなものになっていくのか、なにが求められていくのか。アメリカを中心に、世界32か国に展開しているVFX関係者のための情報・振興機関であるVES (Visual Effects Society) のエグゼクティブ・ディレクターであるエリック・ロス氏、映画『TRON』以降ハリウッドの大作映画を数多く手がけるVFXスーパーバイザーのジェフ・クライザー氏に話を聞いた。



### 注目されるのはアジアの力

VFXのアーティストだけではなく、監督やプロデューサーなども含め、VFXに関わる様々なプロフェッショナルたちが、企業や国を越えてグローバルに協力し合うことを目的として設立されたのがVESだ。

それぞれの知識や情報を共有することで、VFX全体のボトムアップを果たし、自らの仕事に生かしながら、新たな人材を育成していくことを理念としている。

いまやVFXは、映画やテレビだけではなく、アニメやゲーム、Webコンテンツといった映像の関わるすべての分野に広がっている。また、世界各国さまざまな場所で制作されている。こうしたものをつないでいくことで、新たなビジネスの創出も図っていくという狙いもある。

現在、2700～3000人ほどの会員数を誇り、アメリカ国内が中心ではあるものの、ロサンゼルス、サンフランシスコ、ニューヨーク、バンクーバー、トロント、モントリオール、ロンドン、オーストラリア、ニュージーランドには支部が設けられているほどだ。上映会やセミナーを定期的に開催して教育に努めているほか、VES賞を設けて毎年授賞式を行っている。

精力的に活動を行っているが、これらはすべてボランティアベースで行われている。会員は、VESを通して何が可能かを考え、VES





ビジュアルエフェクツソサエティ  
エグゼクティブ・ディレクター  
エリック・ロス氏



Synthesian Studios  
ビジュアルエフェクツ  
スーパーバイザー  
CEO 共同創業者  
ジェフ・クレイサー氏

の未来のために、積極的に活動をしているのだという。

なかでもエリック氏は、アジアに注目しているという。「人材、才能、教育の各分野において、アジアの未来は明るいと感じている。日本には才能が満ち溢れている。ぜひ、VFXを促進するために支部を置きたい」と話す。そのため日本語の整備も進めている最中だ。ただし、支部は50人以上の会員が必要で、現在20名強ほど。会員になる資格は、VFX関連の仕事に5年以上従事していることと、2名のVES会員からの推薦が必要となる。これらがクリアされれば、アジアでのVFXに新たな動きが出てくる可能性があるという。

## 今後求められるのは技術以外の部分

VFXの今後の成長について、「ストーリーテリングが大事になっていく」と語るのはジェフ氏だ。氏は、1978年にウォルザック氏と共にVFXプロダクション、クレイサー・ウォルザックを設立。『TRON』や『X-メン』などの数多くのハリウッド作品を手がけたのちに、Synthesian StudiosをCEOとして創業。VFXスーパーバイザーとして活躍している。

現在のVFXは、指示から結果を出すまでに求められる時間が、どんどんタイトになっているのだという。新たな技術やツールが生まれ、VFXが若い人でも簡単に作れるような環境が整ってきているため、アニメーションのコストが下がっているのが一因だ。だがその反面、求められる解像度や演出の要求は上がり、複雑化が増している。

そのためにプリプロダクションの重要性が格段に上がっている。監督が持つビジョンをまずはコンピュータ上で再現し、プリビジュアライゼーションを行うことで、時間を無駄にせず、ファイナルに労力を割けるようになる。

特にそれを感じたのは、『ラ・ワン』という作品だった。極小のキューブで構成された人体の表現があるなど、VFX的に多くの見どころがある作品だが、「インドで撮影したのですが、事前に一切プランを立てずに撮影されたんです。もちろん自然な映像にはなりましたが、VFXを作る側にとっては悪夢のようでしたよ」と苦心を語る。

こうした現状の中、他者との差別化を図るのは、コンテンツの力で、感情を巻き込むような映像に他ならないと感じているとのことだ。



## Inter BEE Review 2014 Topics Guest Interview 8 ASIA CONTENTS FOURM



## 女性視点だからこそ生まれている 新たなヒット作品の裏側

ASIA CONTENTS FORUMの新たなアプローチとして、映像業界で働く女性にフォーカスを当てる『Woman's Session』を日経BPヒット総合研究所長・執行役員の麓幸子氏をモデレーターに迎え、開催。第一部は、映画監督の砂田麻美氏に映画監督への道のりを、第二部は日本テレビの大澤弘子氏とTBSの永山由紀子氏に、テレビ局のヒットコンテンツの背景について語っていただいた。

## 自分で切り拓かざるをえなかった 映画への道

砂田氏が映画に関わる仕事をしたい、と最初に感じたのは、小学校高学年ぐらいだったという。家庭用のビデオカメラで撮影したさまざまなもの。それが大きなきっかけだった。

以降、中高と演劇部に所属し、大学では撮影・編集がしたいと、ドキュメンタリーサークルに入って、ずっとドキュメンタリーを撮り、河瀬直美監督の下でアシスタントも行ってた。

ところが、その先の道がなかった。「大学を出て、どうやったら映画の世界に行けるのか、ぜんぜん道がなかったんですね。一度はあきらめて、IT系の会社に入ったんですが、映画の世界の強烈な体験が忘れられなくて、転職を考えるようになりました」

そもそも河瀬監督のスタッフになったのも、トークショーに行き、出待ちをして声をかけたのがきっかけ。岩井俊二監督の元を経て、是枝裕和監督のスタッフに入ったのも、同じくトークショーで待ち伏せして顔をつなぎ、手紙を送ったのがきっかけだった。

そうしてアシスタントとして映画の世界に入ったものの、次のステップに進む道が見えなかった。分岐点となったのが、父親のがん闘病だった。そう長くはないだろう、と思ったとき「これは撮っておかねばならない」と強烈に感じてカメラを回した。

「人がこの世からいなくなる瞬間をつぶさに見たときに、肉親







映画監督  
砂田 麻美 氏

を失った哀しみよりも、人が世界から消える不思議さが先だったんです。答えのないものに答えを出すため、撮影した映像を家にこもって編集したんです」

それを是枝監督に見せたところ、長い沈黙の後「これは映画になると思う」と言われ、そこから監督への道が開けたという。

次に監督した『夢と狂気の王国』は、スタジオジブリの『風立ちぬ』の制作の舞台裏を撮った作品だ。撮影スタッフが現場に大勢入るのが困難だったため、単身カメラを持って挑む形になった。

「私が何かして、いつ出て行けと言われるかわからない。だから本当は、1分でも多く撮っておきたいんです。けれど、監督としてそこにいるなら、今こそ撮るべきだという瞬間を感じとれないと意味がないと思いました」と、カメラを回すのを最低限にするというチャレンジの中、成立させた映画だった。

加えて、相手から搾取している感じがするため、カメラを回すの



日本テレビ情報カルチャー局担当部長  
プロデューサー  
大澤 弘子 氏

は本当は好きじゃないと言う砂田氏。「狙いに行っていると相手に伝わるんですね。毎日の積み重ねの中で見えるものを撮りたいと思います」

その繊細さが、砂田氏ならではの映像を可能にしている背景かもしれない。

### 大事なのはそれぞれが納得できるもの

一方、テレビの現場では、女性ならではの感性による番組が生まれている。

子供と一緒に楽しめる日本テレビの番組『ママモコモ』。プロデューサーの大澤氏が、出産後、子供を連れて日本テレビに行った際、おむつ替えする場所がなくて困ったり、ベビーカーでの動きが大変だと気づいたことが、そもそものきっかけだったという。



TBS テレビ編成局編成部担当部長  
永山 由紀子 氏

社内で、ベビーベッドを置いてほしいという運動を始め、子持ち社員の応援を得たり、イベント開催時に子供が休める場所を考えたり、といった活動をしていく中で「これは番組にならないかな？」という声か形になった。

「生活していく中で、女性には変化があるんですね。キャリアか、プライベートの充実をとるか、悩ましい部分もあります。悩んでると一歩も動けないので、やっちゃえ！という感じですね(笑)」

一方、TBSの永山氏は、ドラマの現場では男性なのに女性視点だったり、その逆もあるため、あまり仕事の間では性別の差は感じないと言う。その代わり、視聴ターゲットは大きく意識している。永山氏が部長を務める編成では、番組タイトルを決定するため、インパクトと分かりやすさをどうするか、などの議論を行ったり、Webで200人の女性にアンケートをとって、傾向をつかむなどを



■モデレータ  
日経BPヒット総合研究所長・執行役員  
日経ウーマン前編集長  
麓 幸子 氏

行っている。また、ドラマの場合は試写会を行い、それをアンケートにとり、「わかりづらい」などの意見が出た部分をもとにオンエアまでに再編集するなどしている。

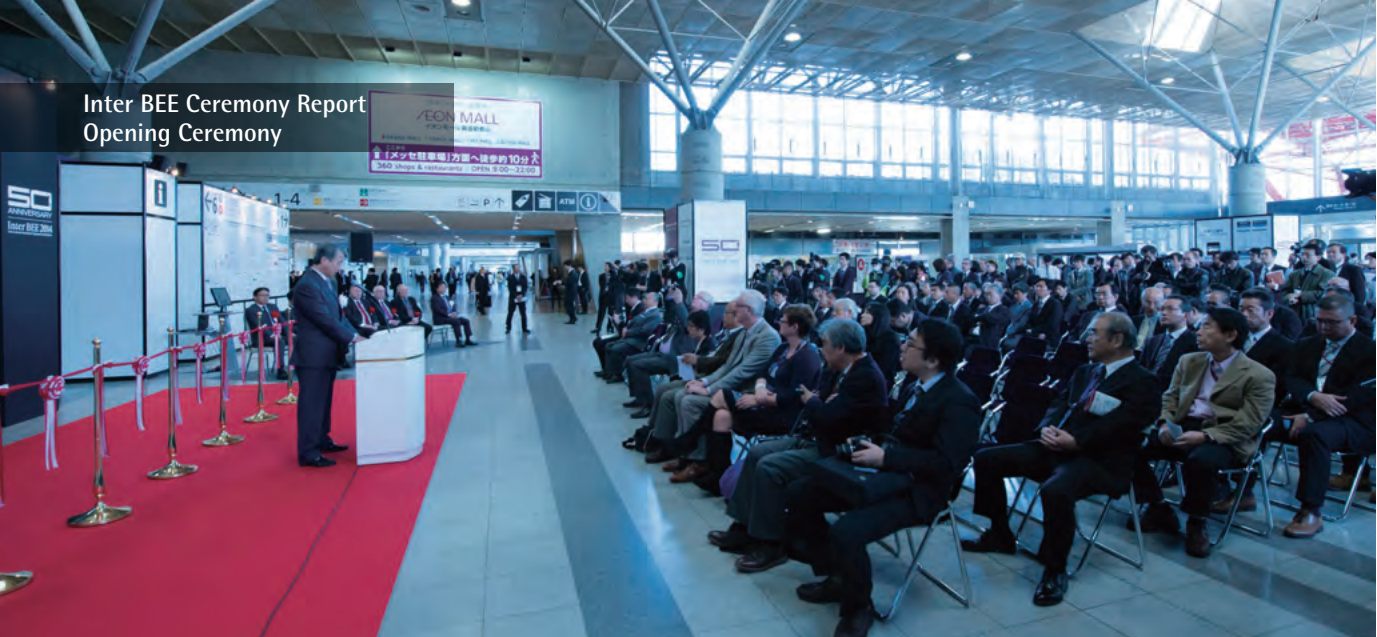
大澤氏も永山氏も、男性だけでは気づかない部分が大事になっていると話す。

「女子は、小さいころから、周りとのなかでの立ち居振る舞いを学んでますよね。正解ではなく、みんながうなずく納得解をだしていける。それが一人一人の満足に応える番組につながっていくと思います」(大澤)

「この仕事、高度のコミュニケーション能力が求められますよね。だから相手に寄り添いながら、聞いてもらえる環境を作ることが大事。女性はしなやかに活躍できると思います」(永山)







# 50回を記念する Inter BEE 2014 が開幕 34カ国・地域から、過去最多、977社が出展 4K・8K 超高精細映像技術がもたらす普及効果に期待

## 「日本の放送・映像・通信技術に対する国際的な関心の高さの現れ」

11月19日(水)、千葉・幕張メッセにおいて、第50回 Inter BEE 2014 が3日間の幕を開けた。初日の10時の開幕を前に、9時40分から2階エントランスホールにおいて、開会式が開催された。

冒頭、主催者を代表し、一般社団法人電子情報技術産業協会の長尾尚人専務理事が次のように挨拶した。

「Inter BEE は、皆様ご承知の通り、1965年に第一回を開催して以来、毎年開催を重ね、おかげさまで今年で50回目を数えるに至った。放送の歴史とともに歩んできた Inter BEE は、これまでご出展いただいた企業の皆様の絶え間ない技術革新の努力と成果、またユーザーのみなさまの映像、音響制作にかけられる情熱に支えられて、これまで技術革新と情報交流の場として発展させていただいた。これまでのみなさまのご支援に関して、この場をお借

りして、御礼申し上げます」

「今回の Inter BEE 2014 は、過去最多の977社が出展。昨年より1ホール多い、全6ホールを使い、世界最高水準の製品・サービスを披露していただく。海外からも過去最多となる33カ国・地域から543社のご出展をいただいた。これは日本の映像・放送・通信産業に対する国際的な関心の高さの現れだと考えている。Inter BEE は3日間で、35,000人の広範なユーザーをお迎えする予定。ご出展の皆様ならびに、会場のみなさまにとり、今回の Inter BEE が情報交流やビジネス創出の場として、その役割を果たし、この機会を効果的に活用され、十分な成果が得られますことをご期待申し上げます」と締めくくった。



テープカット登壇者(左から)  
粕谷 治彦 委員長  
2014年国際放送機器展 実行委員会  
オリンピック・フランコ 氏  
SET 会長  
ピーター・ホワイト 氏  
IABM チーフエグゼクティブ  
宮本 昭彦 氏  
経済産業省 商務情報政策局 情報政策課長  
渡辺 克也 氏  
総務省 大臣官房審議官  
サム・マセイニー 氏  
NAB 最高技術責任者  
ピーター・オーエン 氏  
IBC カウンシル チェアマン  
長尾 尚人 専務理事  
一般社団法人電子情報技術産業協会



■総務省大臣官房審議官  
渡辺 克也 氏

## 「2020年、放送が牽引する超高精細映像技術の関連市場は36兆円に」

来賓として参加した総務省大臣官房審議官 渡辺克也氏は、祝辞の冒頭、Inter BEE 50回を祝して次のように述べた。

「Inter BEE は今年で50回目となるが、これまでの間、日本の社会、産業への発展、世界への展開も含めて多大な貢献があった。Inter BEE 2014 の開催に際し、関係各機関の方々の大変なご尽力に心から敬意を表したい」

渡辺氏は続けて、我が国の成長戦略における「放送技術の活用」の重要性に言及し、「(成長戦略には)IT戦略など、さまざまあるが、その中において放送技術の活用はきわめて重要な位置づけにある。放送技術をいかに、これから展開していくかということが、まさに、これから2020年のオリンピックを見据えながら進んでいく大きな課題だ」と述べた。中でも、「4K・8Kの重要性はひときわ大きい」とし、「4K・8Kを代表する超高精細の映像の世界をどのようにつくっていくのか、そのための処方箋、あるいはそのためのアクションをどうつくっていくかということが、まさにこれから、我々を含めて取り組まなければ行けない課題」と位置づけた。

その上で、4K・8Kロードマップの会合について触れ、6月のCS放送における「チャンネル4K」の放送が開始され、9月に中間的なとりまとめがなされたことを紹介。とりまとめの中で、「2015年には実用放送を、また8K放送に関しては2016年から試験放送、2018年までには実用放送を目指す。さらに2020年の東京オリンピック、パラリンピックに関しては、4K・8Kという超高精細な映像を見られるような、そういう社会の構築にむけて取り組んでいこうとまとめられた。2020年には、4Kテレビが2700万台という試算がある。世帯の半分以上の方々が享受できるような環境も考えていかなければならない」と述べ、テレビ産業の成長と歩調を合わせた放送番組・コンテンツの拡大の必要性を強調した。

さらに、「放送技術は単に放送のためだけでなく、超高精細映像技術を活用して医療や教育、セキュリティなど、非常に幅広い応用範囲が広がっている」と指摘。「2020年の市場規模、36兆円という非常に大きい成長分野の一つとして位置づけられている。関係各位のみなさまもご尽力いただきながら是非進めていただきたい」と結んだ。



■経済産業省 商務情報政策局 情報政策課長  
宮本 昭彦 氏

## 「異なる企業、異なる分野、異業種間の交流が新たなアイデア、活用を生む」

経済産業省 商務情報政策局 情報政策課長 宮本昭彦氏はまず「本年で節目の50回目を迎えた Inter BEE は、これまで、最新技術の発表や幅広い関係者の合流等を通じ、放送文化、又メディア産業の発展に貢献されてこられた。開催にあたっての関係者の方々のご尽力に、改めて敬意を表したい」と祝辞を述べた。

続いて、「昨今、高精細で非常に臨場感が溢れた4K・8Kテレビの登場や、放送番組とインターネットが本格的に連携したスマートテレビなど、新たな視聴形態、付加価値が登場するなど、放送も変化の激しい状況だ」と指摘。「高精細・臨場感といった4K・8Kの特徴を活かし、素晴らしい映像を伝えていくことも、もちろん重要だが、通信技術・音声技術を加え、医療分野への応用など、従来の枠を越えた新しい分野への活用が求められている。さらには、防災・安全、教育や科学など、社会的課題への解決策の貢献、といった領域までも、4K・8Kに期待がかかっている」と述べ、4K・8Kの超高精細技術が幅広い領域での応用可能性があるとした。

宮本氏はさらに「異なる企業、異なる分野、異業種の間の人々の交流というところから新しいアイデアなり、新しい分野への活用というものが生まれてくる。そういう意味で、Inter BEE が、そういう新たな出会いの機会の創出に貢献することを願う」と述べ、Inter BEE が映像・通信・放送の領域の幅広い情報交流の場となるよう期待を込めた。

最後に、Inter BEE 2014 実行委員会 粕谷治彦委員長の開会宣言に続き、テープカットが行われた。







## 50回開催を祝うInter BEEレセプション 音と映像と通信のプロフェッショナル展に 新たな1ページ

Inter BEE 2014 初日の11月19日、午後6時より開催されたレセプションには、日本放送協会、民放各局、および、出展企業各社のエグゼクティブを招いて開催された。50回を記念する大会を意識して、50年の放送・映像産業の来し方を振り返る話題に華が咲いた。レセプションではまた、50回にわたるInter BEEのすべてに出展をしたNECに対して、感謝状が贈呈された。



### 「2020年を見据えた放送サービスの 高度化へ積極的な展示が多数」

冒頭、Inter BEE 実行委員会の粕谷治彦委員長が挨拶に立ち、レセプションの開会の辞として、次のように述べた。

「Inter BEE 2014は、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人電波産業会、さらには総務省、経済産業省の後援により、本日より3日間幕張メッセにおいて『音と映像と通信のプロフェッショナル展』として開催する。国内外からも多くの放送関係者、映像・音響のプロフェッショナルをお迎えしている」

「1965年に第一回を開催して以来、毎年開催を重ね、おかげ

さまで今年50回の記念の年となった。今回、過去最多の977社のご出展をいただき、また海外からも33カ国・地域の543社のご来場があり、本日盛大に開催した。21日の金曜日までにお迎えする来場者は、昨年の32,000名を上回る35,000名を見込んでいる」

「展示会場では2020年に見据えた放送サービスの高度化が積極的に展示されている。国際会議場では、国内外から映像と音響の第一人者によるプレゼンテーションがあり、コンテンツ技術における最新の動向と活発な議論が展開されている。Inter BEEを情報交換や事業を拡大する場として効果的に活用され、十分な成果を得ていただきたい」

## 2020東京オリンピックで8K放送実現へ

来賓として出席した日本放送協会 理事・技師長 浜田泰人氏は次のように祝辞の挨拶を始めた。「(Inter BEEの)第一回が開催された1965年は、50年前の東京オリンピックの翌年になる。東京オリンピックは、NHKはじめ日本の放送関係者が総力をあげて、オリンピックのテレビ放送に努力した。日本の放送が若かりしころ、テレビ放送が若かりし頃だ。東京オリンピックでは、オリンピック初のカラー放送を実施したり、あるいは、撮像機の開発から衛星中継までの機器をすべて国産で開発し、静止衛星を利用して衛星中継を成功させるなど、日本の技術力の高さを世界に示した。その技術力を再度、確認するという取り組みからInter BEEが始まったということは、日本にとって大変ありがたいことだったんだと改めて思う」

浜田氏は続けて、自身が入局した1980年から5年後の1985年に東京に赴任した当時を振り返り「Inter BEEが開催された池袋サンシャインシティに、先輩とともに渋谷から山手線で行った」というエピソードを披露。「1985年は、ちょうど文字多重放送がはじまった年。それから、ハイビジョン放送がはじまり、衛星放送、デジタル放送と、放送は大変な進歩を遂げた」と回想した。こうした日本における放送・映像技術の進展について浜田氏は「Inter BEEに参加されている各企業や、さまざまな関係者の方々が、常にその時代の最先端の技術を放送に取り入れ、製品化していったお陰だと思っている」と述べた。

浜田氏は最後に、2020年の東京オリンピックに話題を転じ「その頃には、多くの方が4K・8Kのスーパーハイビジョン放送をお楽しみ頂けるようにしていきたい。NHKも当然放送事業者としてオリンピックの多くの競技を8Kで放送し、臨場感溢れる競技の様子を多くの方にお楽しみ頂けるようにしたいと考えている」と2020年東京オリンピックにおける8K放送実現に強い意欲を示し、「そのためには、Inter BEEに参加されている皆様方の協力なくしては実現できない。引き続きあと6年、ぜひ一緒に協力しながらその日を迎えたい」と締めくくった。

### 安住することなく、次の50年を目指せ

浜田氏の挨拶を引き継ぐ形で、来賓の一般社団法人電波産業会 専務理事 松井房樹氏が挨拶に立ち、東京オリンピックの翌年に始まったInter BEE第一回当時について、次のように話を始めた。

「Inter BEEがはじまった1965年、昭和40年は、いわゆる『いざなぎ景気』が始まった年。昭和45年までの5年間にわたる日本の未曾有の好景気の時代がまさに幕を開けた年だった。社会生活では、3Cの時代。Car(車)、Cooler(エアコン)、Color TV(カラーテレビ)が庶民が購入したい3種類の耐久消費財としてあげられる時代だった。Inter BEEは、そういう、実に良いタイミングで始まり、上昇気流に乗ったのではないかと。松井氏は続けて、50年にわたり展示会を維持したことに「出展企業も、運営担当者も苦労されたのではないかとした。そうした中で「50年目の今年が、これまでの過去最高の参加者・出展者ということは、皆様の尽力に心か

ら敬意を表する」と述べた。

松井氏は次に、電波産業会が進める、4K・8Kの標準規格化に話を転じた。これまで、2013年3月にスタジオ標準規格を、2014年3月には、伝送規格を策定している。続いて、2014年12月には受信機の標準規格を策定する予定とし、「これで、標準規格が3セットすべてそろおう」とし、「この標準規格を核としてながら、各企業の創意工夫を凝らして、新しい技術・製品を社会に提供することで、放送技術が発展し、ひいては日本の文化の向上に、おおいに寄与するのではないかと。2020年以降も放送文化の発展のために新技術・製品を生み出して欲しい」と標準化をベースにした技術革新に期待を示した。

松井氏は最後に次のような言葉で祝辞をまとめた。

「『継続は力』という。50回目に安住することなく。また2020年を、近い目標に安住することなく、さらに次の50年を目指して、関係の方々の尽力をお願いしたい」

### コンテンツ制作を支える技術開発に期待

最後に、一般社団法人日本民間放送連盟 技術対策小委員長の川口忠久氏が、乾杯の発声を引き受け登壇し、次のように挨拶した。

「Inter BEEは1965年、民放連からの呼びかけで、民放技術報告会の技術展として当時12社が参加して開催された。それから50年。今日に至るまで毎年開催され、3万人以上の方が来場されている一大イベントになった。これまでに携わってこられた関係者の努力に改めて敬意を申し上げる」

「今年はInter BEEのバラエティーに富んだセッションや4K8K関係の展示、講演など、昨年以上に存在感が増していると感じる。超高精細映像コンテンツの制作や放送にあたっての課題はまだ山積している。民間放送事業者としては、より魅力的なコンテンツを制作するために、放送機器、家電メーカーの皆様の技術開発に大いに期待している」



Inter BEE 2014 実行委員会  
粕谷 治彦 実行委員長



日本放送協会 理事 技師長  
浜田 泰人 氏



一般社団法人 電波産業会 専務理事  
松井 房樹 氏



一般社団法人 日本民間放送連盟 技術対策小委員長  
川口 忠久 氏





日本電気株式会社  
放送・メディア事業部  
エグゼクティブディレクター  
土屋 充央 氏

## 次世代放送向け 「統合型テレビ送出システム」を出展

番組制作から送出に至るまで、放送に関するほぼすべての領域をカバーする機材の開発・提供を長年にわたり展開し、現在でも第一線で存在感を示し続けているNEC。同社は唯一、今年50回を迎えたInter BEEのすべてに出展参加している。日本の放送を支え続けてきた企業の、なによりの裏付けといえるだろう。

出展50回目となる今回、「Orchestrating a brighter world」をテーマにブースをデザイン。地上デジタルの基幹システムの更新を念頭に、次世代放送局各社を想定し、「情報系システム」「送出システム」「ファイルベースシステム」など、放送業務全般をカバーする放送ソリューションを提案した。

メインステージでは、地方局の基幹システム更新に向けたマスターシステム、統合バンクシステム、当放システムを統合した「統合型テレビ送出システム」を出展した。

HEVC関連については、今年の2月に発表し、次世代放送フォーラムが実施している4K試験放送「Channel 4K」で使用されている4K/60p対応HEVCコーデック「VC-8150/VD-8100」と現在開発中の2K HEVC素材伝送IPコーデック「VC-810/VD-810」を展示した。オーディオ関連では、デジタル音声調整卓を初出展した。カメラについては、ショルダータイプの小型カメラ「NC-H1200P HDTVカメラ」を出展した。

また、新技術関連ではCMに連動したハイブリッドキャストやTwitterを利用したスクープ検知技術、画像処理技術など、様々な放送ソリューションを展示した。

NECの放送・メディア事業部エグゼクティブディレクター土屋充央氏と放送・メディア事業部長代理の大西正隆氏に今年の出展の狙いや来場者の反響、Inter BEEの位置づけなどを聞いた。



日本電気株式会社  
放送・メディア事業部長代理  
大西 正隆 氏







## 地方局におけるデジタル放送業務の効率化とサイズダウン化を提案

### ■今回の出展の狙い、テーマは何か。

「今年のテーマは『Orchestrating a brighter world』。これは、NECが2015年中期経営計画のもとと注力している『社会ソリューション事業』の一環。世界に向けた事業ブランドメッセージだ。先進のICT技術・サービス・長年培った知見を融合して、世界の人々との『協奏』『共創』を通して社会課題を解決し、より明るく豊かに生きていくための安全・安心・効率・公平な明るい未来を作っていくことを目指している」

「メインステージでは、地方局における地上デジタル放送の基幹システムの更新タイミングに向けたマスターシステム、統合バンクシステム、営放システムを統合した『統合型テレビ送出システム』により、業務効率の改善とシステムのサイズダウン化を提案した。また、Inter BEEと共に歩んだ50年の歴史をNECのヒット商品をパネルにしてブースに展示した」

「HEVCコーデックについては、現在開発中の2K HEVC素材伝送IPコーデック『VC-810/VD-810』を展示した。現時点でも利用できるが、今後はハーフラックサイズにしていきながら、最終的にはFPUへの搭載が目標だ。カメラについては、今年はショルダータイプの小型カメラ『NC-H1200P HDTVカメラ』を出展した。可視光領域に加えて、近赤外波長帯領域の光も撮影し、感度を高める『IR-PASS機能』を搭載したモデル『NC-H1200iR』をベースにしてい

る。バッテリーでの運用とビューファインダー、ハンディリモコンを装着することで、機動性を高めた昼夜問わずクリアな撮影を可能にしたポータブルカメラだ」



## デジタル音声卓をInter BEEに初出展

「オーディオ関連では、デジタル音声調整卓を初出展した。送出システムの信頼性をベースに生放送のスタジオをターゲットとしたデジタル音声調整卓だ。特徴は、音声卓の制御を分散化するために、プロセスおよび棚板の構成を完全2重化した点にある。この、業界初のデュアルデュープレックス構成により、信頼性を向上させている。また、素材選択の操作を容易にするために、ネットワークオーディオ技術を用いた仮想マトリックスを搭載している点なども大きな特徴だ」

「新技術関連では、4K映像のストリーム配信用サーバ、朝日放送と実際に放送したCMに連動したハイブリッドキャスト、スクープ検知技術、画像処理技術などを展示した。スクープ検知技術は、Twitter上でつぶやかれている事件や災害に関するツイートをいち早く検知して通知するシステムだ。既に試用版を開発中で、2015年から数カ月間放送局に試用してもらう予定だ。画像処理技術は、リアルタイムに位置を追従してクロマキーカット割りができるもの。番組の中でクロマキーを使っている場合、ズームやパンなどのカメラが動いた時に背景が不自然になることがある。そこで、カメラの動きに対してリアルタイムに位置を追従してクロマキーカット割りができる画像処理技術を使ったシステムを開発した。関西テレビと共同開発したシステム。従来はパーチャルリアリティシステムを使った高額な物になるが、これはパソコン1台でセンサー無しで手軽に使える」

## 4Kの色空間を統一するコンバータ

「このほか、4K放送システムに対応するカラリメトリ(色空間)コンバータ『VSP-X1000 CC』を出展した。HDTV用の色域規格『BT.709』からUltra HD(4K/8K)の色域規格『BT.2020』に変換できる。『BT.2020』は、番組制作および国際番組交換のための映像フォーマットであることから、オリンピックなど国際間の映像素材交換などで採用される。4K対応機器の中には、HDTVで使われてきた『BT.709』で開発された製品があり『BT.2020』対応機器と混在すると色が変わってしまう。両製品の混在利用を可能にするためにこの変換装置を開発した」

## 画質の向上に高い評価

### ■来場者の反応はどうか。

「多くの方に興味を持って、説明を熱心に聞いてもらっていた。非常にありがたく思っている。4K HEVCコーデックは、Channel 4Kで使っているエンコーダの汎用バージョン。画質が良くなったという評価を数多く頂いている。メインブースに展示した『統合型テレビ送出システム』についても、色々な意見を頂くことができ、今後の開発・提案につながれると考えている。今回、デジタル音声卓を初出展したのだが、NECがデジタル音声卓を出展したことに対して新鮮な反響を得た」

## Inter BEEと共に歩んできた50年 次なる放送産業の発展へ向けともに成長

多くの出展企業の中で、50回すべてのInter BEEに参加した"皆勤賞"を達成したのは、NECだ。文字通り、放送局におけるすべての業務に関連する機器を提供し続けてきた企業として、放送機器展であるInter BEEの顔ともいえる。Inter BEEでは今回、初日に開催したレセプションにおいて、NECに感謝の意を表すとともに感謝状を贈呈した。

常に放送の新たな時代に目を向け、放送業界へ積極的な提案を続けるNEC。NEC 放送・メディア事業部長の相川正美氏は、次のように話す。

「主要顧客である放送局へNECの取り組みや提案をアピールするには絶好の機会であり、最も大切な展示会。今後もInter BEEには大いに期待している。当社はこれまで50年、Inter BEE開始以来欠かさずに出展し、Inter BEEの歴史と共に歩んできた。我々も大きく成長させて頂いていることに対して誇りに思っており、感謝している。これからもInter BEEと共に歩んでいきたい」(相川氏)







## 周波数帯移行へ向けた A型デジタルワイヤレスマイクシステム試作 トップシェアを誇る放送用大型音声卓も注目

タムラ製作所は、メイン展示として、NHKの指導のもとで試作したOFDM方式のA型デジタルワイヤレスマイクシステムを出展した。また、放送局向け、プロ用の大型音声卓の最高機種「NT880」や、「NT880」の機能を継承しながら小型化した音声卓「NT660」などの展示も注目を集めた。1924年(大正13年)に田村ラヂオ商会として設立されたタムラ製作所は放送業界の黎明期から発展に貢献してきた。放送局向け、プロ用の大型音声卓では現在もトップシェアを持つタムラ製作所。今年50周年を迎えたInter BEE 2014にも、ほぼ毎回といえる49回出展し続けている。今年の展示の概要と最新の動向、Inter BEEへの要望などについて、執行役員ブロードコム事業部長 舞木孝一郎氏とブロードコム事業部 副事業部長 吉田信二氏に聞いた。



株式会社タムラ製作所  
ブロードコム副事業部長  
吉田 信二 氏

株式会社タムラ製作所  
執行役員ブロードコム事業部長  
舞木孝 一郎 氏



## 遅延を限りなくゼロに

### ■今年が目玉ともいえる

#### A型デジタルワイヤレスマイクシステムについて。

「今回試作品として展示したのは、高品質なPCM音声信号を伝送可能とする1.2GHz帯のOFDMデジタルワイヤレスマイクシステムだ。地上デジタル放送でも採用されているOFDM(直交周波数分割多重)方式を用いることで、マルチパスに強く、遅延を最少限にとどめている。また、耐干渉モードを搭載することで、電波反射や間欠性の干渉波の影響を受けやすい環境においても音声信号を安定して伝送できる」

「ステージやイベント、番組収録などの音響業務、PAなどで用いられるワイヤレスマイクは、使用する周波数帯によりA型・B型と呼ばれる2種類のワイヤレスマイクが用いられている。中でも、A型は総務省陸上移動無線局の免許が必要で、FPUなどとの混信を避ける計画的な運用が求められている。このA型が、2019年4月までの移行期間を経て、現行の周波数帯からホワイトスペース等の他周波数帯へ移行することになっている」

「デジタル化の課題である遅延は、ステージやライブなどで用いるマイクでは大きな問題。今回開発したOFDM方式のデジタルワイヤレスマイクでは、この遅延を限りなくゼロに近いレベルにまで抑えているのが大きな特徴。NHKの指導のもとに試作をした。発売は2015年春を予定している」



## トップシェア支えるクリエイティビティと安全・安定性

「また、デジタル音声調整卓『NT880』も、会場では大きな注目を浴びた。NT880は、デジタル音声卓のフラッグシップモデル。音質、機能、デザイン、操作性のいずれも、クリエイターの創作意欲をそそる感覚にまでこだわった製品だ。豊富な機能を備えながら、タッチパネルによる高い操作性を実現。同時に使用頻度の高いスイッチを手元に配置するなど、利用の現場を想定し感覚的な操作を可能にしている。また、故障時に瞬時に予備系への運転切り替えができる機能を装備するなど、放送での運用に対応する高い安全性を実現している」

「NT880をはじめ、NTシリーズデジタル音声調整卓は2014年10月末までに、国内外で合計68台を販売している。放送局向けのデジタル音声卓は国内の納入実績でトップシェアを持つ。クリエイティビティとともに、放送業務で必須となる安全・安定性の両方を兼ね備えていることが評価につながっていると考えている」

### 創業理念は製品を通じた社会貢献

「2014年12月にも、岡山放送がショッピングモール内に新設したテレビ放送スタジオ『OHK まちなかスタジオミルン』にNT880を納入している。西日本最大級の商業施設といわれるこのショッピングモールは、JR岡山駅前にある『イオンモール岡山』だ。生放

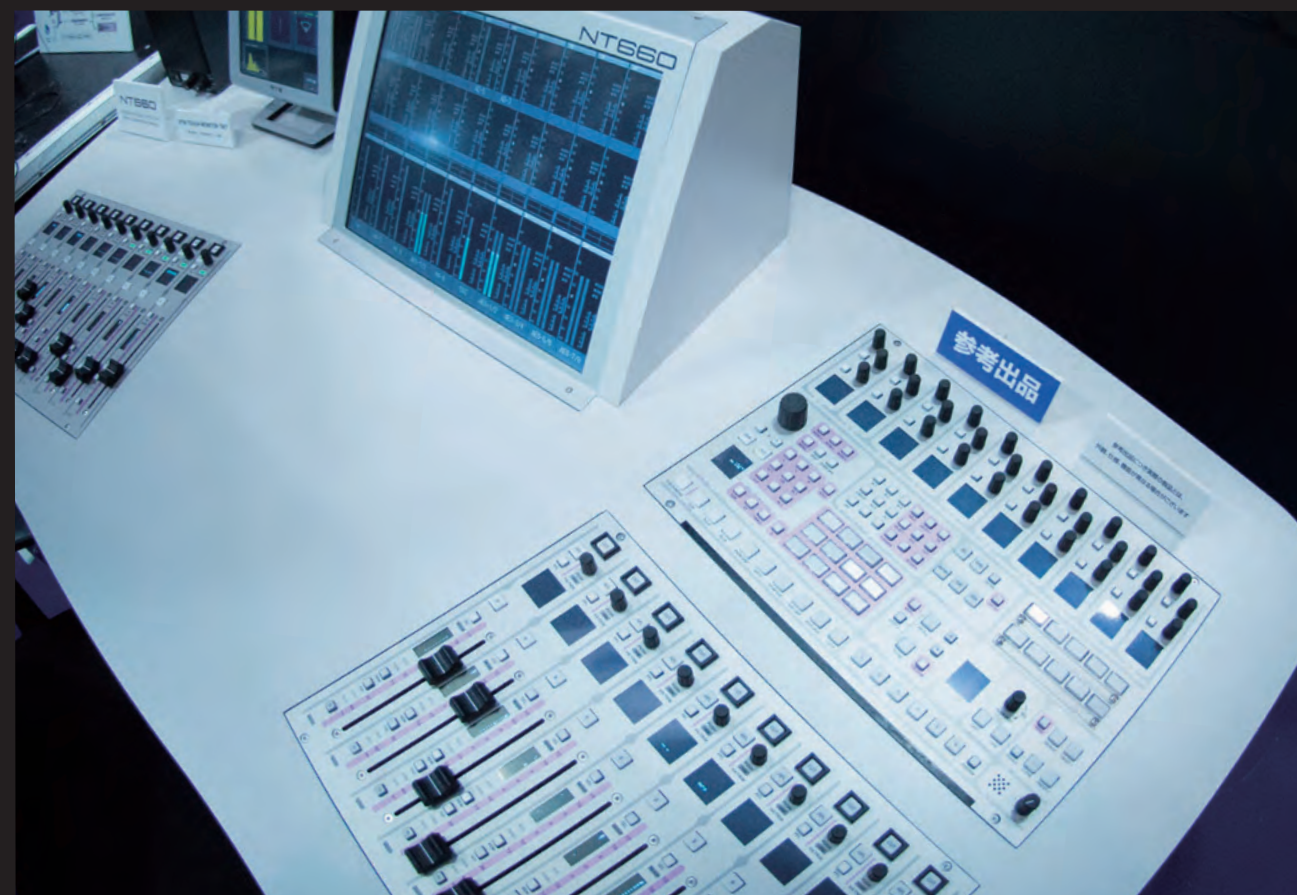
送、収録番組制作機能を全て移転するという点で全国的にも珍しいケースといえる」

「そのほか、プラントなどの作業現場、鉄道・学校などの公共機関など、様々な場面で採用されているワイヤレスマイクを展示した。優秀な製品を通して社会に貢献することが当社の創業以来の理念である。現在はよりグローバルなフィールドで事業展開しているがこの理念は1924年の創業時から今日まで全く変わることはない」

## Inter BEE を世界一の放送機器展に

「10年くらい前までは海外からの来場者も多かったが、ここ数年は外国人の数がやや減ってきていると感じるのが気がかりなこと。グローバルに展開するタムラ製作所にとって海外からもっともっと多くの方が展示会を見に来てほしい。Inter BEE 事務局の方にはNABやIBCにも負けたくないような世界一の放送機器展にしたい。長年出展してきた企業として、それがこれからの50年に望むことだ」

「タムラ製作所ではグループ全体での新たな取り組みを始めている。それがオンリーワン・カンパニーとしてのより魅力的なタムラを構築する為のチャレンジだ。新しいテクノロジーが世界の人々の生活をより便利で快適なものに変える。そして、世界は更に高度な次のテクノロジーを求めていく。そのような目覚ましい発展を続けるエレクトロニクス分野の真ん中で、私たちがタムラにしかできないこと、タムラだからできることを極める。そのために、長年の間に蓄積してきた経験と培ってきたノウハウをベースに、発想力を育て、開発力を鍛え、具現化していく技術力を高めていく」







日本通信機株式会社  
営業部営業1G部長  
高浦秀夫氏

## 新開発のFM親局送信機を出展 FM 同期放送の需要拡大に いち早く対応

日本通信機は、新開発のFM親局送信機や、FM放送中継送信機のシステム展示、災害時等の非常用として放送復旧に迅速な対応が可能な地上デジタル放送親局送信機、UHF伝送装置などをを出展した。同社は1949年(昭和24年)に東京都世田谷区に東西電機株式会社として設立し、一般無線通信機用測定機器の製造販売を開始。51年にはいち早く、テレビジョン送受信測定器の試作研究を開始している。52年に社名を現在の日本通信機に改称して以降も放送施設用の測定器を製作し、59年にはNHKから「テレビ放送開始以来の、放送施設用測定器の製作に協力した」ことを讃える受賞をしている。地上デジタル放送への貢献も数多く、2006年には小規模デジタル中継送信機を販売。また同年、ケーブルテレビ局向けに地上デジタル自主放送装置を販売するなど、放送波の送信・測定で長年にわたる信用と実績を築いてきた。65年の社歴を誇る老舗企業であり、50回の歴史を重ねたInter BEEには、ほぼ毎年の49回、ブースを構え、出展してきた。日本通信機営業部営業1G部長の高浦秀夫氏に、今回の出展の内容、テーマと、Inter BEE出展における今後へ向けた要望などについて聞いた。







## 本格的展開へ向けて FM 同期放送対応送信機を出展

### ■今年の出展のテーマとねらいについて。

「当社は、お客様第一主義を徹底し、お客様満足度と品質の向上に取り組んでいる。また地球環境の保全を全人類の使命と考え、企業活動のあらゆる面で生産性の持続的向上を進め、環境保全に取り組んでいる。品質管理については、長年の経験と実績を踏まえるとともに、2010年からは製造部から品質保証部門を分離独立させ、品質保証部を設置するなど、品質管理のさらなる向上を進めている。キャッチフレーズとして『Challenge to the Best』を掲げ、豊富な自社製品でお客様の要望にこたえている。放送業界においても60年以上にわたり、測定器や送信機、中継機などの機器を開発・製造し社会の発展に貢献している」

「今年の目玉の展示は、新開発のFM放送親局送信機とFM放送中継送信機のシステム展示だ。FM親局送信機は最大出力1KWの同期放送に対応した。FM局は、同期放送を行うことによりエリア拡大や受信効率のアップにつながる。今のところ実験段階の局が多いが、これから本格的な展開が予想される」

「また、AM局でのFM補完放送等にも対応している。これは、



2014年1月に公表した『AMラジオ放送を補完するFM中継局に関する制度整備の基本的方針』にもとづくもの。災害対策・難視聴対策のための送信ネットワークの強靱化の一環として、順次、免許申請が交付されるとともに、FM補完中継局が開設されていく」

「こうした情勢から今後、FM同期放送の対応は、本格的な展開が予想される。今年度中には販売できるよう準備を進めている。展示会でも好評で質問や問い合わせが相次いだ」

### 周波数の有効利用と混信防止に効果

#### ■同期放送とは。

「放送エリア内で同一の周波数により放送する場合、隣接する送信所から同一の周波数が発射されると、重複する地域で干渉が起こり、受信状態が悪くなることもある。この干渉を解決するのが、FM同期放送だ。これにより、周波数を精密に同一にすることにより、混信が避けられるとともに、受信エリアの拡大やリスナーの受信効率の向上につながるため、周波数の有効利用ができる。カーラジオなどによる移動受信時でも利便性が高い。同期放送を導入検討しているFM局が増えつつあり、また今

後、FM補完局においても、同様の干渉を避けるための同期放送システムが求められる」

「今回展示したFM放送中継送信機の基本部は、全チャンネルに対応した。任意の周波数に変換後は内蔵PAで150Wまで増幅できる。親局送信機とのシステムで提案を行っていきたい」

### Inter BEEとともに社会の発展に貢献したい

#### ■Inter BEEのこれまでの出展と今後について。

「1965年にテレビのカラー放送が本格化してきた時代からInter BEEに出展しており、まさにInter BEEとともに当社の歴史があると言って過言ではない。当初は測定器が中心の展示であったが、その後送信機中継機等のラインアップも充実させて現在に至っている。地上波放送局、ケーブルテレビ局、館内デジタル自主放送、さらには天文台や電波天文衛星など、長年の送信技術の蓄積を生かし、幅広い分野へ貢献している」

「こうした当社の技術を広くアピールできる場として、Inter BEEは当社としても最も力を入れている展示会である。今後もInter BEEとともに歩み、通信技術の幅広い分野への提供を通して、社会の発展に貢献していきたい」





## デジタルFPU装置や 4Kカメラの国内初出展など 60年の技術とノウハウを生かし 最新のソリューションを提案

日立国際電気は自動番組送出システム、自動CM送出システム、基地局設備、FPU、4Kカメラなどを出展した。各製品とも、同社の放送・通信業界向けの製品開発・販売における長年の技術とノウハウに裏打ちされたものといえる。日立国際電気は、2000年に国際電気、日立電子、八木アンテナが合併して生まれており、比較的若い会社だが、合併した3社とともに、放送・無線通信・情報処理の領域において長年にわたり多大な貢献をしていることで知られる。

1949年に設立した国際電気は、NTT(当時の日本電信電話公社)に、日本初の誘導無線方式による公衆用列車無線電話装置を納入。以来、長年にわたり無線装置の開発を手掛けてきた。

日立電子のルーツの一つである芝電気は、テレビカメラの国産化に成功。58年には国産初の放送用VTRを完成させ、64年の東京オリンピックでは、VTRを供給するほか、カメラや中継機も同社の製品が提供された。

八木アンテナは、52年に設立後、57年に国産第一号の8段スーパーターンスタイルアンテナを開発。以来、八木アンテナの名前はアンテナのブランドとして長年親しまれてきた。(現在、八木アンテナは、グループ会社と合併し、日立国際八木ソリューションズとなる)

日立国際電気の映像・通信事業部企画本部製品戦略・企画部部長代理の西橋明広氏は「日立国際電気の放送機器は日本の放送とともに歩み60年の歴史を数えている。Inter BEE 50年の歴史の中でもほとんど毎年展示ブースを設けて、最新放送機器を紹介してきた。時代は4Kなどの高精細映像のトレンドに移りつつあるが、当社は常に最新のソリューションを開発し続けてきている」と話す。西橋氏に、今回の出展製品の特徴や、Inter BEEへ期待することなどについて聞いた。



株式会社日立国際電気  
映像・通信事業部企画本部  
製品戦略・企画部 部長代理  
西橋 明広 氏



## 電波移行向けデジタルFPUを提案

### ■今年の展示の目玉は。

「今年のInter BEEでは、自動番組送出システム、自動CM送出システム、基地局設備、FPU、4Kカメラ、8Kカメラなどを出展した。中でも注目されたのは『デジタルFPU装置』だ。当社のデジタルFPU装置は、アナログ時代からの運用ノウハウを生かし、運用時の利便性や信頼性を顧客と共に向上してきた。」

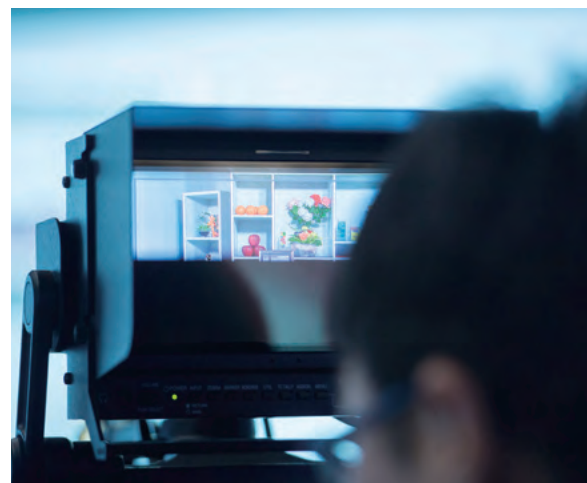
「FPU(Field Pickup Unit)とは、テレビ放送用の無線中継伝送装置のこと。UHF波あるいはマイクロ波を用いて伝送する。電波の直進性の強さを利用して、見通しの良い屋外で送信機と受信機を設置するケースが多い。直接受信できない場合は、高い山や鉄塔などに受信設備を設置してリレーするなどの工夫がなされる。スポーツ中継や災害現場からの報道など、屋外での撮影素材の伝送で用いることが多い。当社は、いち早く地デジ化に向けたアナログ/デジタルのデュアルタイプを商品化し好評を得ており、現在は送信機と受信機の双方で複数のアンテナを使い、通信品質を向上させるMIMO(multiple-input and multiple-output、マイモ)技術を採用した商品など、市場の変化を見越しながら開発を進めている。FPU装置のみならず、災害現場の空撮ヘリや、マラソン中継での多地点で伝送される音声・映像伝送を可能にする受信基地局システムにも力を入れている。」

### ■デジタルFPUの電波移行について。

「日本ではFPUや特定マイクの伝送方式に、UHFおよびSHFに

800MHz帯の周波数が割り当てられていたが、携帯電話の周波数を世界標準に合わせるため、2012年4月、告示周波数割当計画が改正され、電気通信業務(携帯電話事業)に割り当て、放送業務での使用は今から4年後の2019年3月31日までと決まっている。その代替として、1240MHzから1300MHzと、2330MHzから2370MHzの帯域が割り当てられている。2014年度から、すでに実用化への実験もはじまっている」

「FPUシステムも、周波数の変更にもとない新周波数対応へと徐々に更新されることになる。今回出展したデジタルFPU装置も、新周波数に対応しており、移行を目前にした放送現場の関係者から多くの関心を集め、さまざまな質問をいただいた」



## 現場のカメラマンのノウハウを生かせる4Kカメラ

### ■4Kカメラも注目を集めた。

「従来のHD放送カメラで使用されている2/3型B4マウントレンズがそのまま使用できる放送用4Kカメラシステム『SK-UHD4000』を開発した。4Kカメラは当社では国内初出展となる。特殊な変換アダプターを介さずに、標準HDレンズを装着できるのが特長だ。そのため、既存のレンズを有効活用できる。さらに、これまでの放送カメラと同じ操作性、運用性を踏襲しているため、撮影カメラマンの経験を生かした4K映像撮影が可能だ。スポーツ中継現場で課題となっている感度や被写界深度の課題を解決し、今後増える4K映像での番組制作を容易にする画期的な放送用4Kカメラシステムだ」

## 各社とともに東京オリンピックの成果を披露したい

### ■長年出展した立場として

今後のInter BEEにどのように期待するか。

「当社は前身の日立電子の時代から長くInter BEEに出展してきた。Inter BEEは、国内の展示会で最も力を入れている展示会である。合併後はアンテナなどラインアップも拡大しており、最新のソリューションを幅広く紹介する場として位置づけている。来るべき4K/8K時代に向け8Kへの取り組みにも注力しており、次世代放送の一端を担っていきたい。Inter BEEの第一回が、1964年の東京オリンピックの翌年に開催されたときには、当時の放送で活用された多くの成果が展示されたと思う。次の2020年東京オリンピックにおいては、それ以上に日本の放送技術を世界に誇示することになるだろう。その成果を、ともにInter BEEで披露したいと考えており、そうした場としてさらに拡大してもらいたい」



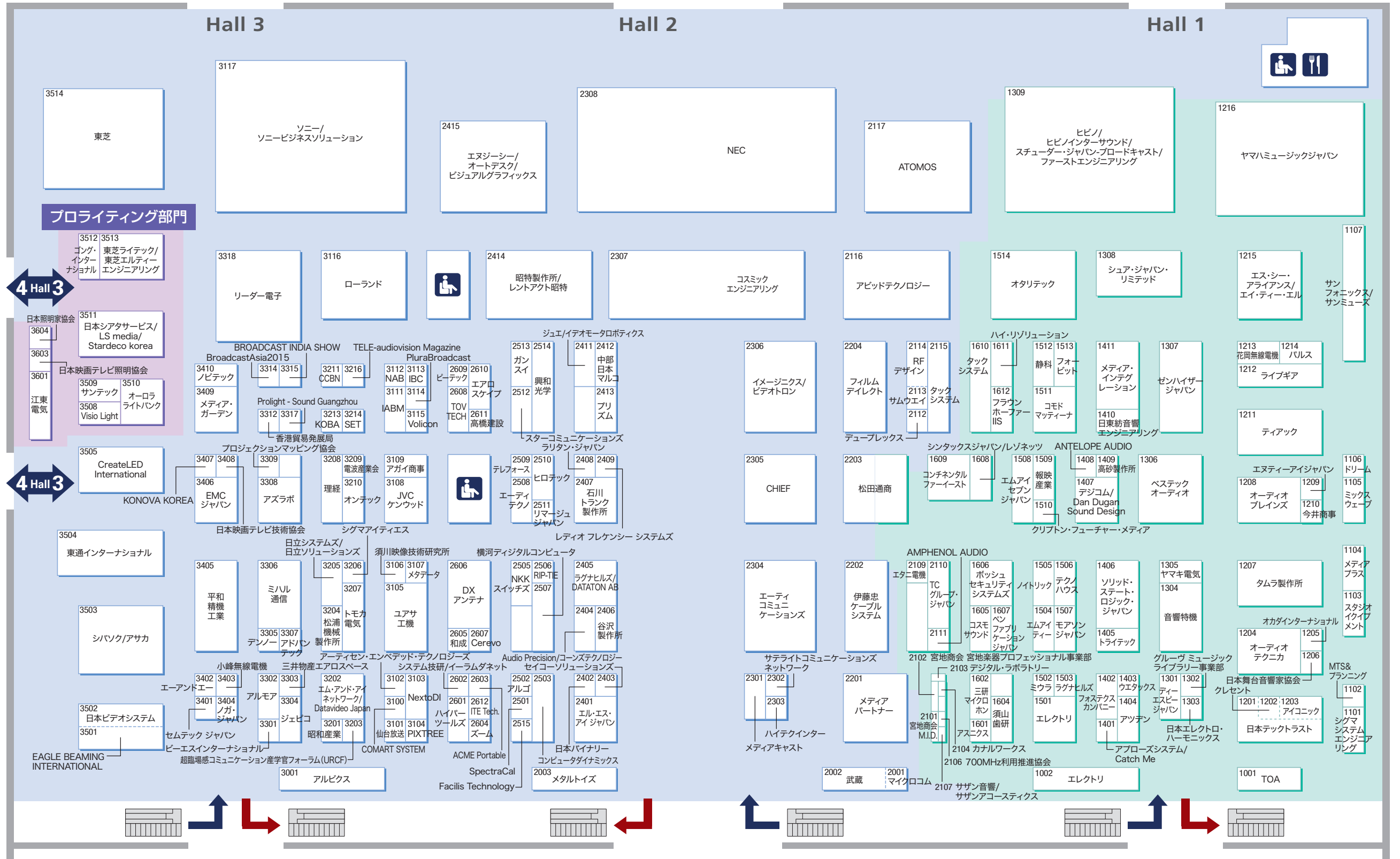






映像・放送関連機材部門

プロオーディオ部門





# Hall 1-2 Professional Audio Equipment プロオーディオ部門

- 1203 (株)アイコニック
- 1601 アスニクス(株)
- 1404 アツデン(株)
- 1401 アフロースシステム(株)
- 1408 ANTELOPE AUDIO
- 2111 AMPHENOL AUDIO
- 1210 今井商事(株)
- 1403 ウエタックス(株)
- 1215 (株)エイ・ディー・エル
- 1215 (株)エス・シー・アライアンス
- 2109 エタ電機(株)
- 1209 エヌディーアイジャパン(株)
- 1508 (株)エムアイセブンジャパン
- 1504 エムアイティー(株)
- 1102 (株)MTS&プランニング
- 1002 (株)エレクトリ
- 1501 (株)エレクトリ
- 1204 (株)オーティオテクニカ
- 1208 (株)オーティオブレインズ
- 1205 (株)オカダインターナショナル
- 1514 オタリテック(株)
- 1304 音響特機(株)
- 2104 カナルワークス(株)
- 1401 Catch Me (株)
- 1510 クリプトン・フューチャー・メディア(株)
- 1302 (有)グレーヴ ミュージックライブラリー事業部
- 1202 (株)クレセント
- 1605 (株)コスモサウンド
- 1511 コモドマッティーナ(株)
- 1609 コンチネンタルファーマーイスト(株)
- 2107 (株)サザン音響 / サザンアコースティクス
- 1602 三研マイクロホン(株)
- 1107 (株)サンフォニクス/(株)サンミュージ
- 1101 (株)シグマシステムエンジニアリング
- 1512 (株)静科
- 1308 シュア・ジャパン・リミテッド
- 1608 (株)シンタックスジャパン
- 1103 (株)スタジオ・イクイアメント
- 1309 スチューダー・ジャパン・ブロードキャスト(株)
- 1604 (株)須山歯研
- 1307 ゼンハイザージャパン(株)
- 1406 ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株)
- 1409 (株)高砂製作所
- 1610 タックシステム(株)
- 1207 (株)タムラ製作所
- 1407 Dan Dugan Sound Design Inc.
- 1211 ティアック(株)
- 1301 ティーエスピージャパン(株)
- 2110 TCグループ・ジャパン(株)
- 1001 TOA(株)
- 1506 (株)テックノハウス
- 1407 (有)テジコム
- 2103 (株)デジタル・ラボラトリー
- 1405 (株)トライテック
- 1106 (株)ドリーム
- 2106 一般社団法人700MHz利用推進協会
- 1410 日東紡音響エンジニアリング(株)
- 1303 日本エレクトロ・ハーモニクス(株)
- 1201 日本テックトラスト(株)
- 1206 一般社団法人日本舞台音響家協会
- 1505 ノイトリック(株)
- 1611 (株)ハイ・リゾリューション
- 1213 花岡無線電機(株)
- 1214 (有)ハリス
- 1309 ヒビノ(株)
- 1309 ヒビノインターサウンド(株)
- 1309 (株)ファーストエンジニアリング
- 1513 (株)フォービット
- 1402 フォステクスカンパニー
- 1612 フラウンホーファーIIS
- 1306 ベステックオーディオ(株)
- 1607 ペン ファブリケーション ジャパン(株)
- 1509 報映産業(株)
- 1606 ポッシュセキリティシステムズ(株)
- 2203 松田通商(株)

- 1502 (株)ミウラ
- 1105 ミックスウェア(株)
- 2101 (株)宮地商会 M.I.D.
- 2102 (株)宮地商会 宮地楽器プロフェッショナル事業部
- 1411 (株)メディア・インテグレーション
- 1104 (株)メディアプラス
- 1507 (株)モアソニジャパン
- 1305 ヤマキ電気(株)
- 1216 (株)ヤマハミュージックジャパン
- 1212 ライフキア(株)
- 1503 (株)ラグナヒルズ
- 1608 レゾネット(株)

# Hall 2-6 Video and Broadcast Equipment 映像・放送関連機材部門

- 5202 ARDIS TECHNOLOGIES BV
- 3102 アーティセン・エンベデッド・テクノロジーズ
- 2114 RFデザイン(株)
- 3111 IABM
- 5203 IO Industries Inc.
- 2612 ITE Tech. Inc.
- 5505 (株)アイ・ディー・エクス
- 5613 (株)アイ・ディー・エクス
- 4416 アイティールシステムズジャパン(株)
- 5503 (株)アイ・ディ・ケイ
- 3113 IBC
- 6310 iFootage / Fotopro
- 5210 アイベックステクノロジー(株)
- 3109 アガイ商事(株)
- 3503 (株)アサカ
- 4206 (株)アスク
- 4513 アストロデザイン(株)
- 3308 アズラボ(株)
- 5209 アテイン(株)
- 3307 アドバンテック(株)
- 2117 ATOMOS(株)
- 2116 アビッドテクノロジー(株)
- 4410 アミモン ジャパン K.K.
- 2502 (株)アルゴ
- 6111 (株)アルチザネットワークス
- 3001 アルピクス(株)
- 6112 (株)アルメディオ
- 3302 (株)アルモア
- 4406 アンリツ(株)
- 3406 EMCジャパン(株)
- 3501 EAGLE BEAMING INTERNATIONAL CO.LTD.
- 2602 イーラムダネット(株)
- 5507 池上通信機(株)
- 2407 (株)石川トラン製作所
- 2411 (株)イデオモーターロボティクス
- 2202 伊藤忠ケーブルシステム(株)
- 5211 (株)イノコス
- 4305 (株)IMAGICA
- 2306 イメージニクス(株)
- 5614 (株)インターテック
- 4409 INTOPIX
- 4202 ウェイテックビデオコム(株)
- 6309 (株)ヴェレシアンアイランド
- 5603 WELL BUYING INDUSTRIAL CO., LTD.
- 3115 Volicon
- 2610 エアロスタイブ(株)
- 4206 AJA Video Systems
- 4304 EIZO(株)
- 5312 営電(株)
- 5205 ATENジャパン(株)
- 5307 エイム電子(株)
- 3402 エーアンドエー(株)
- 2603 ACME Portable Corp.
- 6121 A.C.ライティング・アジア(株)
- 2304 エーティ コミュニケーションズ(株)
- 2508 (株)エーディテクノ
- 5612 Extron Electronics, Japan
- 4505 Egripment BV
- 3214 SET
- 2308 NEC
- 4506 エヌ・イー・ビー(株)
- 6405 (株)NHKメディアテクノロジー

- 6308 (株)NHKアイテック
- 3112 NAB
- 2505 NKKスイッチズ(株)
- 2415 (株)エヌジーシー
- 5405 エヌ・ティ・ティ アイティ(株)
- 5405 NTTアドバンステックロジ(株)
- 5405 NTTエレクトロニクス(株)
- 5302 (株)エミック
- 6117 エムアイシー・アソシエーツ(株)
- 3202 (株)エム・アンド・アイ ネットワーク
- 2401 エル・エス・アイ ジャパン(株)
- 5304 (株)エルグベンチャーズ
- 5208 (株)エレクトリ
- 2404 Audio Precision / コーンズテクノロジー(株)
- 2415 オートデスク(株)
- 6121 (株)オールクリエーション
- 3210 (株)オンテック
- 5303 (株)オンリーススタイル
- 4512 カールツァイス(株)
- 4402 (株)快適空間FC
- 5105 カナレ電気(株)
- 5406 カベラシステムズ
- 5406 カリーナシステム(株) / カベラシステムズ
- 5206 関西通信電線(株)
- 2513 (株)ガンズ
- 6215 キヤノン(株) / キヤノンマーケティングジャパン(株)
- 4202 (株)キャムキャスト7
- 4201 共信コミュニケーションズ(株)
- 4405 銀一(株)
- 6214 クオンテック(株)
- 5217 グラスバレー(株)
- 6114 東京LED International Pte.Ltd
- 5407 Grip Factory Munich
- 5609 (株)クレセント
- 5101 クロスイメーシング(株)
- 5309 (株)K-WILL
- 6208 (株)計測技術研究所
- 4302 (株)ケンコー・テクノ
- 4302 (株)ケンコープロフェッショナルイメージング
- 2514 興和光学(株)
- 6307 GoPro / (株)タジマモーターコーポレーション
- 2503 (株)コスミックエンジニアリング
- 3407 KONOVA KOREA
- 3213 KOBA 2015 (KOREA E & EX INC.)
- 3100 COMART SYSTEM
- 3403 小峰無線電機(株)
- 5207 (株)コンドープロードキャスト
- 2503 コンピュータダイナミクス(株)
- 5107 (株)サークル
- 6207 (株)サイバネテック
- 2302 (株)サテライトコミュニケーションズネットワーク
- 2113 (株)サムウエイ
- 4301 三信電気(株)
- 5115 (株)サンミュージロン
- 4505 (株)三和映材社
- 5102 (株)三和映材社
- 4406 アンリツ(株)
- 4505 (株)三和プロライト
- 6103 Z3テクノロジージャパン(株)
- 3211 CCBN
- 4206 GB Labs
- 5408 JEITAトップストレージ専門委員会
- 3108 (株)JVCケンウッド
- 5114 (株)JBSクロス
- 5501 (株)ジェービーエネレーターズ
- 3304 (株)ジェビコ
- 3206 シグマアイティエス(株)
- 2602 システム技研(株)
- 5106 (株)システム計画研究所/ISP
- 6122 (株)シナジー
- 5001 (有)シネマックス
- 5206 Synox Tech Co.ltd.
- 3503 (株)シバノク
- 2411 ジュエヒ
- 2414 (株)昭特製作所
- 3201 昭和産業(株)
- 2604 SKYPIX
- 5204 SKYPIX
- 3106 (株)須川映像技術研究所
- 2512 スターコミュニケーションズ(株)
- 5002 (株)ストロベリーメディアアーツ
- 2501 SpectraCal, Inc.
- 4507 (株)スリー・エム
- 4302 スリック(株)
- 4307 セイコーソリューションズ(株)
- 4504 西菱電機(株)
- 4407 (株)セキド
- 5608 摂津金属工業(株)
- 3401 セムテック ジャパン
- 2607 (株)Cerevo
- 3101 (株)仙台放送

- 3117 ソニー(株) / ソニービジネスソリューション(株)
- 6404 (株)ソリトシステムズ
- 2611 高橋建設(株)
- 5305 タキゲン製造(株)
- 6116 立井電線(株)
- 2115 タックシステム(株)
- 5401 田中電気(株)
- 2406 (株)谷沢製作所
- 2305 CHIEF
- 2412 中部日本マルコ(株)
- 3203 超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム(URCF)
- 5215 津幡技研工業(株)
- 6211 (株)TBSテレビ
- 2606 DXアンテナ(株)
- 4206 (株)ディストーム
- 5213 Deity-Talent Sky Holdings Limited
- 3202 Datavideo Japan(株)
- 4414 テクトロニクス社
- 4202 (株)テックニカルファーム
- 5308 (株)テックネット
- 5502 (株)テックハウス
- 2405 DATATON AB
- 2115 (株)テュープレックス
- 3216 TELE-audiovision Magazine
- 4411 TELESTREAM
- 2509 (株)テレフォース
- 5214 (株)テンソー
- 3305 (株)テンノー
- 3209 一般社団法人電波産業会
- 4403 (株)電波新聞社
- 5103 (株)Too
- 6114 東京光音電波(株)
- 3514 (株)東芝
- 3504 (株)東通インターナショナル
- 5212 (株)東通クリエイティブ・ビジョン
- 2608 TOV TECH Co., Ltd.
- 3207 トモカ電気(株)
- 5003 (株)トラフィック・シム
- 4511 (株)ツクウエーメーションテクノロジー
- 5301 ニッキャビ(株)
- 6115 日産住金溶接工業(株)
- 5111 日本アンテナ(株)
- 3408 一般社団法人日本映画テレビ技術協会
- 5403 日本通信機(株)
- 2402 日本ハイナリー(株)
- 3402 (株)日本ビデオシステム
- 5216 日本マイクロソフト(株)
- 5112 日本無線(株)
- 5313 (株)ニューテック
- 6120 (株)ネトロン
- 3103 NextoDI Co., Ltd.
- 4404 ネットワークエレメントロニクスジャパン(株)
- 4403 ノガ・ジャパン(株)
- 3410 (株)ノビテック
- 5601 野村ユニソン(株)
- 4106 Harmonic Japan 合同会社
- 2303 ハイテックインター(株)
- 2601 ハイパーツールズ(株)
- 5402 HighPoint Technologies, Inc.
- 5108 パナ電子工業(株)
- 4308 パナソニック(株)
- 4308 パナソニック システムネットワークス(株)
- 5114 VARAVON
- (株)VARAVON
- 5104 パンサー社
- 5102 パンサー社
- 3301 ビーエスインターナショナル(株)
- 4306 (株)PFU
- 2609 (株)ピーテック
- 3104 PIXTREE, Inc.
- 2415 ビジュアル・グラフィックス(株)
- 5410 (株)日立国際電気
- (株)日立システムズ
- 5404 (株)日立製作所
- 3205 (株)日立ソリューションズ
- 5504 (株)ビデオサービス
- 4304 ビデオジェット・エックスライト(株)
- 2306 ビデオロン(株)
- 5409 平河ビューテック(株)
- 2510 ヒロテック(株)
- 2515 Facilis Technology Inc.
- 2204 フィルム デイテクト
- 4412 フィルムライト(株)
- 6209 (株)フェアライトジャパン
- 4307 (株)フोटロン
- 4504 フォレストデザインシステムズ(株)
- 4105 フォントワークス(株)
- 5506 富士通(株)
- 4207 富士フィルム(株)
- 5310 (株)アジミック
- 5109 富士ライト商事(株)

- 4501 (株)府中技研
- 5306 (株)美音ビデオエージェンシー
- 4101 ブラックボックス・ネットワークサービス(株)
- 6505 ブラックマッシュデザイン(株)
- 6305 (株)フラッシュバックジャパン
- 6213 (株)フラーナル
- 5301 (有)フランネット
- 2413 (株)プリズム
- 6120 PRINCETEL, INC.
- 3114 Plura Broadcast Inc.
- 5110 古河電池(株)
- 3314 BroadcastAsia2015
- 3315 BROADCAST INDIA SHOW
- 5501 ブロードデザイン(株)
- 3309 一般財団法人プロジェクションマッピング協会
- 4502 (株)プロスパー電子
- 4408 PRODRONE
- 5201 PROMISEテクノロジー(株)
- 3317 Prolight-Sound Guangzhou
- 6121 プロライト・ダウティ(株)
- 3405 平和精機工業(株)
- 4208 (株)朋来
- 5615 報映産業(株)
- 6124 (株)ポーンデジタル
- 6306 北陸電話工事(株)
- 4303 北海道日興通信(株)
- 3312 香港貿易発展局 東京事務所
- 2001 (株)マイクコム
- 5311 (株)マウビック
- 3204 (株)松浦機械製作所
- 2203 松田通商(株)
- 4202 マンフロット(株)
- 3303 三井物産エアロスペース(株)
- 4001 三菱電機(株)
- 5501 三友(株)
- 6307 緑屋電気(株)
- 3306 ミハル通信(株)
- 2002 武蔵(株)
- 5611 武蔵オプティカルシステム(株)
- 5602 (株)メイコーテック
- 3107 メタデータ
- 2003 メタルトイズ
- 3409 (株)メディア・ガーデン
- 2301 (株)メディアキャスト
- 4401 (株)メディアグローバルリンクス
- 6311 (株)メディア・ソリューションズ
- 4102 メモリーテック(株)
- 3105 ユアサ工機(株)
- 6113 ユニアテックス(株)
- 6123 (株)ユニテックス
- 6212 (株)ユニテックス
- 2507 横河デジタルコンピュータ(株)
- 4103 (株)よしみカメラ
- 2405 (株)ラグナヒルズ
- 6504 (株)ラムダシステムズ
- 2408 ラリタン・ジャパン(株)
- 6210 ランサーリンク(株)
- 3318 リーダー電子(株)
- 3208 (株)理経
- 2506 (株)RIP-TIE
- 2511 リマージュジャパン(株)
- 5113 (株)RAID
- 2409 レディオ フレクシー システムズ
- 2414 (株)レントアウト昭特
- 4510 ローテ・シュワルツ・ジャパン(株)
- 3116 ローランド(株)
- 4413 (株)ロケット
- 2605 和成(株)

- 3513 東芝エルティーンエンジニアリング(株)
- 3513 東芝ライテック(株)
- 3603 日本映画テレビ照明協会
- 3511 (株)日本シニアサービス
- 3604 公益社団法人 日本照明家協会
- 3508 Visio Light Inc.

# Hall 6 ICT / Cross Media ICT/クロスメディア部門

- 5604 ISID
- 6401 アイディアアクセス(株)
- 6107 Aspera
- 6304 アドビ システムズ(株) / インテル(株)
- 6303 アマギメディアラボ
- 6403 伊藤忠テクノソリューションズ(株)
- 6205 (株)インディゾーン
- 6203 インデル(株)
- 6206 (株)ウェブテクノロジー・コム
- 6301 AIC Inc.
- 6402 (株)エクスプローラ
- 6002 FS-NET(株)
- 6119 (株)サードウェーブテクノロジー
- 5605 シーティーシー・エスピー(株)
- 6105 ジャパンケーブルキャスト(株)
- 6302 ジャパンマテリアル(株) / Matrox
- 6110 (株)昌新
- 5607 (株)Skeed
- 6001 (株)テクノマセマティカル
- 6102 とくしま4Kフォーラム実行委員会
- 6402 (株)PALTEK
- 5606 (株)ビテオリサーチ
- 6101 プライトコア(株)
- 6102 (株)アラトイーズ
- 6106 Pond5 Inc
- 6003 MEDIAEDGE(株)
- 6204 MotionElements Pte Ltd
- 6201 レッドデジタルジャパン(株) / 西華デジタルイメージ(株)
- 6202 (有)レトロエンタープライズ

## INTER BEE CONNECTED

- 6710 (株)アクトビラ
- 6705 アマゾン データ サービス ジャパン(株)
- 6702 (株)EVC
- 6707 伊藤忠ケーブルシステム(株)
- 6703 (株)インターネットイニシアティブ
- 6714 (株)TBSテレビ / KDDI(株)
- 6711 (株)テレビ朝日
- 6713 (株)ニューフォリア
- 6708 日本テレビ放送網(株)
- 6709 (株)ネクストスケープ
- 6701 (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ
- 6706 富士ソフト(株) / Ooyala Inc.
- 6704 (株)アジレビジョン
- 6718 マルチスクリーン型放送研究会

## JPPA Pavilion@ ASIA CONTENTS FORUM

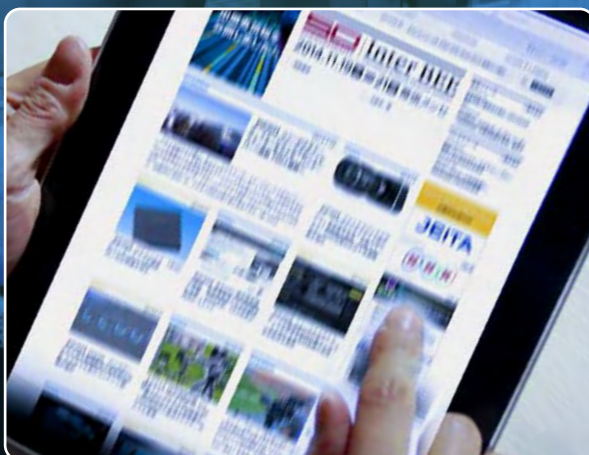
- 6603 (株)映広
- 6601 (株)キュー・テック
- 6606 (株)デジタル・ガーデン
- 6607 (株)デジタルエッグ
- 6608 (株)東京現像所
- 6604 (株)東京サウンド・プロダクション
- 6605 (株)日テレ・テクニカル・リソース
- 6609 一般社団法人日本ポストプロダクション協会
- 6610 パナソニック映像(株)
- 6602 (株)レイ マックレイ



音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト  
**INTER BEE ONLINE**  
*www.inter-bee.com*

Inter BEEでは、出展情報や国内外の関連展示会情報を独自に取材するチーム「Inter BEEニュースセンター」を設置しています。出展製品、展示会情報は、取材チームにより記事・映像コンテンツとなり、会期前、会期中、会期後と年間を通じて、Inter BEE Online内のOnline MagazineやInter BEE TVによって発信されました。

Inter BEE Online 掲載記事 (一部/抜粋)



**Magazine** 2014.10.21UP

ATOMOS (株)

**SHOGUN 製品バージョン出展**  
製品ラインアップをカメラと接続したハンズオンを実施 著名クリエイターによる使用レポート+ワークフローセミナーも開催

**Magazine** 2014.10.28UP

シーティーシー・エスピー (株)

**Elemental社のマルチデバイス配信プラットフォームを初公開**  
持ち込み素材をその場で変換する「トランスコードチャレンジ企画」も開催

**Magazine** 2014.10.25UP

(株)アイ・ディー・エクス

**新製品を含む主力製品のバッテリーを一堂に展示** 最大2kmまで伝送可能な新ワイヤレス伝送システム「CW-25」を出展

**Magazine** 2014.10.29UP

ローデ・シュワルツ・ジャパン (株)

**4K収録から4KTV放送送信までの機器を出展** 4K/120p非圧縮対応リアルタイム再生レコーダーや8K対応ストレージ 韓国で導入実績の4Kライブ放送デモも実施

**Magazine** 2014.11.5UP

(株)エヌジーシー

**4K8K時代に対応する高速ストレージシステムをはじめ、Autodesk最新製品、自社開発のスケジュール管理システム、米社製ライブ対応放送禁止用語除去装置など出展**

**Magazine** 2014.11.10UP

(株)メイコーテック

**40面マルチ対応ビデオウォールコントローラー「MVCシリーズ」出展** 表示ウィンドウ無制限 後楽園「TeNQ」など博物館 公共施設に続々導入

**Magazine** 2014.11.5UP

パナソニック システムネットワークス(株)/パナソニック(株)

**VARICAM 35など4K製品による「Panasonic 4K World」を展開** ドローン用いた「LUMIX GH4U 4K撮影ソリューション」も展示

**Magazine** 2014.11.11UP

(株)テクノネット

**パワポ対応スタジアム向け大型ビジョン表示システムや番組OA対応Twitter連動システム、4Kテロップなど出展**

**Magazine** 2014.11.7UP

報映産業 (株)

**4K対応カラーグレーディングシステム「Baselight-One」やデジタルKVMスイッチ「Dracoシリーズ」でクリエイティブ制作環境をアピール**

**Magazine** 2014.11.11UP

NTTアドバンステクノロジー (株)

**4K60P対応のHEVCデコーダ/トランスコーダを国内初出展** 100dBでクリアな音声集音ソフトなど出展



**Magazine** 

ブラックマジックデザイン(株) 2014.11.11UP

PLレンズマウント対応4Kカメラ、Thunderbolt2対応「Cintelスカナー」、  
「Fusion7」など日本初お披露目




**Magazine** 

(株)ナックイメージテクノロジー 2014.11.15UP

ハイエンドフラッグシップ機「ALEXA 65」を出展  
ALEXA 65による4K映像をデモ




**Magazine** 

レッドデジタルジャパン(株) 2014.11.17UP

RED DRAGONによる非圧縮4K放送ワーク  
フローを初公開  
Vizrtバーチャルグラフィックによる  
カメラワークも披露




**Magazine** 

Harmonic Japan 合同会社 2014.11.18UP

最新メディアプロセッシング紹介  
共有ストレージ「MediaGrid」と  
「Premiere Pro CC」による  
4Kリアルタイム編集を実演




**Magazine** 

(株)ヤマハミュージックジャパン 2014.11.12UP

2015年リリースの新デジタルミキサー  
「CL/QLシリーズ Version 3.0」や、  
ハイエンドオーディオプロダクションシステム  
「Nuendo6.5」など出展




**Magazine** 

NTTエレクトロニクス(株) 2014.11.15UP

映像IPゲートウェイ装置、HEVCリアルタイム  
トランスコードを国内初出展  
次世代メディア転送技術  
MPEG media transportを参考出展




**Magazine** 

(株)マウビック/エリクソン・ジャパン 2014.11.18UP

4KTVサービス配信「TV Anywhere」を提案  
正規パートナー マウビックのブースで  
4K番組配信デモを実施




**Magazine**  **InterBEE TV**

カールツァイス(株) 2014.11.19UP

「ZEISS Compact Zoom CZ.2  
15-30mm T2.9」を国内初出展  
1本のレンズを多様なカメラプラットフォームで  
利用可能




**Magazine** 

カーナシステム(株) 2014.11.14UP

ソフトウェアベースの4K/HEVCエンコード  
システム、暗闇でもカラー撮影が可能な  
超高感度フルHDビデオカメラなどを出展




**Magazine** 

キヤノン(株)/キヤノンマーケティングジャパン(株) 2014.11.16UP

ズーム全域で4K解像度を実現、焦点距離  
1500mm、20倍ズーム・シネサーボレンズを  
世界初公開 BT2020など最新カラーマネー  
ジメント・ワークフロー紹介




**Magazine** 

ヒビノ(株)/ヒビノインターサウンド(株)/  
スチューダー・ジャパンブロードキャスト(株)/  
(株)ファーストエンジニアリング 2014.11.18UP

総合力活かし「音響・映像・照明」の最新機材出展  
4K対応LEDディスプレイ、最新ラインアレイ  
スピーカーなど高性能機材展示




**Magazine**  **InterBEE TV**

(株)アイ・ディ・ケイ 2014.11.20UP

加工が容易なノン・ストリップ・光ファイバー  
ケーブルを出展






Magazine **InterBEE TV**

(株)オンリースタイル 2014.11.20UP



可搬型電源装置「ECO-POWER(エコパワー)」の屋内使用向け新シリーズを出展  
1/4に小型化、無停電装置機能を搭載




Magazine **InterBEE TV**

(株)フジテレビジョン 2014.11.20UP

スマートフォンで観る“第4のテレビ”「フジテレビNEXTsmart」を出展  
配信基盤にクラウドを活用し、スマホと組み合わせ新しいテレビ文化の普及を目指す

Magazine **InterBEE TV**

EIZO(株) 2014.11.20UP

DCI 4K 対応のカラーマネジメント用液晶モニター「CG318-4K」などを出展  
カラーマネジメントの実演、セミナーも実施




Magazine **InterBEE TV**

ソニー(株)/ソニービジネスソリューション(株) 2014.11.20UP

HDR(広ダイナミックレンジ)対応の4K有機ELマスターモニターを出展  
黒浮きなしの自発光 DCI-P3を完全に包含、BT.2020に迫る




Magazine **InterBEE TV**

(株)サザン音響/サザンアコースティクス 2014.11.20UP

国内で唯一のダミーヘッドメーカーサザン音響測定用・レコーディング用ダミーヘッドマイクを展示




Magazine **InterBEE TV**

(株)マウビック 2014.11.20UP



衛星中継車 放送機材を軸にした構成のSNG車を展示




Magazine **InterBEE TV**

アイディアアクセス(株) 2014.11.20UP

クラウドを利用したHEVCファイルトランスコードとBatonによるコンテンツ自動品質検査のデモを実施

Magazine **InterBEE TV**

ハイテクインター(株) 2014.11.20UP

低遅延IP 無線LAN伝送を実演




Magazine **InterBEE TV**

(株)サンフォニックス/(株)サンミュージック 2014.11.20UP

機材の配置自由自在にカスタマイズ可能な4tの多目的車輛 会場内で展示中!




Magazine **InterBEE TV**

(有)シネマックス 2014.11.20UP

垂直・水平方位撮影機材「SPIRAL SLIDER DOLLY -KATANA-」の多様な活用方法を提案中




Magazine **InterBEE TV**

アマゾン データ サービス ジャパン(株) 2014.11.20UP

アマゾンクラウドによるメディアワークフローを紹介 初期投資ゼロ・完全従量課金によるコストメリットを訴求




Magazine **InterBEE TV**

リーダー電子(株) 2014.11.20UP

BT.2020対応4K/8Kマルチ波形モニターLV5490を出展  
新たにフォーカスアシスト機能を搭載


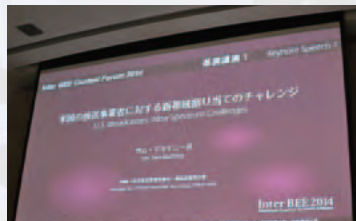





Magazine **InterBEE TV**

基調講演-1 2014.11.20UP

NAB筆頭副会長講演  
米国次世代放送 ATSC 3.0 移行計画  
「2016年に電波移行オークション」

Magazine **InterBEE TV**

(株)テクノハウス 2014.11.21UP

H.264 配信対応のコンパクトスイッチャ  
「BrightEye NXT450」や、  
4K RAW 対応フィールドレコーディングモニター  
「Odyssey7Q」出展




Magazine **InterBEE TV**

アテイン(株) 2014.11.21UP

最新のテレプロンプター、  
スピーチプロンプターを展示  
4形態に変形可能な多用途テレプロンプター  
SSPシリーズを出展




Magazine **InterBEE TV**

平和精機工業(株) 2014.11.24UP

三脚とスライダーを一体化した「ALLEX」  
パン、チルト、スライドの三位一体を実現




Magazine **InterBEE TV**

(株)NHKメディアテクノロジー 2014.11.21UP

8K3Dシアターで実写映像上映  
外科手術の4K3D映像体験、震災3D映画  
スマホをインカムにする技術など  
多彩な放送・通信融合技術を披露




Magazine **InterBEE TV**

DXアンテナ(株) 2014.11.21UP

IPDCを利用した地域情報配信システムと  
高速同軸モデム(EoC)を出展  
テレビの同軸ケーブルを利用して既存施設に  
高速インターネット敷設 最大2kmの伝送可能




Magazine **InterBEE TV**

アドビ システムズ(株) 2014.11.21UP

Adobe Creative Cloud 最新版の進化を  
実機でデモ 355インチの大型4Kスクリーンで  
映像制作のポイントを紹介




Magazine **InterBEE TV**

Pond5 Inc 2014.11.25UP

米N.Y.から出展  
投稿型映像素材販売サイト「Pond5」をアピール  
Adobe Premiere proとのインターフェースを提供




Magazine **InterBEE TV**

(株)シバノク 2014.11.21UP

スカパー JSATに採用された4K用テスト信号  
発生器「TG4000」などを出展  
実績をアピールし、4K放送の進化に貢献へ




Magazine **InterBEE TV**

MEDIAEDGE(株) 2014.11.21UP


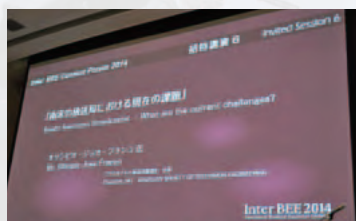
4K放送でも採用実績  
XAVCファイル・プレイヤーを出展




Magazine **InterBEE TV**

招待講演-6 2014.11.21UP

ブラジル放送技術協会が登壇  
南米の放送局における放送のデジタル化の  
現状と課題を紹介

Magazine **InterBEE TV**

クワンテル(株) 2014.11.25UP

複数Pablo Rio切り替え・共有可能なストレージ  
ソリューション「GE2」初展示  
世界初の8K60p高速システム「Pablo Rio 8K」  
も技術展示






Magazine **InterBEE TV**

アプローズシステム(株) 2014.11.26UP

1.2GHz帯デジタルワイヤレスマイクロホン  
周辺機器を出展  
従来のマイクの使い勝手そのままに  
「特定ラジオマイク」に対応




Magazine **InterBEE TV**

アルピクス(株) 2014.11.28UP

ネットワークを通じた次世代型放送システムを  
初出展  
1台のノートPCで動画配信業務が可能に




Magazine **InterBEE TV**

EAGLE BEAMING INTERNATIONAL CO.,LTD. 2014.11.29UP

台湾エースビル社 日本法人を設立し三脚、  
軽量ジブなどの販売を本格化  
カーボンファイバー製軽量小型ジブや  
コンパクトスライダーを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)ウェブテクノロジー・コム 2014.11.30UP

PSDファイルをHybridcast対応  
HTML5コンテンツに変換するソフトを出展  
レイヤーごとの画像出力、  
座標/効果の設定など自動処理




Magazine **InterBEE TV**

西菱電機(株) 2014.11.26UP



5人同時に通信可能な近距離通話用特定小電力  
無線機「G-TALK」やソフトバンクLTE対応の  
通信・音声対応業務用IP無線機を出展




Magazine **InterBEE TV**

池上通信機(株) 2014.11.28UP

新HDTVドッパルカメラ「HC-HD300」を  
初展示  
従来の性能・品質を引き継ぎ、  
新価格でCATV市場へもアピール

Magazine **InterBEE TV**

ジャパンマテリアル(株)/Matrox 2014.11.29UP

リアルタイム3Dキャラクタージェネレーター  
「KarismaCG」を出展  
世界24カ国の放送局などで導入実績




Magazine **InterBEE TV**

ライブギア(株) 2014.11.30UP

「K-array」最新スピーカーや自社開発LEDライト  
出展 色温度可変式ズーム搭載「Liz-W」や  
放送局へ導入進む「Liz-X4」など  
豊富なラインアップ




Magazine **InterBEE TV**

(株)日立製作所 2014.11.28UP

仏Dalet社のMAMシステムを日本で提供  
放送局のカスタマイズにも柔軟な対応  
豊富な導入事例のパッケージ製品で  
低コストのファイルベース化提案




Magazine **InterBEE TV**

(株)谷沢製作所 2014.11.29UP

テレビ中継現場用簡易マトリックス・インカムを  
参考出展 8x8接続可能で同時共有、  
リハーサル/本番用ライン切り替えなどの  
機能も搭載




Magazine **InterBEE TV**

(株)インターネットイニシアティブ 2014.11.30UP

クラウド上で「4K/HEVC」高速変換を提供する  
ソリューションをデモ  
アップロードの手間・時間を回避する  
ハードディスク回収サービスも提供




Magazine **InterBEE TV**

(株)ソリトンシステムズ 2014.12.5UP

カメラ搭載型HEVC映像伝送装置  
「Smart-telecaster Zao」  
公衆モバイル回線でフルHD映像  
最大4カム同時処理 独自プロトコルで安定伝送






Magazine **InterBEE TV**

マルチスクリーン型放送研究会 2014.12.9UP

番組連動アプリ「SyncCast」実演で盛況  
事業モデル構築し全国57局でいよいよ発進




Magazine **InterBEE TV**

エタニ電機(株) 2014.12.10UP



ハイレゾ時代をサポートする測定器出展  
アナログレコードの需要拡大に応じた  
レコードピックアップ特性の測定システムもデモ




Magazine **InterBEE TV**

(株)RAID 2014.12.12UP

F55やALEXAに対応するカメラジンバルを出展  
HD制作環境で4K対応可能なNHKエンタープライズ製  
4K制作支援システムもデモ

Magazine **InterBEE TV**

(株)日本ビデオシステム 2014.12.12UP

国産初の無線対応レンズコントロール装置を発表  
4Kカメラ対応のボックスレンズ装着アダプタ、  
1人で2カメラ操作可能なライブスイッチャー  
なども出展




Magazine **InterBEE TV**

日本テレビ放送網(株) 2014.12.9UP

JOIN TOWNを披露  
高齢化が進んだ地域での災害対策に役立つ  
新たな双方向テレビのあり方を提案




Magazine **InterBEE TV**

(株)アスク 2014.12.11UP

新発売の4Kカメラ「AJA CION」、小型編集システム  
「TriCaster Mini」などを披露  
共有ストレージを高速化する「HyperSPACE」も展示




Magazine **InterBEE TV**

(株)TBSテレビ 2014.12.12UP

KDDIと共同開発による制作者向け  
「BooBoクラウド」を展示  
Google Cloud Platformを活用し  
編集集中の映像をネット上で簡単に共有可能に




Magazine **InterBEE TV**

CHIEF 2014.12.12UP

米社製プロジェクターマウント「CHIEF」(チーフ)  
のラインアップを展示  
放送やサイネージ、オフィス環境など、  
多様な用途を提案




Magazine **InterBEE TV**

MotionElements Pte Ltd 2014.12.10UP

画像から瞬時に関連・類似映像検索を機能  
50万点超の動画素材から  
簡単・かつ瞬時にサーチ




Magazine **InterBEE TV**

共信コミュニケーションズ(株) 2014.12.11UP

「Mistika」最新バージョンによる  
4K60P編集や261インチ・超広視野角・  
世界最小1.5mmピッチLEDによる  
4Kサイネージ等をデモ




Magazine **InterBEE TV**

(株)メディア・インテグレーション 2014.12.12UP

axle Video 製メディアファイル管理  
ソリューション「axle 2015」を初出展  
AVID ISIS 15500との連携もデモ




Magazine **InterBEE TV**

(株)NHKアイテック 2015.1.15UP

「多機能型デジタルサイネージシステム」  
「広帯域光伝送装置」など  
多様なソリューションを展示







Magazine 

(株)アルゴ 2015.1.15UP



1TBのストレージ搭載 H.264対応  
ストリーミングユニット「Epiphan Pearl」  
などを出展




Magazine 

(株)フォトロン 2015.1.15UP

米アーキメディア社製4Kマルチフォーマット  
対応ファイルプレイヤー「Atlas」を一般初公開  
200以上の字幕フォーマットを同期再生可能  
DCP暗号機能を搭載

Magazine **InterBEE TV** 

(株)サークル 2015.1.16UP

マルチコプター空撮システムを展示  
映像制作における需要増に対応  
「安心・安全、かつリーズナブルな価格で空撮を」





Magazine 

(株)テクノマセマティカル 2015.1.16UP



8K60p映像のHEVCリアルタイム  
デコード技術を初公開  
ビットレート200Mbps以下で  
8Kディスプレイに再生





Magazine 

(株)シナジー 2015.1.15UP



台湾 Accusys 社のPCIeバスダイレクト方式  
ストレージ「Accusys ExaSAN」を展示  
2基利用で5,000MB/sの高速転送を実現

Magazine 

ブライトコープ(株) 2015.1.15UP

動画配信と広告をマッチングする  
「Brightcove Once」を紹介  
クラウド上でトランスコードを実施する  
「ZENCODER」も出展

Magazine 

(株)サンテック 2015.1.16UP

高輝度白色LEDを1200個使用した  
出力72Wの大光量大型LEDライト  
「LED LG-1200S」など出展  
テレビスタジオイメージした展示が好評




Magazine 

(株)フジミック 2015.1.16UP

MXF ファイル転送・管理システムなどを展示  
年間8000本以上の字幕制作への対応など  
放送局向けシステム開発の実績を生かし  
営業展開拡大





Magazine 

(株)ストロベリーメディアアーツ 2015.1.15UP



LED大型映像システムの各種ソリューション  
を展示  
2トンの重量に耐える床面設置用高精細LED  
「フロアLEDビジョン」を出展




Magazine 

(株)PFU 2015.1.16UP

NHK-MTブースと8K/60pの  
非圧縮ライブ伝送やJPEG2000による  
4K/60p伝送デモなど最先端映像伝送を実演





Magazine **InterBEE TV** 

(株)シグマシステムエンジニアリング 2015.1.16UP

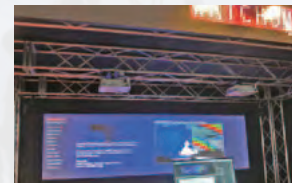

新たにデジタル化したインターカム・ボックス  
4by4シリーズ「SS-3016」を出展  
カスケード機能で8x8のマトリックスも可能に




Magazine 

(株)ラグナヒルズ 2015.1.16UP

スウェーデン社製マルチ映像表示ソフト  
「WATCHOUT」を出展  
複数PCからの映像でプロジェクションマッピング  
などの大画面構築が可能



Magazine 

(株)計測技術研究所 2015.1.16UP

「すべての映像を8Kに」をテーマに出展  
PC、HD、4Kなど様々な映像ソースを  
8Kにアップスケーリング




Magazine 

NEC 2015.1.16UP

超高感度簡易ポータブルカメラ「NC-H1200P」や  
2K HEVCコーデック「VC/VD-810」を  
参考出展




Magazine 

メモリーテック(株) 2015.1.16UP

LTOアーカイブ ターンキーシステム  
「LTARC-1000」を出展  
コンテンツ管理ソフトを内蔵




Magazine 

三菱電機(株) 2015.1.16UP

8K HEVCエンコーダや  
HEVC対応HDTV高速モデムなど  
「次世代映像伝送システムソリューション」を  
テーマに出展




Magazine 

(株)朋栄 2015.1.16UP

FT-ONEを小型化した新製品  
「FT-ONE-S」を世界初公開  
超高感度カメラ「HBC-2000」も  
Inter BEEで初公開




Magazine 

アストロデザイン(株) 2015.1.16UP

小型・軽量2kgのキューブ型8Kカメラヘッド  
「AH-4800」で機動性向上  
「マイクロタイル」を50台使用した  
大型映像システムも展示




Magazine 

一般財団法人プロジェクトマッピング協会 2015.1.16UP


インタービーでマッピング作品を初公開  
プロジェクトマッピングの普及・啓蒙で  
Inter BEEに出展「人気の高さを実感」




Magazine 

東芝ライテック(株)/東芝エルティールエンジニアリング(株) 2015.1.16UP

双方向でLEDをコントロールする  
フルLEDシステムを提案  
「体験できる展示」に高い評価





Magazine 

CreateLED International Pte.Ltd 2015.1.16UP



420インチ4K対応LEDディスプレイを出展  
タケナカ、エヌジーシーの支援を得て  
日本法人設立 国内販売本格化




Magazine 

オーロラライトバンク 2015.1.16UP

LED照明を利用したスタジオ設計の  
見える化をテーマに出展  
配線など裏側の設置事例も公開

Magazine 

興和光学(株) 2015.1.16UP

HDMI対応マルチスキャンマトリックス  
スイッチャー「KSM080xHM2」シリーズを出展  
複数信号をHDMIに一括変換可能




Magazine 

(株)JBSクロス 2015.1.23UP

リモート撮影対応ワイヤーカム、60倍ズーム対応  
マルチコプター空中撮影システム「イーグルアイ」  
などを出展






Magazine **InterBEE TV**

伊藤忠テクノソリューションズ(株) 2015.1.23UP

マルチアングル対応映像配信アプリケーション「GIGANET TV」をデモ SNSとの連携も可能に




Magazine **InterBEE TV**

(株)エムアイセブンジャパン 2015.1.25UP

PreSonus STUDIO LIVE RMラックミキサーを出展 直感的な操作性を実現し Wifiタッチパネルによる遠隔操作も可能に




Magazine **InterBEE TV**

エヌ・イー・ピー(株) 2015.1.25UP

高負荷対応リチウムイオンVマウントバッテリー「BL-BPNE」シリーズを出展 複数電圧を同時に供給可能なマルチコンバートプレートにも対応




Magazine **InterBEE TV**

(株)府中技研 2015.1.26UP

臨時災害放送用の可搬式FM送信装置を出展 自治体からの緊急情報をFM電波で発信し FMラジオで受信可能




Magazine **InterBEE TV**

(株)JVCケンウッド 2015.1.25UP

4KカメラHMシリーズの新製品「GY-HM200」を発表 F1.2光学12倍ズームレンズを搭載 4K 150Mbpsの高解像度記録にも対応




Magazine **InterBEE TV**

(株)メディアグローバルリンクス 2015.1.25UP

放送局の基幹ネットワークをIPで実現する 10Gps96ポートの新型IPビデオルータ MDX4090を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)エーディテクノ 2015.1.26UP



HD BaseT規格対応のHDMI信号分配・延長装置を出展 4K/30p映像を非圧縮で最大4分配可能に




Magazine **InterBEE TV**

伊藤忠ケーブルシステム(株) 2015.1.26UP

OTTサービス向けソリューション「Personal TV」を提案 スマートデバイスへの配信も可能に

Magazine **InterBEE TV**

(株)ヴァレージアイランド 2015.1.25UP


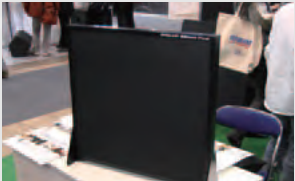
USB3.0対応ユニバーサルマルチスタンダード変調インターフェイス「DTU-315」を展示 地上波、衛星、ケーブルTV すべての放送波に対応




Magazine **InterBEE TV**

(株)静岡 2015.1.25UP

プロミュージシャン、エンジニアなどが開発に参加した音響パネル「SHIZUKA Stillness Panel」を出展 会場でも高い吸音効果を実現

Magazine **InterBEE TV**

(株)トラフィック・シム 2015.1.26UP

放送におけるBCPソリューションを提案 緊急時・災害時の放送対応 航空電波の障害監視なども想定 バックアップ回線システムも装備




Magazine **InterBEE TV**

横河デジタルコンピュータ(株) 2015.1.26UP

放送局用TS/SDI統合監視システムを出展 新たにラウドネスのリアルタイム監視を追加








## 放送業界 日本と世界の状況を概観

Inter BEEの基調講演、招待講演では毎年、国内外から業界を代表するキーパーソンが訪れ、業界の最新動向が紹介される。2014年のInter BEEでは、米国、欧州、南米から放送関連団体、機器メーカー団体の代表者が来日し、各地域の放送の現状と課題が紹介された。日本の放送業界が4K・8K次世代放送の実現へ向けた取り組みを進める中、各地域においても、新たな放送のあり方が模索されている。

### ■8K放送への技術開発進む日本

NHK理事・技師長 浜田泰人氏は日本における次世代の放送へ向けた取り組みについて現状と今後の展望を説明した。日本は2018年の8K実用放送開始を目指し、関連機器や伝送技術の研究開発が進んでおり、番組制作環境も整いつつある。ネットを活用した多彩なサービスで、8K時代における高品質・高機能なテレビを実現すると述べた。

### ■米次世代放送規格でOFDM、HEVC採用

NAB(全米放送事業者協会)最高技術責任者のサム・マセニー氏は、米国が5年後の実現に向けて進めている、新しいテレビ規格ATSC3.0の策定の状況について、OFDMとHEVCを採用することを紹介。米国内では周波数利用の再編が進められており、放送局の周波数帯の買い上げやチャンネルの変更作業などが進められていると述べた。

### ■人材育成・技術習得がメーカーの課題

IABM(国際放送機器工業会)のチーフエグゼクティブのピーター・ホワイト氏、APAC理事のピーター・ブルース氏は、放送機器メーカーは売り上げがプラス基調にあり、黒字企業も増えつつあるが、利益率が低下傾向にあると指摘。放送局の収益構造にネットの影響があり、メーカーは変革へ対応したスキルの習得、従業員の教育が重要であると述べた。

### ■早期の国際標準化が放送生き残りの鍵

欧州最大の放送展示会IBCのピーター・オーエン会長は、各国で開催されたオリンピックが新たな放送技術革新を示すタイミングとなってきたことを指摘。今後の欧州放送業界の課題として、ファイルベースの制作、IP技術、4K・8Kの3つを挙げた。放送規格が早い時期に統一されることが放送業界が生き残る条件であることを示唆した。

### ■地デジ放送の普及努力続くブラジル

ブラジルテレビ放送技術協会(SET)会長のオリンピオ・ホセ・フランコ氏は、同国の地上デジタル放送は現在、小都市における普及率向上がテーマだと紹介。放送網が複雑で、現状においても干渉などの受信問題が多数発生し、周波数帯域は十分でない。政府がTV用の帯域をLTEに割り当てるとしたが、受け入れるのは困難な状況だという。

## 新たな放送・メディアサービスに向けて

NHK理事・技師長 浜田泰人氏



日本放送協会  
理事・技師長  
浜田 泰人氏

近年のメディア技術の進化は、テレビの軽量化・薄型化・大画面化やパソコンの高性能化・小型軽量化を促進し、またADSL・光回線を中心とする通信の高速化・大容量化をもたらした。人々は家庭内だけでなく、いつでも・どこでもメディアに触れることのできる環境が整うとともに、テレビ・ラジオ放送にインターネットをプラスした多様化したサービスを享受できるようになった。

放送技術研究所が10年以上前から研究してきた次世代放送方式「8Kスーパーハイビジョン」は、2014年9月に公表された「4K・8Kロードマップに関するフォローアップ会合中間報告」に従い、2018年の実用放送開始を目指している。リオで五輪が開催される2016年には、BSにおいて4K・8Kの試験放送が開始され、ロシアでW杯サッカーが開かれる2018年には、4K・8Kの実用放送がBS等において開始される予定である。さらに2020年の東京オリンピック・パラリンピック時には、多くの中継が4K・8Kで行われ、視聴者の多くが市販のテレビで楽しむことができる。

8K放送の本格化に向けて、関連機器の研究開発も急がれる。2013年にフル解像度+シアター用高感度を持つカメラが開発され、現在2kgのカメラを開発中。番組制作用の機器も、中継車用、編集室用、22.2ch音声編集スタジオ用にそれぞれ研究開発が進められている。145インチの8Kプラズマディスプレイも開発され、家庭より大画面で楽しめるフレキシブル有機ELディスプレイも開発中。今後の8K機器開発のポイントは「ハイビジョン機器並みの機動性・運用性・操作性を持つ多様な機器」の開発である。

8Kは既に伝送技術の検証も進んでいる。衛星伝送ではBSセーフティネットの空き周波数帯域を利用して8K(1ch)の放送を予定。2014年1月には、地上波の長距離伝送実験に成功している。2014年5月にはNHKとJ:COMでケーブルTVの伝送実験に成功した。

ネットワークの高速化、テレビ・PC・モバイルの高機能化・高性能化と並んで、メディアサービス・利用環境の多様化、視聴者嗜好の多様化が、本格的な放送通信連携サービスの環境を整えてくれた。

Hybridcastサービスは、放送中の番組の巻き戻しや、アーカイブ動画視聴、タブレットとテレビの連携アプリにおける番組参加型サービス、ハイライト動画視聴、マルチビューサービスなどがある。NHKは2013年9月に総合テレビでHybridcastサービスを開始し、2014年9月にそのサービスをEテレ、BS1、BSPにまで拡大した。8K時代には、このHybridcastにより、高品質かつ高機能なテレビに変身することだろう。





# 米国の放送事業者に対する新帯域割り当てのチャレンジ

NAB(全米放送事業者協会)最高技術責任者 サム・マセインー 氏



1996年に始まった米国におけるアナログからデジタルへの規格変更は13年の月日をかけて完成したが、メーカーには莫大な受像機需要をもたらした。放送業者には最善の画像と新しいビジネスチャンスを提供し、視聴者には大画面による過去に経験したことのない娯楽をもたらしたのである。米国政府には空き周波数帯域を販売することによって200億ドルという臨時収入を与えた。この移行からまだ5年しかたっていないのに、米国では既にATSCによる次世代テレビ規格であるATSC3.0の策定が進められている。

このATSC3.0の物理層は、OFDM(直交周波数分割多重方式)とビデオ圧縮技術となるHEVC(高効率ビデオコーディング)になる見通しだ。ATSC 3.0にIPベースの伝送方法を採用すると決っており、これによって同規格は、多くのブロードバンド通信やモバイル通信に対応しやすくなると予想される。

新しい周波数オークション「インセンティブ・スペクトラム・オークション」もあるが、前回と違って、このオークションは規格変更には関係していない。このオークションは、何度か延期になってきたが、現在は2016年に予定されている。このオークションが従来と異なるのは「放送局が使用する周波数帯域を自主的に返上してもらい、オークションで通信事業者に配分し、その収入の一部を放送局に還元する」という点である。政府は、1つには、モバイル・ブロードバンド用にもっと周波数帯域を提供するためにこのオークションを進めている。

このオークションはまずリバース・オークション(FCCが放送局からの周波数買上げ)から始まる。この場合、放送局の対応はa)全ての周波数を返上し放送事業から撤退、b)全ての周波数を返上するがVHF帯に移って放送を継続、c)全ての周波数

を返上するが他の局とチャンネル・シェアリングをして放送を継続、d)オークションに参加せず従来通り放送を継続、という4つの選択肢がある。FCC(連邦通信委員会)では、多くの放送局はそのまま、オークションに参加した放送局はチャンネル・シェアリングかVHF帯へ移行するだろうと考えている。

次のステップは、フォワード・オークション(FCCが無線通信事業者に周波数を販売する)。このステップはリバース・オークションと同時に進行される。競売に掛けられる周波数帯域は、リバース・オークションでどのくらいの帯域がだされるかによって決まる。そして収入の一部が、帯域を返上した放送局に還元される。


最後のステップはリパッキング(チャンネル変更作業)であり、これはオークションに出されたUHFの周波数帯域を「整理統合」するためのチャンネル変更作業である。

FCCはATSC3.0と周波数オークションは全く別のものである、と言っているが、業界では、この二つは関係があり、同時に行われているという意見もある。いずれにしろ、「あらゆる人々に、平等に有益な情報を提供する」のが、われわれ放送業者の務めである以上次世代の放送規格がどうなるかは、大いに気になるところだ。



NAB(全米放送事業者協会)最高技術責任者 サム・マセインー 氏

# 放送技術の将来とは何か

IABM(国際放送機器工業会) チーフ・エグゼクティブ ピーター・ホワイト氏 / APAC 理事 ピーター・ブルース氏 



IABM(国際放送機器工業会) チーフ・エグゼクティブ ピーター・ホワイト氏

IABM(国際放送機器工業会)の種々の最新調査によって次のような実態が明らかになった。

放送機器メーカーの売り上げは、過去2年は年平均5.8%の伸びを示しているが、中小企業に限ってみると、平均-1.7%と低迷している。また利益の伸びもずっとマイナス成長を続けてきたが、ごく最近プラスに転じて、最新の数字では+12.2%となった。また黒字企業の比率もここ2年は60%台を維持し、最新の数字は69.9%となっている。売上高利益率も過去2年間、堅調に推移し、最新は11.3%であった。2012年と2013年は売上高の伸び率はプラスなのに、利益の伸び率がマイナスであった。過去の実績を見ると、このパターンは3年ごとに繰り返されている。

2014年6月の時点での総利益率は、中間値が55%であったが、これは2013年の前半の60%、後半の59%と比べると落ち込んでいる。R&D費用の対売上高比は中間値16%で安定した数字となっている。管理費の売上高比は中間値が30%で、2013年の前半33%、後半38%と比較して下がっている。受注増を阻害する要因として、多くの企業が「スタッフのスキル」を挙げていた。産業の体質変換にスタッフが付いていけない実態が垣間見える。

2013年時点で世界の放送機器の市場規模は400億ドル(約4兆7,000億円)とみられ、米州地区34%、アジア太平洋地区19%、欧州・中近東・アフリカ地区47%となっている。

2014年の放送機器顧客調査によれば、顧客収入の45%は広告、27%はライセンス・フィー、16%はPay TVなどの視聴料であった。概括的に言えば、顧客収入の中で従来型の放送から得られ

る収入は漸減の方向にあり、ウェブ、モバイル、ストリーミングなど新しいビジネスから得られる収入は増える傾向にある。2、3年後はこの傾向がさらに強まると見ている企業が多い。また放送技術への予算とIT技術に対する予算を合算して一つのものとする企業も増えている。また放送用ソフトウェアを、ITストレージ会社から直接購入すると答えている企業も大幅に増加しつつある。

放送機器メーカーの技術者に向けた調査によると、今後の技術の方向性は「IP、ファイルベース、ネットワーキング」だと答えた技術者が圧倒的に多かった。また新技術がもたらす問題点は「ハードからソフトへの転換作業」と「現在のインフラの変換」という答えが多かった。さらに今後の最大の課題については、「変革とスキルの転換」、「従業員の教育」と答えた技術者が大半占めたのである。



IABM(国際放送機器工業会) APAC 理事 ピーター・ブルース氏





# 欧州の放送とその技術、過去、現在、未来

IBC(国際放送機器展示会)IBC カウンシル 会長 ピーター・オーエン氏



欧州の定義は容易ではない。50年前と比較して地形はほとんど変わっていないが、今日の放送と政治の境界線は大変異なっている。放送事業者をまとめている欧州放送連合(EBU)の会員数は欧州の加盟国数を超えて拡大している。23の公用語と60のマイナー言語が存在し、それぞれの言語に対応した専用のテレビ局がある。1993年にEBUは東欧諸国の組織OIRTと合併し、情報交換や技術的および法的なサポートを行っている。

50年前は放送技術革新の時代であった。英国ではBBCが第二チャンネルを設立し、PALカラー放送を開始し、ステレオ・ラジオの実験を行い、POPミュージックの専門ラジオ局を開設した。ドイツやその他多くの欧州諸国がPALカラーを導入する間、フランスはSECAMカラーを導入した。1964年の東京オリンピックでは衛星中継で初めて世界に映像を届けた。1968年のグルノーブルでは初めてオリンピックをカラーで見せた。

これに伴い、Philips、Pye、Cintel、Vinten、EMI、Marconi、Thomson、BoschFernsehなどのテレビカメラが全世界に輸出された。同時に、これら放送機器を紹介するため、モントリオール国際シンポジウム、Inter BEE、IBCなどの展示会が生まれたのも、1960年代であった。

80年代、EBU、SMPTE、ABU、放送事業者・技術者の働きかけにより、デジタル放送の規格が策定された。84年ロス五輪のロケットマンの模様は次世代技術のHDが採用。88年のリレハンメル五輪ではデジタルVTRが広く使用され、規格の違いを乗り越え、日欧が共同で高精細なデジタル衛星画像を届けることに

成功した。その後、92年のバルセロナ五輪では初めてデジタル映像が登場した。

デジタルの圧縮技術と調整が、家庭へのHD伝送の最終的な解決策だが、最初のステップはデジタルSD規格を策定することだった。DVB規格プロジェクトを通して、EBU

はDVB-Tを発展させた。現在では、DVBは全世界で広く使われることになった。多くの欧州諸国は、PALからDVBへ変換しており、欧州の多くのチャンネルはHDへアップグレードされている。

今後の欧州放送事業者の課題は、技術と視聴者の保持である。4K・8Kが迫る中、IP技術はSDIにとって代わるだろうか。視聴者や広告収入もダウンロードサービスPVRやOTTに移行するのだろうか。

結論を言うなら、a)技術は顧客を魅了するが、コンテンツは視聴者を魅了する。b)放送事業者には絶え間ない改善が必要だ。c)世界の放送規格が早急に統一されない限り、モバイルや固定の通信会社のサービスがマーケットを席巻するだろう。

最後に、ネットの普及で放送の危機が叫ばれているが、イギリスの視聴習慣統計では、放送はとても元気である。



IBC(国際放送機器展示会) IBC カウンシル 会長  
ピーター・オーエン氏

# 南米の放送局における現在の課題

SET(ブラジルテレビ放送技術協会)会長 オリンピオ・ホセ・フランコ氏



ブラジルのデジタルTVは1993年に研究がスタートし、2006年にISDB-T規格の採用を決定し、以後日本政府・民間企業の協力を仰ぎながら2007年に放送を開始した。現在の普及率は国全体では62%であるが、リオは94%、サンパウロは89%とかなり高い。課題は人口5万人以下の都市の普及率向上である。

現在ブラジルにおけるTVの普及台数は1億台以上と見込まれ、2012年だけで1300万台のTVが売れた。2014年から16年はリオ五輪を控えてさらに多くのTVが売れると期待されている。

広告費のシェアを見ても、70%以上の圧倒的なシェアを持つTVがさらに堅実に伸びているのに対し、伸びてはいるがインターネットやペイTVのシェアはまだ極端に小さい。

アナログ停波については、2015年にテスト停波が行われ、2016年から2018年にかけて順次主要都市で実施される予定であるが、再送信所を持つ地方自治体は他の優先事項があるため、アナログ停波のタイムスケジュールははっきりしていない。

アルゼンチンのTV普及率は現在82%であるが、民間放送には規制があるため、ほとんどの局は国営である。国会では、デジタル放送に対する国家プランを含む「通信法」が検討されている。すべての放送ライセンスが一時的であるため、送信所に対する投資が進まない。また「国家メディア法」も国会審議中であり、規制の先行きも不透明である。

チリの事情は複雑だ。広告費の中でTVの占める比率を見ると、2010年は51%であったが、現在は42.7%に落ち込んでいる。これはTVがまだアナログで画質が悪いため、デジタルのペイTVに視聴者が移行しているためである。現在デジタルTVの普

及台数は400万台であるのに、なぜTVがアナログなのか、について国会で5年間議論した末、2014年5月にデジタルTVに対する規制が発表された。これによると、地方・文化・教育等を重視するためTV業界にとって厳しい内容となっている。

ブラジルに話を戻すと、政府は2014年の7月にTVとLTEの共存のため、TV用に使われている698MHzから806MHzまでの108MHzをLTEに割り当てることを決定したため将来のTV技術の発展に大きな障害となりそうだ。何故なら現在ブラジルにTVネットワークは大きなものが5つ、中小が15もあるため、周波数帯域が十分でなく、新しく進んだ規格を受け入れるのが困難な状況だからだ。

またTVと通信の相互干渉のため、TV画面が暗くなったり、フリーズしたりする事態が発生しているが、フィルターだけでは干渉を防ぎきれず、視聴者から多くのクレームが寄せられている。



SET(ブラジルテレビ放送技術協会)会長  
オリンピオ・ホセ・フランコ氏



# INTER BEE CONNECTED

## メディアビジネスの可能性探り 多彩な取り組み — 放送の近未来を見据える —

Inter BEE初の企画としてINTER BEE CONNECTEDが開催された。会場の半分が展示スペース、残り半分は100名程度が座れるセミナースペースとなっており、出展者のプレゼンテーションが行われるとともに特別に組まれたセッションが連日催された。

INTER BEE CONNECTEDはその名の通り、放送が通信との融合をはじめた状況を意識した企画だが、その意義はそこにとどまらず、多彩な顔ぶれによるセッションでは、放送業界の新しい成長のヒントが、多くの視点から紹介された。

いまや放送業界は、ネットとの融合がはじまっており、通信を活用した新たなシステムやサービスが次々に出てきている。INTER BEE CONNECTEDの展示エリアでは、そうしたこれまでの枠組みを大きく広げる展示が行われた。展示企業は、新しい取り組みに向けたサービスや技術開発を進める放送局をはじめ、動画配信関係やクラウドサービス、スマートフォン向けのアプリなど、新しい視聴スタイルやビジネスに対応した事業者が一堂に集まった。初めての試みでありながら初日から各ブースには熱心な来場者が訪れ、盛況を博した。

## 次世代の放送・通信の 融合を語り合う場に

そもそもConnectedとはどういう意味か――。発案者である江口靖二氏はオープニングトークで以下のように述べた。「Connectedはインターネットだけではなく、デバイスや他業種、新しいビジネスとも“つながる”という意味です」。放送業界はいま、通信との融合をいよいよ本格的にはじめており、映像を配信する媒体の多様化も含めてビジネスモデルの再構築が必要になっている。それをポジティブに受け止め、新たな方向を探る議論をし、新たなビジネスプレイヤーに参加してもらおう。そのための場として、Connectedは発案された。INTER BEE CONNECTEDを知り、初めて来場した業界関係者も多く、Inter BEEとしても新しい方向性を開く催しとなった。

出展企業はクラウド事業者や、映像配信関連システムの事業者が中心。一見、放送業界ではあまりおなじみではないようで、実はすでに放送局とビジネスをはじめている企業がほとんど。INTER BEE CONNECTEDのテーマに合致した企業が集った。

展示会場内に設けられたINTER BEE CONNECTEDの特設スペースは、半分が展示スペース、残り半分は約100名が座れるセミナースペースに区切られた。セミナースペースでは3日間で22回、出展社プレゼンテーションが行われるとともに、特別セッションが計9回開催された。展示スペースでは、共同出展も含め16社が参加した。両スペースともに3日間、盛況となった。特に初日の午後に開催された基調講演「USにおけるメディア視聴動向」と、最終日のセッション「キー局の動画配信」では、満席となり、さらに立ち見まで出るほどの人気となった。

放送局の営業担当者、経営企画担当者など、「これまでInter BEEに来たことがなかった」という来場者も多かった。今回のINTER BEE CONNECTEDの開催により、放送・映像ビジネスの関係者が集まり、次世代のメディアビジネスについて語り合う場ができた。







## オープニングトーク

# 「テレビのメディア価値向上とINTER BEE CONNECTEDの意義」

### ■放送機材、技術に加え、サービスやビジネスを新たな軸に

会場の半分が展示スペース、残り半分は100名程度が座れるセミナースペースとなっており、出展者のプレゼンテーションが行われるとともに特別に組まれたセッションも毎日行われる。

オープニングトークとして、Connectedのアドバイザーチームでありこの催しを起案した江口靖二氏(江口靖二事務所代表・デジタルサイネージコンソーシアム常務理事)が講演を行い、全体の口火を切った。

### ■世界で進む放送の“Connected”的な発想

「50年を迎えたInter BEEでConnectedを企画したのは、技術だけではなくサービスやビジネスを軸にした展示が必要な時代になったと考えたからです」と江口氏は言う。

「海外では、NABにFuture Labと題した特別展示がはじまっており、IBCでもCONTENT Everywhereというスペースができています。さらにアメリカのCABLE SHOWが名称から“ケーブル”を外し

INTXと名前を変えました。The internet & Television Expoの略だそうです。いつまでも有線でケーブルテレビを語っていいのか、という危機感でしょう」その流れを受けて、日本の放送業界向け展示会の代表であるInter BEEにも新しいコーナーが必要だとの提案が「INTER BEE CONNECTED」として実を結んだ。



## 現場の問題意識を反映した アドバイザーボード

### ■放送局によるネットビジネス推進に携わる担当者が参加

第1回目のINTER BEE CONNECTEDを開催するにあたり、放送の現場でネットビジネスの開拓・推進に携わってきた当事者や放送業界の動向に詳しい論客にアドバイザーボードとして参加してもらい、5回にわたる会合を経て、セッションのテーマや登壇者の顔ぶれについて意見が交わされた。アドバイザーボードに参加してくれたのは、以下の5人。

#### 【INTER BEE CONNECTED アドバイザーボード】(50音順)

安藤 聖泰 氏 日本テレビ放送網株式会社 インターネット事業局 インターネット事業部 専門副部長

江口 靖二 氏 江口靖二事務所代表/デジタルサイネージコンソーシアム 常務理事/デジタルメディアコンサルタント

齋藤 浩史 氏 株式会社毎日放送 経営戦略室 マネージャー/マルチスクリーン型放送研究会 事務局長

塚本 幹夫 氏 株式会社フジテレビジョン 総合開発局 企画担当局長

村上 圭子 氏 NHK放送文化研究所メディア研究部 主任研究員

## 基調講演

# 「USにおけるメディア視聴動向と視聴率計測の最新トレンド」

初日の午後に開催された基調講演では、ニールセンのシニア・バイス・プレジデント、エリック・ソロモン氏が登壇。米国で進む放送コンテンツのデジタル視聴計測の、まさに最新の状況を生々しく語ってくれた。後半では日本のニールセン株式会社CEO 福徳俊弘氏も加わり、来場者とのアクティブな質疑応答となった。

### ■急激に拡大する“ネット視聴”

ソロモン氏は、米国での「クロスプラットフォーム視聴率計測」について解説した。まず、米国における放送コンテンツの視聴動向について、データをもとに丁寧に説明。タブレットの普及率はすでに46%に達し、まだ勢いがあるという。有料ネットVODのNetflixの世帯への浸透率は2014年1月に全世界の30%だったのが2014年9月には36%に伸びており、勢いのすさまじさがよくわかった。放送コンテンツは6~7割はライブ視聴だが、タイムシフト視聴が25~30%、オンデマンド視聴が3~9%と、複合的な視聴が当たり前になりライブ視聴は急減している。そんな現状認識の中、ライブ視聴以外の視聴を計測する要望が高まっている。

### ■新たな視聴計測技術の開発も

2014年、視聴計測の範囲をテレビとPCだけでなく、タブレットとスマートフォンにまで広げたのだという。米国ではC3、C7と呼ばれるタイムシフト視聴のデータが一部の放送局と出稿企業の間

で採用されており、ライブ視聴、タイムシフト視聴、オンデマンド視聴のすべてを把握できる。

クロスプラットフォームの視聴計測は、放送での広告とは別に、オンデマンド視聴の際のネット型の広告もきちんとビジネス化するために使われる。放送時の広告を「リア広告」、オンデマンドでの広告を「ダイナミック広告」と呼び分けていた。後者では、ネット広告と同じ仕組みでターゲティングができる。放送コンテンツを広告市場で最大限に活用するためには、こうした視聴計測が必要となる。



# 「地上波テレビが守るべき広告モデルと変えるべきこと」

INTER BEE CONNECTED 初日のセミナー、最後を飾ったのはこのコーナーの企画者でもある江口靖二氏(江口靖二事務所)による講演。地上波テレビ局の今後進むべき姿について氏の持論を展開した。

### ■もとめられるネット視聴の標準モデル

テレビ放送のリアルタイム視聴は長期的に徐々に減少している。そんな中、ネットの活用による視聴の拡大について様々な試みがおこなわれているが、いまだ標準的なモデルは確立できていない。例えば一部の先進的なユーザーは、最新の録画機器とスマホを使って、自宅に録画した番組をいつでもどこでも視聴している。大変便利な仕組みだが、ここでは視聴についてテレビ局は関与できない。

同じことをクラウドでテレビ局の側で整えることにより、ネット上での番組視聴も主体的に管理することが可能になる。番組の編成やCMの乗せ方もテレビ局自ら管理できれば、放送と同じように収益確保ができるのではないかと。江口氏の主張の核がこの、テレビ局自身によるクラウド配信だ。

### ■広告モデルを駆使したクラウド配信

さらに江口氏は、テレビ局は広告モデルを死守すべきだと力説する。現状は、テレビ広告費1兆7800億円を間接的に視聴者が負担してエコシステムが成り立っている。マルチスクリーン化や録画機の普及で広告によるエコシステムが崩れることは、テレビ局のみならず視聴者や広告主にとってもメリットがない。この広告モデルを守る手段がテレビ局によるクラウド配信だという。

まとめとして江口氏は、番組放送後に一定期間、“タイムシフト放送”をテレビ局が行い、クラウドレコーダーのサービスもテレビ局が提供するのが今後のモデルとなるはずだと述べた。このモデルを新しい形の“放送”にとらえるべきだとして、講演を結んだ。

この江口氏の提示したモデルは、日本テレビが見逃し無料配信とhuluにより構築しようとしている姿と相通じるものがある。放送後の番組を段階的にネット上で配信していくことは、今後のテレビ局の進むべき道だと言えそうだ。



## 「スマートフォンで変わるテレビ視聴スタイル」

日本テレビの太田正仁氏には、テレビアプリ「ハミテレ」、電通関西の今谷秀和氏には、テレビアプリ「SyncCast」、そしてガラボンの保田歩社長には自社のサービスについてそれぞれ語ってもらった。進行役は、メディアコンサルタントの境治氏が務めた。

### ■番組視聴の活性化、収入増につながるスマホ連携

境氏がまず、テレビとスマートフォンの関係を概観。テレビを見ながらスマートフォンを使う人は5割近くいるというデータを示した。スマートフォンの活用により番組視聴が活性化するとともに、広告の仕組みによって収入増につながる可能性も示した。

### ■「いつでもどこでも」を実現した「ガラボン」

「ガラボン」は地上波の全局全番組をワンセグで受信し、一定期間録画する機器で、映像をPCやモバイル端末で視聴できる。外出先でも使えるのでまさに「いつでもどこでも」テレビを観ることができるサービスだ。利用者同士でソーシャル的に番組の感想を共有できる側面もあり、これによりテレビ視聴を活性化させる効果もあると強調した。

### ■CMに合わせたバナー広告配信が可能な「SyncCast」

今谷氏はマルチスクリーン型放送研究会の中心メンバー。関西

キー局を中心に同会は会員企業を増やし、会員は57社になった。会員局は、同会開発のアプリ「SyncCast」を使い、番組を見ている人に付加的な情報を届けることができる。CMに合わせてバナー広告を配信することも可能だという。

### ■NHKとキー局が共同で取り組む「ハミテレ」

太田氏が携わるアプリ「ハミテレ」は、在京キー局5局にNHKも加わって共同で取り組む試みだ。局の横並びよりユーザーの利便性を重視し、いちばんホットな番組情報を届ける仕組み。テレビを見ている層にさらに視聴を促すとともに、テレビから離れがちな若い世代にもスマホを通じてアピールしたいという。



## 「ローカル局から見たテレビの未来」

放送の高度化やタイムシフトにどう対応し、新しいビジネスモデルを見いだせるか。議論から見えてきたのは、それぞれが様々な手法で挑戦しはじめた姿だった。登壇したのは、仙台放送・平山準一氏、テレビせとうち・島内洋和氏、毎日放送・長井展光氏、福岡放送・毛利元夫氏。この四人のパネラーに対し、モデレーターの次世代メディア研究所・鈴木祐司氏が議論のテーマを投げかけた。



### ■4K/8K「放送以外での配信」も検討

4K/8Kは、高画質の映像をじっくり見ってもらう番組には独自のニーズがあり、放送以外で配信する可能性も言及された。4Kでの制

作を依頼される事例も実際にあり、高画質映像の制作はローカル局のプロダクション機能としての価値が見いだせそうだ。

### ■Don't Think, Feel! 新たな挑戦へ若手を鼓舞

ハイブリッドキャストについて、テレビせとうち島内氏が自社の取り組みをスライドで披露した。マルチスクリーン型研究会のSyncCastを使った試みでの成果も披露。最後は、「Don't Think, Feel!」(考えるな、感じる)というスローガンで締めた。

### ■タイムシフト視聴に各社果敢なアプローチ

福岡放送では「発見らくちやく!」という自社制作番組のGYAOでの配信をはじめた。地元でも人気のこの番組は、ネットでも好評を博し9月には再生数が100万回を越えたという。福岡から全国へ、そして世界へも配信できると手応えを感じているという。

仙台放送は「放送外収入を増やせ」とのミッションを受け、「ドクターサーチみやぎ」という事業に挑戦した。ネット企業がやりそうな事業だが、「限られた地域で大量スポットを打てば勝てるかもしれない」とやってみたら非常にうまくいき、他のエリアにもそれぞれのローカル局と組んで広がっているそうだ。

## 「インタラクティブなテレビ、その今と未来」

バスキュールの代表取締役・朴正義氏と、朝日放送東京支社の岸本拓磨氏が登壇。テレビにインタラクティブな仕掛けを多彩に試みてきた二人から、放送のクリエイティブな可能性が語られた。

### ■バスキュール「宇宙と未来のニューヒーローを目指す」

朴氏が率いるバスキュール社は、WEBコンテンツの制作会社で、もともとクリエイティビティあふれる双方向の仕掛けを中心に数々のサイトを手がけてきた。2010年代に入ってから、テレビ放送のインタラクティブな企画に挑戦しはじめ、『日テレ×NHK60番勝負』をはじめ各テレビ局からの依頼を次々に引き受けて、業界屈指の実績を積み重ねてきた。朴氏によれば、この2年間で140回以上の放送に関与してきたという。

### ■朝日放送「ハイブリッドキャストで1000人同時視聴」

朝日放送の岸本氏も、テレビ局によるプロモーションの一環としてネットを活用したインタラクティブな仕組みに数多く取り組んでいる。直近の事例として紹介されたのが、関西ローカルで放送された『ゲーム王』での「テレビのニコ動化」の事例。ハイブリッドキャストの仕組みを生かし、放送を見ながらのtwitterでのつぶやきをテレビ画面にオーバーレイで表示するもの。

### ■広告企画としてのインタラクティブに意欲

テレビにインタラクティブな仕掛けを持ち込むのは、ライブ感を共有してもらうのが目的か?との問いに朴氏は「ネットは分散してしまっている」と答える。「テレビにはみんなの期待値があり、インタラクティブな仕組みによって、その期待に応えて楽しさを増幅することができる」テレビの増幅力が、クリエイターとしては魅力なのだという。岸本氏は「インタラクティブな仕掛けにより同時一斉感を楽しんでもらいライブ視聴の価値を高められる」と、視聴回帰への効用を指摘した。



## 「どう変わる? こうかわる!! 次世代ケーブルビジネスの未来」

3日目最初のセミナーは、ケーブルテレビ業界をテーマにしたセッションが開催された。「通信との融合」から一見、遠い位置にあるケーブルテレビだが、実は新しい取り組みをはじめようとしていた。その内容は、通信との融合と非常に近い部分がある。

### ■ケーブルテレビ向けスマートTVサービス「COTTIO」を紹介

セッションには、とらみ衛星通信テレビの常務・宅見公志氏と東京ケーブルネットワーク執行役員・遠藤昌男氏がパネラーとして登壇、ケーブルテレビ情報センター事務局長・柳澤幸雄氏の進



行のもと、最前線の現場からの声を届けた。

まずは宅見氏が、地方のケーブルテレビ局としての取り組みを紹介した。富山県砺波市、南砺市を中心エリアとするとなみ衛星通信は、日本のケーブルテレビ局のひとつの典型と言えるだろう。地方自治体を株主にもつことからしても、メディア事業者というよりも行政とも一体となった地域インフラに近い。新しい取り組みも、かなり最先端の技術を使ったものなど多様に行われているが、苦戦している様子が切々と語られた。

遠藤氏は、J.COTT社のCEOでもあり、同社が新たに開発したスマートTVサービスについて説明した。同社のCOTTIOは新しいタイプのSTBで、各ケーブルテレビ事業者に利用してもらう前提で開発されている。遠藤氏は放送がますます高度化する中で、ケーブルテレビは課題を乗り越えることで新たに成長できるはずだと論を展開した。

セッションを通じて感じられたのは、ケーブル業界が今、最新の動向への対応をすることで地域を支える存在となろうとする姿だった。遠藤氏はCOTTIOの開発動機として、「有線は古い」と揶揄されがちだが、だからこそ地域事業者という原点に立ち返る気持ちを挙げた。



## 「キー局の動画配信」

3日目の同セッションでは、「キー局のネット配信」をテーマに日本テレビ、TBSテレビ、フジテレビ、テレビ朝日の動画配信ビジネスの責任者が登壇した。このセッションは満席になった上に立ち見通路に大きくあふれ、このテーマの注目度の高さが伝わってきた。セッションの内容も濃いものとなり、会場は最初から最後まで熱気に包まれていた。

### ■地上波キー局が無料配信にどう取り組むか

セッションに登壇したのは、日本テレビ・太田正仁氏、TBSテレビ・坂本香氏、フジテレビジョン・山口真氏、テレビ朝日・前田寿之氏。進行役は、電通総研の奥律哉氏が担当した。

テレビ局の配信事業は、これまでは有料課金のオンデマンドサービスが中心だった。海外では放送後の番組に広告をつけた無料配信が、この数年で普通に行われるようになってきたが、日本では広告ビジネス上や著作権の問題、出演者の拒否反応などもあり、放送局も実現に力を入れてこなかった。そんな中、1月から日本テレビが「いつでもどこでもキャンペーン」と称して放送後の番組を無料で配信する試みをスタートし、7月からは広告をつけて配信してきた。9月には民放連・井上会長が「見逃し視聴にキー局共同で取り組むことを検討することになった」と述べ、それに続いてTBSテレビが無料配信を開始している。



### ■新たな「ウィンドウ戦略」に取り組む各社

最初に、登壇者から各局の配信事業の状況が説明された。TBSテレビは有料課金に早くから取り組み2012年度から黒字化していた。具体的な数字は省かれていたがオンデマンド事業の成長の様子がグラフで示され、2012年度、2013年度と急増していることがよくわかる。VOD事業の成長性があらためて明らかになった形だ。無料配信も試みの段階だがスタートさせ、一カ月で500万回を越える再生回数になったという。

テレビ朝日・前田氏は、自社の動画配信のこれまでを紹介。番組のスピノフも含めてネットオリジナルの動画に力を入れてきたのが特徴で、放送でも人気の「ロンドンハーツ」のスピノフ動画は特に、再生回数の累計が1.7億回を越えているという。

フジテレビジョン・山口氏は、様々な形式で取り組んでいる動



画配信事業についてマトリックスを見せて概観しながら、「左上の領域」と称して無料での番組配信に今後注力したいことを力説。海外動向を調べた末にこの分野の成長性を確信し、社内の他のセクションも巻き込むべく説得している最中だと熱く語った。

太田氏は日本テレビの動画配信事業の全体を第2日本テレビからhuluまで解説。その中での新しい取り組みとして、見逃し無料の意義を語った。若者のテレビ接触はこの十年で激減してモバイルにシフトする中、ソーシャルメディアやゲームなど「中毒型コンテンツ」に時間を奪われている。だからこそ「いつでもどこでも」アクセスできる場をテレビ局がつくるべきだと考えているという。中でも、「リアルタイム視聴→一週間後までの見逃し無料配信→それ以降は月々定額のアーカイブ配信」というテレビ局にとっての新しいウィンドウ戦略の提示は、今後の放送局経営の参考にできるだろう。

### ■「広告付きの動画を様々なサービス上に置く」

進行役の電通総研・奥氏がいくつかの切り口でデータをスライドで見せた。議論の流れ上、若者のテレビ離れを示すものが並んだが、中でも衝撃を受けたのは2020年代に向けて各世代がテレビをどれくらい視聴するかを予測したグラフだ。例えば30代のテレビ視聴は今後10年で劇的に下がってしまう。10年後の30代は今の20代であり、年齢を経てもメディア接触の習慣は変化しにくいことを加味して作成されている。

太田氏は、ネットでは「場」をつくらなくても、映像コンテンツをどこに置いてビジネスになる、という考え方を披露。今後は、広告付きの動画を様々なサービス上に置いて収益を拡大させたいという。これには山口氏も呼応して「立派な建物を建てれば人が集まると考えがちだが、これからはポータルオプティミズに頼るべきだ」と述べた。

最後に、経営戦略の中での動画配信の位置づけについて奥氏が聞くと、各氏とも「4つ」という数字を挙げ、地上波・BS・CS・ネットの4つのメディア(テレビ朝日はメディアシティも加えて5つ)を総合的にとらえるべきだと答えた。

## 「多様化する放送のあり方とビジネスの模索」

INTER BEE CONNECTED、3日間のセミナーの最後を飾るセッションは、アドバイザーボードが全員登壇し、ラップアップと称して、多角的な意見交換がなされた。発案者である江口靖二氏を進行役に、INTER BEE CONNECTEDの実現にあたって、企画段階からサポートしてきた日本テレビ 安藤聖泰氏、毎日放送 齊藤浩史氏、フジテレビジョン 塚本幹夫氏、NHK放送文化研究所 村上圭子氏という、放送と通信の最先端で奔走してきた面々が登壇。締めのトークとして三日間を振り返り、今後の動向について思いを語り合った。



### ■多様化する放送ビジネス

冒頭、INTER BEE CONNECTEDについての雑感を各氏が述べた。江口氏は、オープニングのスピーチでも語ったように、INTER BEE CONNECTED 発案の動機をあらためて説明。海外の放送業界のイベントが変化を意識した特設コーナーを始めているのを見て、日本でもその必要性を感じたという。

塚本氏は、フジテレビでネットでの事業に携わってきた中で、「放送の高度化やインタラクティブ化をどこまでつきつめるべきなのか、果たしてビジネスになるかが気になっていた」という。村上氏も「多様な仕組みが実現してきた中で、サービスになるか、ニーズがついていくかについて埋めるべき溝があり、それを議論する場が必要だった」とし、INTER BEE CONNECTEDの重要性を感じたと述べた。

齊藤氏は、関西キー局を中心に実験を重ねてきたマル研(マルチスクリーン型放送研究会)の中心人物として、まさしく同じことを感じていたという。今回はINTER BEE CONNECTEDの中でマル研を出展でき、一歩進んだ感触を得たと話した。

安藤氏は、「放送は、制作・伝送路・デバイスが串刺しになって常に一体で進化してきた。ところがネットをはじめ新しい技術が出てきて、伝送路もデバイスも多様になった。串刺しでしかとらえてなかった放送事業の、「串を抜いた」議論が必要なのだと思う」と述べ、放送局の事業形態がより柔軟に対応することが求められていることを示唆した。

### ■新放送の多様化と本来の意義

アドバイザーボードは、半年以上にわたりINTER BEE CONNECTEDの企画策定に携わってきた。会期中も、この新しい

催しを送り出す立場からセッションや展示に参加してきた。そうした中で、各氏とも、多面的に進むテレビの新たな動きを見て、さまざまな思いや今後の鍵となるテーマなどが話題に上った。

塚本氏は、初日に開催した、ニールセンのエリック・ソロモン氏の講演について、次のように述べた。「C3(放送後3日間の録画視聴まで含めたCMの視聴率)は妥協の産物だった。CM視聴だけにお金を払いたいスポンサーに対し、テレビ局はだったら録画で見分も入れたいと言って生まれた。いきなりは導入しにくい、ニールセンのような視聴計測の進化は今後日本でも必要になる。計測の意味は、ビジネス価値を示すことにあるからだ」と、日本にも多様な視聴形態に対応した視聴計測の必要性を強調した。

村上氏は「テレビがネットに融合するからこそ、社会的役割を再構築すべきではないか」と問いかけた。「テレビには、能動的に見ようとしていない情報も届け、人々に気づいてもらうという公共的な役割があった。これまでの時間的な編成とは別に、空間編成でも呼ぶべき新しい編成が可能ではないか」と述べ、テレビが持つ公共性・社会性を生かした、既存のネットの動画視聴とは異なるスタイルがあると指摘。そのための場として「全局共通のSVODプラットフォームはできないものだろうか」と提案した。

齊藤氏は「テレビは生活。放送局が生活の中でどう役立っているかは人によって違うし、キー局とローカル局でもかなり違うと思う。放送局とは何なのかを考え直すべきときだ」という気がする。議論しながら同じ「放送」という言葉を使いつつ違う「放送」を語っていないだろうか」と、放送の多様性が進む現状について、関西キー局としての視点から述べた。

### ■明日の放送ビジネスを語り合う場として

登壇したアドバイザーボードの各氏のコメントには、3日間の会場の熱気に打たれたかのように、それぞれの放送への熱い思いが込められていた。今回のINTER BEE CONNECTEDでは、新たな放送ビジネスの可能性を探ろうとする多様な立場の関係者が集った。多くの人が、放送の本来の意義を考え、今後どう変化していくか、そうした中でどう対応すべきかを真剣に考え、アクションをしている姿を伝え、明日の放送ビジネスについて語り合う場として機能していくことが、今後もINTER BEE CONNECTEDには期待される。



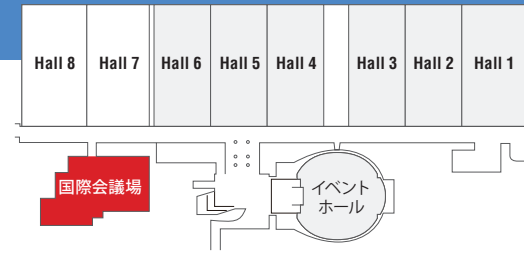


# INTER BEE CONTENT FORUM

▶11月19日(水)~21日(金)  
 ▶企画:一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会(JESA)  
 ▶会場:国際会議場2階 国際会議室

<b>基調講演1</b>	
10:30 ▼ 11:30	<b>米国の放送事業者に対する新帯域割り当てのチャレンジ</b> サム・マセイニー氏 <small>NAB(全米放送事業者協会)最高技術責任者</small>
<b>基調講演2</b>	
13:00 ▼ 13:40	<b>新たな放送・メディアサービス展開に向けて</b> 浜田 泰人氏 <small>日本放送協会 理事・技師長</small>
<b>基調講演3</b>	
14:00 ▼ 14:50	<b>第一部:「近未来の放送サービスとメディア戦略について」</b> 本間 康文氏 <small>株式会社TBSテレビ メディア戦略室長</small>
	<b>第二部:「IP・クラウドを活用した映像コンテンツプロダクション」</b> 大吉 なぎさ氏 <small>株式会社TBSテレビ メディア戦略室 テクニカルプロデューサー</small> 奥るみ氏 <small>グーグル株式会社 Google for Work クラウドプラットフォーム セールスペシャリスト</small> 吉積 礼敏氏 <small>吉積情報株式会社 代表取締役社長</small>
<b>特別講演</b>	
11.19 (水)	<b>「全員一斉」と「各人確実」を実現する「徳島方式」を全国規模の新たなプラットフォームへ</b> 15:00▶15:10 ガイダンス 15:10▶15:30 特別講演 <b>進化する「光ブロードバンド王国・とくしま」</b> 飯泉 嘉門氏 <small>徳島県知事</small>
	15:30▶15:45 講演 <b>マスとパーソナルの融合を図る新しいプラットフォームの紹介</b> 中村 遥風氏 <small>日本テレビ放送網株式会社 インターネット事業局 インターネット事業部</small>
	15:45▶16:05 対談 <b>徳島県阿部地区の住民と地元民放が語る「高齢者も安心できる生活と災害対応」</b> 瀬戸 興宣氏 <small>阿部自主防災会 事務局長</small> 武知 浩史氏 <small>四国放送テレビ 編成部 部長</small>
15:00 ▼ 17:30	16:05▶17:30 パネルディスカッション <b>日本の社会課題に対応するICT社会インフラづくり「徳島方式」を全国に展開するために</b> チェアマン 村井 純氏 <small>慶応義塾大学 環境情報学部長・教授</small> パネリスト 小笠原 陽一氏 <small>総務省 情報通信国際戦略局 情報通信政策課長</small> 飯泉 嘉門氏 <small>徳島県知事</small> 小杉 善信氏 <small>日本テレビ放送網株式会社 取締役 専務執行役員</small> 小原 琢哉氏 <small>日本マイクロソフト株式会社 執行役 専務</small>

<b>招待講演1</b>	
10:30 ▼ 11:20	<b>放送技術の将来とは何か</b> ピーター・ホワイト氏 <small>IABM(国際放送機器工業会) チーフエグゼクティブ</small> ピーター・ブルース氏 <small>IABM(国際放送機器工業会) APAC理事</small>
<b>招待講演2</b>	
11.20 (木)	11:30 ▼ 12:20 <b>欧州の放送および放送技術の過去、現在、未来</b> ピーター・オーエン氏 <small>IBC(国際放送機器展示会) IBCカウンシル 会長</small>
<b>招待講演3</b>	
12:30 ▼ 14:00	<b>クラウド活用によるメディアワークフローの進化</b> マーク・ランバーク氏 <small>アマゾンウェブサービスメディア&amp;エンタテインメント部門 ジェネラルマネージャ</small> 北迫 清訓氏 <small>アマゾンデータサービス ジャパン株式会社 ソリューションアーキテクト</small>
<b>招待講演4</b>	
10:30 ▼ 11:20	<b>IMFについて</b> サイモン・ロアーズ氏 <small>ローデシュワルツジャパン株式会社 放送機器エリア・マネージャ</small>
<b>招待講演5</b>	
11.21 (金)	11:30 ▼ 12:20 <b>メディア・放送業界向けオールIPストレージ</b> チャールズ・セヴィア氏 <small>EMCジャパン株式会社 EMCアシロン部門 アジアパシフィックジャパン CTO</small>
<b>招待講演6</b>	
12:30 ▼ 13:10	<b>南米の放送局における現在の課題</b> オリビオ・ホセ・フランコ氏 <small>ブラジルテレビ放送技術協会 会長</small>



<b>映像シンポジウム</b>	
<b>超高精細映像コンテンツ制作の現状と課題</b>	
司会・進行 為ヶ谷 秀一氏 <small>女子美術大学評議員 (前女子美術大学大学院教授)</small>	
國重 静司氏 <small>株式会社NHKアート 常務取締役</small>	
<b>4K放送始動・2020年に向けた期待と課題</b>	
元橋 圭哉氏 <small>一般社団法人 次世代放送推進フォーラム 事務局長</small>	
11.20 (木)	14:30 ▼ 17:30 <b>4Kコンテンツ制作におけるマスタリング作業の留意点について</b> 清野 晶宏氏 <small>株式会社IMAGICA 技術推進室 エンジニアリングソリューションユニット/チーフリサーチャー</small>
<b>4Kドラマ撮影現場からの報告</b>	
今井 正氏 <small>株式会社日テレテクニカルリソース 営業センター企画営業部 専任担当部長</small>	
<b>4Kネット配信時代到来~「ひかりTV 4K」の取り組みと課題~</b>	
永田 勝美氏 <small>株式会社NTTぷらら 取締役 技術部長</small>	

<b>音響シンポジウム</b>	
<b>Audio Over IPの最新動向と応用</b>	
司会・進行 沢口 真生氏 <small>沢口音楽工房 サラウンド寺子屋 代表 Fellow AES/ips</small>	
亀川 徹氏 <small>東京芸術大学 音楽学部 音楽環境創造科 教授</small>	
<b>AES67概要とオーディオIP伝送に関する規格類</b>	
由雄 淳一氏 <small>バイオニア株式会社 研究開発部 標準化支援・著作権センター 主幹研究員</small>	
<b>Ravennaの技術背景と応用例</b>	
ドミニク・ブルルハート氏 <small>マージックテクノロジー社 副社長 ソフトウェアエンジニアリング部門 責任者</small>	
11.21 (金)	13:30 ▼ 16:30 <b>DiGiGrid 及びSoundGridネットワークング</b> コーディネーター 山口 哲氏 <small>株式会社メディア・インテグレーション MI事業部 ディレクター</small>
<b>放送とポストプロダクションにおけるRedNetとDante</b>	
ウィル・ホルト氏 <small>フォーカスライト RedNet R&amp;D部門 プロダクトマネージャ</small>	
<b>レゾネットの考えるAudio over IP技術</b>	
丹下 昌彦氏 <small>レゾネット株式会社 代表取締役</small>	

# INTER BEE TUTORIAL SESSION

▶11月20日(木)・21日(金)  
 ▶企画:一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会(JESA)  
 ▶会場:国際会議場1階 101会議室

<b>音響チュートリアルセッション 「ファイルベースのワークフロー第3回 TV局を例に」</b>	
11.20 (木)	13:00 ▼ 14:30 <b>セッションA:TV局におけるファイルベース構築例</b> 林和喜氏 <small>名古屋テレビ放送株式会社 映像技術部</small> 前田 洋介氏 <small>株式会社メディアインテグレーション ROCK ON PRO事業部 プロダクトスペシャリスト</small>
15:00 ▼ 16:30	<b>セッションB:本当は教えたくない!カメラマン、ディレクターのための音声ポストプロダクション</b> 染谷 和孝氏 <small>有限会社ビーブルー 東京スタジオ サウンドデザイナー/リレコーディングミキサー</small>
<b>映像チュートリアルセッション 「4K映像制作入門(撮影・編集)」</b>	
11.21 (金)	13:00 ▼ 14:30 <b>セッションC:4K映像制作入門(撮影・編集)その1</b> 小島 英雄氏 <small>株式会社カードリンク・コミュニケーション カメラマン/撮影技術コーディネーター 代表取締役</small>
15:00 ▼ 16:30	<b>セッションD:4K映像制作入門(撮影・編集)その2</b> 堀口 和彦氏 <small>株式会社サウンドバイ・エス エディター</small>

# スポンサーセッション

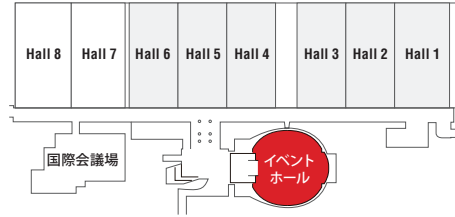
▶11月20日(木)・21日(金)  
 ▶会場:国際会議場1階 104会議室

11.20 (木)	12:30 ▼ 14:30 <b>Ultra High Definition SDI Towards a Hierarchy of SDI Data Rates</b> ジョン ハドソン氏 <small>セムテック コーポレーション ストラテジック テクノロジー・アンド・ニュービジネスデベロップメント ディレクター</small>
15:00 ▼ 17:00	<b>パネルディスカッション 災害+紛失に強く、シンプルなSD/HD/4K映像データ保管の提案</b> 株式会社ニューメディア / 株式会社朋栄 / 株式会社ビデオ・テック
11.21 (金)	10:20 ▼ 11:30 <b>マイクロソフトのクラウドサービスを使った最新の映像配信、ご存知ですか? ~事例とデモでわかりやすく解説します~</b> 皇山 大有氏 <small>日本マイクロソフト株式会社 エンジニリスト</small> Jason Suess氏 <small>Azure Media Service Live 開発担当</small> Vishal Sood氏 <small>Azure Media Service Contents Protection/Client Player 開発担当</small>
12:30 ▼ 14:30	<b>IMAGICA HARBOR 映像制作フロー・プライベートセミナー</b> 株式会社IMAGICA / 株式会社バスク / 東映ラボ・テック株式会社



# 第50回開催記念イベント INTER BEE EXPERIENCE

▶11月20日(木)  
▶企画:一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)  
▶会場:幕張メッセ イベントホール  
▶Supported by **SONY** **YAMAHA**



## 国内初! 実感・感動・発見の体験デモ

国内展示会では初となる、音響各社の参加による吊り下げラインアレイスピーカークの体験デモンストレーションを実施。イベントホールの大空間を使用した“大音量デモ”により、スピーカークの性能を試聴体験いただいた。多くのユーザーの皆様へ各社製品の特長や個性を実感いただき、スピーカーク選定やビジネス機会の拡大にご活用いただいた。

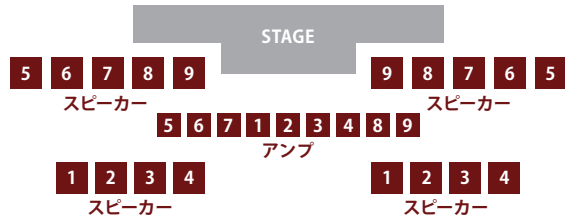
## 第1部:ラインアレイスピーカーク体験デモ Line Array Speakers Demo & Presentation

▶時間:10:30-16:40  
▶後援:一般社団法人日本舞台音響家協会、日本舞台音響事業協同組合  
▶メディアパートナー: **Sound & Recording PROSOUND Stage Sound Journal SOUND**

### ●Demo & Presentation program

1	10:30 11:00	<b>d&amp;b audiotechnik</b>	Y-Series	オタリテック株式会社
2	11:10 11:40	<b>TOA</b>	compact array speaker HX-7	TOA 株式会社
3	11:50 12:20	<b>JBL</b>	VTX-V20	ヒビノ株式会社
4	12:30 13:00	<b>Meyer Sound</b>	MINA	株式会社エイ・ディー・エル
5	13:30 14:00	<b>EAW</b>	Anya System	音響特機株式会社
6	14:10 14:40	<b>M</b>	MLA multi cellular loudspeaker array	株式会社 Martin Audio Japan
7	14:50 15:20	<b>NEXO</b>	STM series	株式会社ヤマハミュージックジャパン
8	15:30 16:00	<b>LACOUSTICS</b>	K2 System	ベストックオーディオ株式会社
9	16:10 16:40	<b>CODA</b>	LA12 3-Way ラインアレイモジュール	ヒビノインターサウンド株式会社

### ●視聴スピーカーク平面レイアウト



▶体験デモ共通音源 朗読: **窪田等** (株式会社シグマ・セブン)  
**高木礼子** (株式会社シグマ・セブン)  
バンド: **LiLi**

## 日本発! ライブ・エンターテインメント

第50回開催アニバーサリーのイベントは、「映像・音響・照明・パフォーマンス」を融合した日本発・世界発信の「ライブエンターテインメント」。いま国内外から注目を集めるコンテンツクリエイター集団『ライゾマティクス』との共同制作により、日本のクリエイティブパワーを発信した。

## 第2部:アニバーサリー・ライブパーティー 50th Anniversary Live Party

▶時間:17:40-19:40  
▶Live Entertainment共同企画・制作:株式会社ライゾマティクス  
▶Live Party協賛: ZIMA

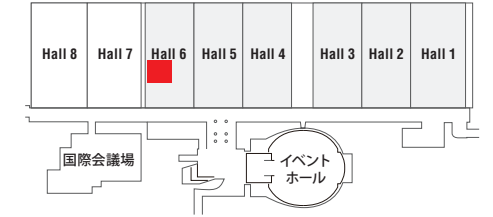
### ●Live Party program

17:40 18:00	<b>Welcome time</b> アニバーサリー・ライブパーティー MC: <b>Sascha</b>	Supported by <b>ZIMA</b>
18:00 18:40	<b>Live Entertainment</b> Co-Production by <b>Rhizomatiks</b> テクノロジーがコンテンツ制作を変え、イマジネーションとコンテンツを創るチカラが技術を進化させる。テクノロジーを得たクリエイティブパワーから生まれる最新のライブエンターテインメントを、日本が誇る気鋭のクリエイター達のコラボ・ステージで次世代として未来へ発信した。  Performance 1: <b>SJQ++</b> 演奏者同士が映像を介し相互作用することで、その場で展開するパフォーマンス。現代アート/クラブ/電子音楽の境界を往來する表現を行った。演奏者はリアルタイムで映像上に表現される光に反応して音を発し、その音は再帰的に映像を形成。この不断の連続により、音、光、グラフィック、それぞれが不可分の形で編み込まれ、独自の体験を会場にいる方に提供した。  Performance 2: <b>onnacodomo</b> × <b>宮内優里</b> 日常にあるもので映像をライブにつくり出す異色のVJユニット onnacodomoと、ひとりで演奏しリアルタイムに楽曲を生み出すアーティスト宮内優里のコラボレーションによる、異色のライブパフォーマンスを展開した。  Performance 3: <b>Rhizomatiks</b> × <b>ELEVENPLAY</b> 楽曲制作: Ametsubu 気流や、音の振動、人のうねりなど不確定な要素でステージの環境は刻一刻と変化。その影響を受けやすいドローンの動きをプログラミングというテクノロジーを使い制御しようとするせめぎ合いと、その中で演じる、フィジカルを駆使したダンサーとのコラボレーションをお楽しみいただいた。  DJ: <b>SETSUYA KUROTAKI</b>	
18:40 19:40	<b>Party time</b> 第50回開催を記念する“ライブパーティー”は、来場者と出展者が出会い、和気あいあい語り合い、つながる特大のコミュニケーション空間へ。新しいコラボレーションが誕生するパーティーを楽しんで体験いただいた。 Music by <b>LiLi</b> MC: <b>Sascha</b>	

- 製品・機材協賛  
ソニービジネスソリューション株式会社  
プロジェクター、65インチ会場モニター、ライブ撮影用カメラ、VJ用カメラ、ステーションモニターカメラ、会場撮影用カメラ、マスターモニター、卓上モニター  
株式会社ヤマハミュージックジャパン  
フライングスピーカーク、グラウンドスタックスピーカーク、パワーアンプ、調整機、周辺機器  
株式会社オーディオブレインズ  
MC用サブスピーカーク、音圧表示機  
キャノンマーケティングジャパン株式会社  
演出用固定カメラ
- 映像配信協力  
ローランド株式会社  
プロジェクター 演出用スイッチャー、VJ用映像ミキサー  
株式会社朋楽  
会場モニター配信用スイッチャー、セレクター  
株式会社エーディテクノ  
HDBaseE 機器  
ティアック株式会社  
ワイヤレスマイク、CDプレーヤー (U順不同)
- 演出用機材協力  
株式会社エンルート  
マルチコプター
- 映像配信協力  
株式会社テクノネット

# INTER BEE CONNECTED

▶11月19日(水)～21日(金)  
▶企画:一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)  
▶会場:幕張メッセ ホール6

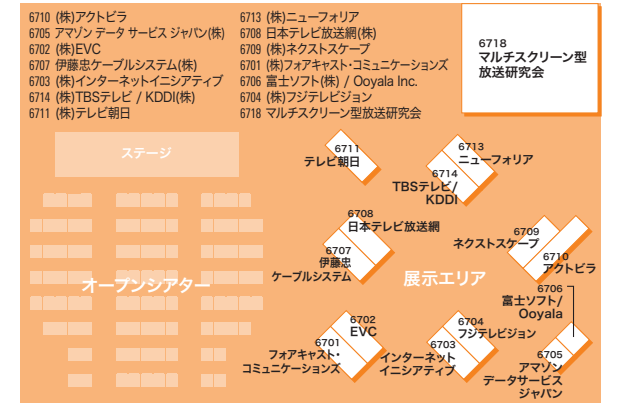


## デバイスや視聴スタイルが変わる。デジタルマーケティングも進化する。いま、テレビの新たなビジネスを探る。

INTER BEE CONNECTEDは、放送と通信の連携やインターネットを通じたメディアビジネスの可能性、コンテンツ制作インフラとしてのクラウドの利活用の進展、これからの社会システムに不可欠なデジタルコンテンツとビッグデータ活用など、映像とICTの最新動向とその進化を発信する場として展開し、幅広い分野の来場者と出展者をコネクした。



### ●会場レイアウト



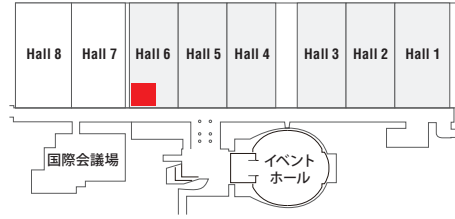
### ●プログラム

	11.19(水)	11.20(木)	11.21(金)
10:10 11:30	11:00▶11:30 <b>オープニングトーク</b> テレビのメディア価値向上と INTER BEE CONNECTEDの意義 ●登壇者 株式会社電通 関西支社 テレビ局 局長 今谷 秀和 氏 (マルチスクリーン型放送研究会) 日本テレビ放送網株式会社 インターネット事業部 副部長 太田 正仁 氏 ガラボン株式会社 代表取締役社長 保田 歩 氏 ●進行 コーディネーター/クリエイティブディレクター/メディア戦略家 境 治 氏	スマートフォンで変わるテレビ視聴スタイル ●登壇者 株式会社電通 関西支社 テレビ局 局長 今谷 秀和 氏 (マルチスクリーン型放送研究会) 日本テレビ放送網株式会社 インターネット事業部 副部長 太田 正仁 氏 ガラボン株式会社 代表取締役社長 保田 歩 氏 ●進行 コーディネーター/クリエイティブディレクター/メディア戦略家 境 治 氏	どう変わる?こう変わる!! 次世代ケーブルビジネスの最新動向 ●登壇者 とんみ電通通信テレビ株式会社 常務取締役業務部長 宅見 公志 氏 東京ケーブルネットワーク株式会社 執行役員 執行役員 (株式会社COTT代表取締役 CEO) 遠藤 昌男 氏 ●進行 一般社団法人ケーブルテレビ情報センター 事務局長 柳澤 幸雄 氏
11:35 11:50	クラウドを活用した大規模インタラクション Webソリューションのご紹介 (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ	クラウドにおけるビデオ活用の可能性 (株)インターネット イニシアティブ	メディア界隈で利用されるAmazonクラウド アマゾン データ サービス ジャパン(株)
11:55 12:10	クラウドTV～タイムシフト・見逃し視聴コンテンツの 自動生成と収益化支援する次世代コンテンツ管理システム 伊藤忠ケーブルシステム(株)	4K配信の事例紹介と、事例で学ぶクラウド利用の良さ (株)ネクストスケープ	"Microsoft Azure"クラウド基盤を活用した IPサイマル放送の最新事例ご紹介 (株)EVC
12:15 12:30	インターネット有料チャンネル 「フジテレビNEXTsmart」が目指すもの (株)フジテレビジョン	クラウドを活用した番組制作支援ツール 「TBS BooBoクラウド」 (株)TBSテレビ/KDDI(株)	クラウドベースのプラットフォームでマルチデバイス向けVOD/ ライブ配信環境を実現、リアルタイム視聴解析で新たな価値を 富士ソフト(株)/Ooyala Inc.
12:35 12:50	マスとパーソナルの融合 ～災害対策・高齢者支援を実現する放送プラットフォーム～ 日本テレビ放送網(株)	クラウド基盤を活用した大規模動画配信の事例ご紹介 (株)EVC	マスとパーソナルの融合 ～災害対策・高齢者支援を実現する放送プラットフォーム～ 日本テレビ放送網(株)
13:00 14:50	基調講演 USにおけるメディア視聴動向と 視聴率計測の最新トレンド ●登壇者 USニールセンシニアバイスプレジデント エリック・ソロモン 氏 ●対談 ニールセン株式会社 代表取締役会長兼CEO 福徳 俊弘 氏	ローカル局から見たテレビの未来 ●登壇者 株式会社仙台放送(CX系) ニュースビジネス開発部長 平山 準一 氏 株式会社TBSテレビ メディアビジネス部長 坂本 香 氏 株式会社毎日放送(JNN系)経営戦略室 エグゼクティブ 長井 展光 氏 株式会社福岡放送(NNN系)報道局長 毛利 元夫 氏 ●進行 株式会社電通 電通総研 研究主幹兼メディア/バーチャル研究部長 奥 律哉 氏	キー局の動画配信 ●登壇者 日本テレビ放送網株式会社 インターネット事業部 副部長 太田 正仁 氏 株式会社TBSテレビ メディアビジネス部長 坂本 香 氏 株式会社フジテレビジョン コンテンツ事業部長 山口 真 氏 株式会社テレビ朝日 総合ビジネス局 ビジネス戦略部長 前田 寿之 氏 ●進行 株式会社電通 電通総研 研究主幹兼メディア/バーチャル研究部長 奥 律哉 氏
14:55 15:10	クラウドベースのプラットフォームでマルチデバイス向けVOD/ ライブ配信環境を実現、リアルタイム視聴解析で新たな価値を 富士ソフト(株)/Ooyala Inc.	マルチスクリーン型放送研究会	クラウドを活用した番組制作支援ツール 「TBS BooBoクラウド」 (株)TBSテレビ/KDDI(株)
15:15 15:30	4K配信の事例紹介と、事例で学ぶクラウド利用の良さ (株)ネクストスケープ	クラウドを活用した大規模インタラクション Webソリューションのご紹介 (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ	クラウドTV～タイムシフト・見逃し視聴コンテンツの 自動生成と収益化支援する次世代コンテンツ管理システム 伊藤忠ケーブルシステム(株)
15:35 15:50	メディア界隈で利用されるAmazonクラウド アマゾン データ サービス ジャパン(株)	インターネット有料チャンネル 「フジテレビNEXTsmart」が目指すもの (株)フジテレビジョン	クラウドにおけるビデオ活用の可能性 (株)インターネット イニシアティブ
16:00-16:15	マルチスクリーン型放送研究会	インタラクティブなテレビ、その今と未来 ●登壇者 株式会社バスコム 代表取締役 朴 正義 氏 株式会社毎日放送 経営戦略室 マネージャー(マルチスクリーン型放送研究会) 齊藤 浩史 氏 株式会社フジテレビジョン 総合開発局 企画担当部長 塚本 幹夫 氏 NHK放送文化研究所 メディア研究所 主任研究員 村上 圭子 氏 ●進行 合同会社江口靖二事務所(デジタルメディアコンサルタント) 江口 靖二 氏	INTER BEE CONNECTED Wrap Upトークセッション ●登壇者 日本テレビ放送網株式会社 安藤 聖泰 氏 インターネット事業部 インターネット事業部 専門副部長 齊藤 浩史 氏 株式会社フジテレビジョン 総合開発局 企画担当部長 塚本 幹夫 氏 NHK放送文化研究所 メディア研究所 主任研究員 村上 圭子 氏 ●進行 合同会社江口靖二事務所(デジタルメディアコンサルタント) 江口 靖二 氏
16:20-17:20	地上波テレビが守るべき広告モデルと変えるべきこと ●登壇者 合同会社江口靖二事務所 (デジタルメディアコンサルタント) 江口 靖二 氏		



# INTER BEE ASIA CONTENTS FORUM

▶11月19日(水)～21日(金)  
 ▶企画:一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会(JESA)  
 ▶会場:幕張メッセ ホール6



ASIA CONTENTS FORUMでは、「アジアから世界」をキーワードに、コンテンツを生み出していく気鋭な人々にフォーカスを当て、最新の映像動向を広くお伝えしています。ハリウッドのクリエイターによる最新VFXの動向・メイキング、ポストプロダクションの最新技術展示&リクルーティングブースに加え、今年はこの業界で働く女性に焦点を当てたWoman's Sessionを開催。ASIA CONTENTS FORUMの場から、InterBEEの世界を広げていきます。



結城 崇史  
ASIA CONTENTS FORUM Director

DigiCon6 ASIA Session	
<b>Made in Asiaのクリエイティビティ</b>	
11:00 12:00	本広 亮行 氏 株式会社プロダクションアイジー 企画室 監督/演出
12:00	杉野 希妃 氏 女優 映画プロデューサー 映画監督
MPTE Session 「Inter BEE 情報発信ステージ!」 一般社団法人日本映画テレビ技術協会 会員企業によるプレゼンテーション	
12:20	開会挨拶: 掛田常任理事、進行: 千崎谷氏
12:24	エヌイービー株式会社 [4ホール 4506] カメラだけでなくバッテリーを様々な機器に電源供給可能なマルチ電源システムの展示等
12:33	株式会社NHKメディアテクノロジー [6ホール 6405] これまでの技術、これからのチャレンジ、ITのすべてを覗いていただきました(創立30周年記念技術展)をコンベンションホールAで併催
12:42	キャノンマーケティングジャパン株式会社 [6ホール 6215] 高精細映像制作を支える技術を、展示や映像、セミナーで体験いただきました
12:51	共創コミュニケーションズ株式会社 [4ホール 4201] 「Think,4K」をテーマにHDワークフローと4K制作環境をご体感いただきました
13:00	クワンテル株式会社 [6ホール 6214] 4K制作を効率化させるGE2とPablo Rio 8Kモデル
13:09	株式会社計測技術研究所 [6ホール 6208] 「今すぐ8K」をキャッチフレーズに、HDや4Kコンテンツを8K映像にアップコンバートするデモンストレーションを行いました
13:18	有限会社シネマックス [5ホール 5001] 2012年に世界初で開発・製造した多角度撮影装置 Spiral Slider Dolly [KATANA]
13:27	ソニービジュアルソリューションズ株式会社 [3ホール 3117] 8Kイメージセンサー搭載のF65RSP、PMW-F55RFPスタイルビルドアップキットによる機軸ある4Kドキュメンタリー撮影等をご提案
13:36	株式会社テクノハウス [1ホール 1506 / 5ホール 5502] 「IP伝送」「ファイルベース」「4K/8K」をメインテーマに掲げ、最新機種を展示致しました
13:45	株式会社ナックイメーজテクノロジー [4ホール 4511] ALEXAから継承された高画質センサーを持ち4K UHDファイル収録が可能となったAMIRA(アミラ)の紹介
13:54	株式会社フォトロン [4ホール 4307] 「4K」をキーワードとした最新映像制作ソリューションの紹介
14:03	株式会社朋楽 [4ホール 4208] 4K時代を支える各種周辺機器、ソリューションをご紹介します
14:12	報映産業株式会社 [1ホール 1509 / 5ホール 5615] ホール1(オーディオ)およびホール5(映像)で楽しく元気に展示しました
14:21	三友株式会社 [5ホール 5501] Teradek社無線伝送装置、Skeed社大容量高速ファイル伝送ソフトウェア等をご提案
14:30	
4K New Wave Session Powered by コマースナル・フォト	
<b>4K時代の映画撮影とフィルムルック</b>	
モデレータ	川本 康 氏 コマースナル・フォト 編集長 パネリスト
15:00 16:00	大屋 哲男 氏 株式会社ピクチャーエッセイ 代表取締役 テクニカルプロデューサー
	山本 英夫 氏 撮影監督
	齋藤 精二 氏 株式会社ピクチャーエッセイ 取締役 DPプロデューサー/カラーグレーダー
<b>動き出したスタイル</b>	
モデレータ	川本 康 氏 コマースナル・フォト 編集長 パネリスト
16:00 17:00	片岡 電一 氏 株式会社ヴォンズピクチャーズ 代表
	兼子 研人 氏 フォートン株式会社 プロデューサー
	浦田 淳氏 株式会社博観堂プロダクツ レタチャー

## JPPA Day 一般社団法人日本ポストプロダクション協会 正会員企業によるプレゼンテーション

11:00 11:20	4Kドラマ 撮影現場からの報告 株式会社日テレテクニカルリソース
11:30 11:50	4K時代だからこそフィルム! 株式会社東京現像所
12:00 12:20	4K主観評価動画の制作 株式会社キューテック
12:30 12:50	字幕付きCMの制作について 株式会社デジタルエッグ
13:00 13:20	4K ハイフレームレートを検証したショートフィルム I wonder why do I like fire works? ~なぜ火花がすきなんだらう~ 株式会社レイ マックレイ
13:30 13:50	実演! 4K RAW ワークフロー 撮影から仕上げまで 株式会社映広
14:00 14:20	より身近な4Kへ ~パナソニック映像における4K映像ソリューション~ パナソニック映像株式会社
14:30 14:50	東海テレビ・TSP共同制作 屋ドラ「聖母・聖美物語」制作ワークフロー 株式会社東京サウンド・プロダクション
15:00 15:20	3DXcite Deltagen インタラクティブARイベント 東風日産X-TRAIL ローンデ2014 in 成都 株式会社デジタルガーデン
15:30 15:50	「実写版パトレイバー」撮影からCG合成まで 株式会社オムニバス・ジャパン
16:00 17:20	JPPA AWARDS 2014 経済産業大臣賞「ゴールデンタイム」受賞者に聞く! パネリスト 望月 資泰 氏 株式会社IMAGICA 経済産業大臣賞/音響技術部門ゴールド賞 受賞 野口 運弘 氏 株式会社IMAGICA 映像技術部門シルバー賞 受賞
17:30 19:00	<b>Production &amp; Creator's Night</b>

VES Session	
<b>VFXの未来</b>	
11:00 12:00	Special Guest ジェフ・フレイス 氏 Erlichson Studios ビジュアルエフェクツ・ソルティエ エグゼクティブ・ディレクター
12:00	エリック・ロス 氏 ビジュアルエフェクツ・ソルティエ エグゼクティブ・ディレクター
Woman's Session	
<b>基調講演 小さなカメラから映画が生まれるとき</b>	
11:21 (金) 13:00 14:00	砂田 麻美 氏 映画監督
<b>パネルディスカッション 女性視点で生まれたヒットコンテンツのつくりかた</b>	
モデレータ	藤 幸子 氏 日経BPヒット総合研究所長・執行役員 日経ウーマン前編集長
14:30 16:00	パネリスト
	大澤 弘子 氏 日本テレビ 情報カルチャー局 担当 次長 プロデューサー
	永山 由紀子 氏 TBSテレビ 編成局 編成部長 担当部長

**Production & Creator's Night at Inter BEE 2014**

展示ホール 6 ASIA CONTENTS FORUM 内 **11.20(木) 17:30 ▶ 19:00**

映像機器のみならず、最新の映像作品そのものにも親しんでいただくために、日本を代表するCG・VFXプロダクションの首脳と、デジタルCG・VFXクリエイターとの交流パーティ Production & Creator's Night を開催しました。

## 同時開催

### The 2nd Japan Post Production Conference 2014

#### 第2回 ポスト・プロダクション研修会議 2014

▶11月19日(水) ▶会場:国際会議場1階 101会議室

▶主催: ▶協力: Inter BEE ▶協賛:

### NAB Showで実績のある研修イベント! 第2回はさらにパワーアップ!

NAB Showで10年間同時開催の実績を持つ、プロフェッショナル向けのトレーニングイベントを Inter BEEにあわせて開催!

今、最も旬なトピックスを厳選!

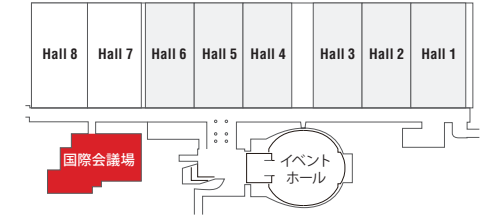
### 時間、コスト、言語などのハードルをクリア!

世界の第一線で活躍する一流講師陣の談話を日本で開講しました。

09:00 10:45	セッション 1 <b>Apple Final Cut Pro X - 仕上げテクニク</b> アバ・シャピロ 氏 このセッションでは、Final Cut Pro Xにおけるオーディオの仕上げとカラー・グレーディング技術の両方をカバーし、オーディオ仕上げでは、オーディオメーターと波形を使った作業、クリップ全体のオーディオ・イコライゼーション、クリップ間のクロスフェード、オーディオのパン、オーディオ・チャンネルの設定、オーディオ・クリップの分割、オーディオエフェクトの活用等や、またカラー・グレーディングでは、プロジェクトのカラー・グレードに必要な要素、即ちビデオ・スコープ、自動色調整、カラーボード、ショット・マッチング、自動的なクリップのマッチング、手動でのクリップのマッチング、スケートン、ピネットとパワーウィンドウ、スタイライズされたルックス等や学びました。
11:00 12:45	セッション 2 <b>DaVinci Resolve によるカラー・グレーディング</b> ロビー・カーマン 氏 このセッションでは、ハリウッドの大作からテレビ番組まで幅広く活用されているDaVinci Resolveの概要、即ちResolveへの映像やプロジェクトの取り込み方法、インターフェースがどのように機能するか、一次修正および二次修正の行い方、映像のスタイライズと映像のレンダリング等の基本を学びました。
11:19 (水) 14:00 15:45	セッション 3 <b>効果的なメタデータとメディア管理ワークフロー</b> アバ・シャピロ 氏 このセッションでは、撮影時のメディアのキャプチャ、バックアップ、タグ付け、トランスコード、管理のために現場で使える戦略、ハードウェア、ソフトウェアのソリューションをカバーしました。また、整理・ロギング・詳細なノートの取り方に関するベストプラクティスも紹介しました。更に、編集時にリスクを軽減し納期を短縮するために撮影現場にエディターがいることの利点を学びました。
16:00 17:45	セッション 4 <b>放送用の仕上げテクニク</b> ロビー・カーマン 氏 このセッションでは、放送界の仕上げ技術を学びました。カバーするトピックは、ギャップ、トランジションの失敗、ブランキング、バグ、テロップ・セーフティの確認だけでなく、その他の映像エラーのチェックを含みます。また、カラーコレクションの基本的事項、放送における法規制、グラフィックス技巧等も見ていきました。さらに個人向け・小規模なチーム向け、および大規模なグループ向けの完全な仕上げ工程のワークフローを構築する方法も学びました。

**講師 アバ・シャピロ 氏**  
ビデオや映画の制作で25年以上の経験を持ち、数々の賞を受賞してきた脚本家/プロデューサー/ディレクター。制作会社Shapiro Video & Multimediaを経営し、DVCAM、HD、35 ミリフィルムなどあらゆるフォーマットでの制作実績がある。USA Today誌、AP通信、米航空宇宙局(NASA)、CWテレビジョンネットワーク、および国防総省を含む、商業・企業・政府の数多くのクライアントを持つ、Appleのプロビデオアプリケーション認定トレーニング・プログラムのリード・インストラクターでもある。

**講師 ロビー・カーマン 氏**  
カラーリスト、Amigo Media LLC社副社長。現在、Final Cut Pro, DVD Studio Pro, Aperture, Motion, Colorの認定インストラクター。主な書籍:「Final Cut Pro Workflows: The Independent Studio Handbook」(ジェイソン・オスター共著)、「Color」(デビッド・グロス/マイケル・ウォール著)、「The Encyclopedia of Color Correction Field Techniques Using Final Cut Pro」(アレクシス・ヴァン・ハーケマン著)。「関係・教育・創造」をモットーとするコンサルティング会社Amigo Mediaの共同経営者。



## 第51回 民放技術報告会

▶11月19日(水)～21日(金) ▶会場:国際会議場3階

▶主催・企画:一般社団法人日本民間放送連盟(JBA)

技術報告	第1会場「301号室」	第2会場「302号室」	第3会場「303号室」
11.19 (水)	10:55 ▶ 17:10 制作技術部門	10:30 ▶ 12:10 送信部門 13:00 ▶ 17:10 回線・伝送部門	10:30 ▶ 16:45 ラジオ・音声部門
11.20 (木)	13:30 ▶ 16:00 特別企画 「ファイルベース」ホントのところ、そしてこれから ~放送局からテープは消えたのか?~	10:30 ▶ 13:50 データ放送・デジタルサービス部門	10:30 ▶ 14:40 制作技術部門
11.21 (金)	10:30 ▶ 16:20 送出部門	14:15 ▶ 16:20 画像技術部門	15:05 ▶ 17:10 情報・ネットワーク部門

**NHKメディアテクノロジー 創立30周年記念技術展**

▶11月19日(水)～21日(金) ▶会場:国際会議場2階 コンベンションホールA  
▶主催:株式会社NHKメディアテクノロジー

	11.19(水)	11.20(木)	11.21(金)
10:30 ▼ 10:50	オープニングセレモニー 江口 靖二 氏 デジタルメディアコンソルチアント		
11:30 ▼ 12:00	放送・IT融合トークショー ハイブリッドキャストの新サービスを支える技術 菅原 達也 氏 日本放送協会	ステディカム実演 1カメラライブショー ドラマ「私のパパはMTの…」	収録テクニク実演 「MTバンドLive!」
12:10 ▼ 13:10	震災3D映画「大津波 3.11未来への記憶」予告編(5分)/4K機材操作体験 など		
13:30 ▼ 14:10	トークショー 世界初! 8K3Dはこうして生まれた 本田 雅一 氏 テクノロジージャーナリスト	トークショー 世界初! 8K3Dはこうして生まれた 河合 隆史 氏 早稲田大学 教授	トークショー 世界初! 8K3Dはこうして生まれた 杉山 智之 氏 デジタルハリウッド大学 学長
14:20 ▼ 15:10	震災3D映画「大津波 3.11未来への記憶」予告編(5分)/4K機材操作体験 など		
15:30 ▼ 16:00	CG・VFXデモンストレーション ドラマ 「THE LONG GOODBYE」	高精細時代のドラマ制作ディスカッション 4Kドラマ「桜ほらさ」	トークショー 映像を活用した新たなWeb表現の提案
16:10 ▼ 17:10	震災3D映画「大津波 3.11未来への記憶」予告編(5分)/4K機材操作体験 など		

## 全映協フォーラム2014 in 幕張

▶11月20日(木) ▶会場:APAホテル 東京ベイ幕張「東京ベイ幕張ホール」

▶主催:一般社団法人全国地域映像団体協議会

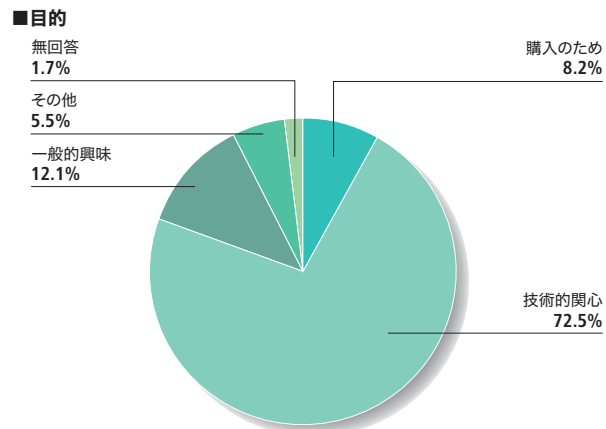
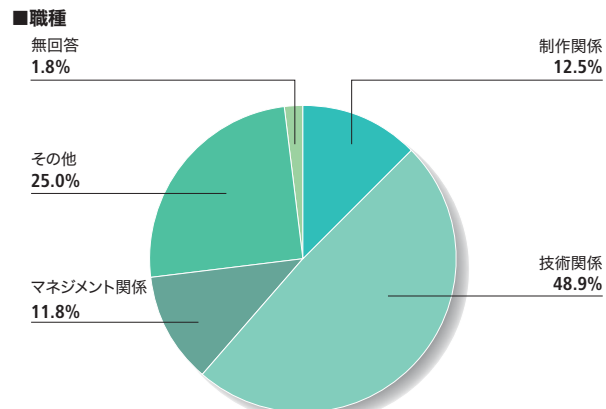
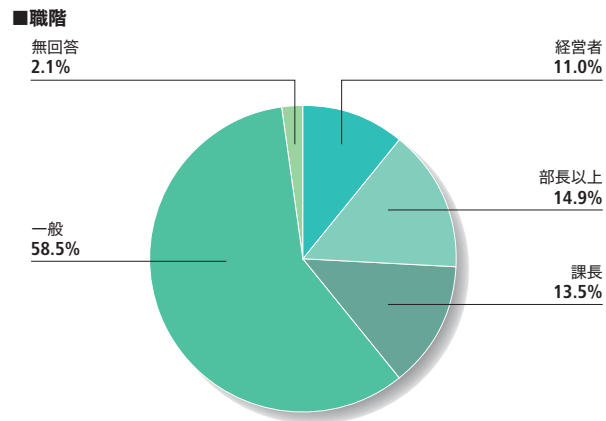
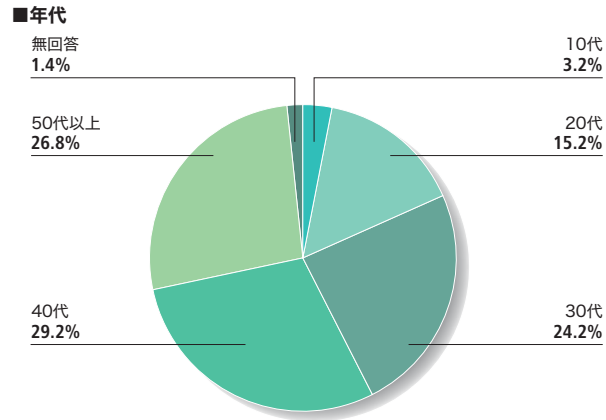
13:30	▶開会挨拶
14:00	▶セミナー1 全映協25年度 海外放送番組制作と放映、報告と今後のあり方 GPR代表 清田 智 氏
14:30	▶セミナー2 アジアと日本の地域を結ぶ新しいメディアマーケティング ABP代表 川上 準司 氏
15:15	▶セミナー3 経済産業省プレゼンテーション 経済産業省 メディアコンテンツ課 課長 柏原 恭子 氏
15:45	▶セミナー4 総務省プレゼンテーション 総務省 コンテンツ振興課 課長 瀧本 博信 氏
16:30	▶全映協グランプリ2014 結果発表・表彰式
18:00	▶大懇親会(会費:6,000円)





# Result: Visitor Profile

## ◆来場者の属性



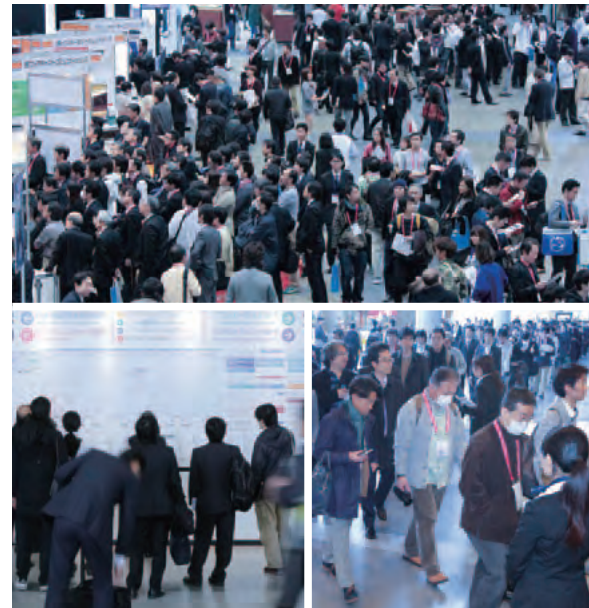
## ■日別来場者内訳

	11/19(水)	11/20(木)	11/21(金)	合計
国内登録入場者数	11,142	13,576	12,101	36,819
海外登録入場者数	467	422	251	1,140
合計	11,609	13,998	12,352	37,959

来場者数: **37,959**名(過去最多)

## ■登録来場者数の内訳

エリア	国・地域数/来場者数	国・地域別の来場者数
日本国内	1カ国/36,819名	日本 36,819名
アジア地域	12カ国・地域/673名	韓国 320名/タイ 97名/ 台湾 72名/中国 48名/香港 46名/ インドネシア 29名/ シンガポール 27名/フィリピン 16名/ マレーシア 9名/スリランカ 6名/ ベトナム 2名/バングラデシュ 1名
北中南米地域	8カ国・地域/105名	アメリカ合衆国 73名/カナダ 9名/ ブラジル 9名/アルゼンチン5名/ メキシコ 5名/チリ 2名/ ウルグアイ1名/パラグアイ 1名
大洋州地域	2カ国・地域/5名	オーストラリア 4名/ニュージーランド 1名
中東・アフリカ地域	5カ国・地域/9名	UAE 3名/サウジアラビア2名/ 南アフリカ 2名/イスラエル 1名/ ボツワナ1名
ヨーロッパ地域	15カ国・地域/97名	ドイツ 28名/イギリス 23名/ スウェーデン8名/スペイン 7名/ イタリア 5名/フランス 5名/ ベルギー 4名/ポルトガル 4名/ ロシア 4名/チェコ 2名/ ノルウェー 2名/ルーマニア 2名/ オーストリア 1名/オランダ 1名/ ハンガリー 1名
不明		251名
	43ヶ国・地域	37,959名



## ■業種

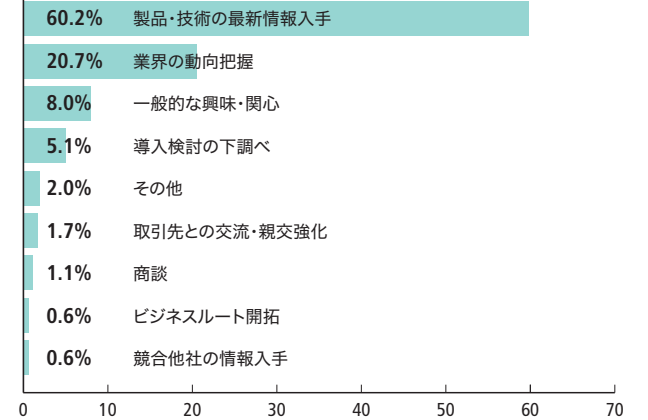
放送機器メーカ	13.8%	コンテンツ制作関連	2.7%
その他ユーザ	9.4%	舞台・演出・美術・照明関連	2.6%
民間放送テレビ局	8.9%	CATV関係	2.4%
その他ゲスト	8.5%	インターネット関連	2.4%
ポストプロダクション	7.7%	官公庁・団体	2.0%
映画・映像制作会社	5.8%	施設・店舗関係	1.6%
学生	5.7%	広告代理店	1.1%
商社	5.5%	ビデオソフト制作会社	1.0%
プロダクション	4.4%	コンテンツ配信事業者	0.9%
PA関係	4.1%	民間放送ラジオ局	0.7%
NHK	3.8%	レコード制作会社	0.6%
通信事業者	3.2%	無回答	1.2%

## ■関心(複数回答)

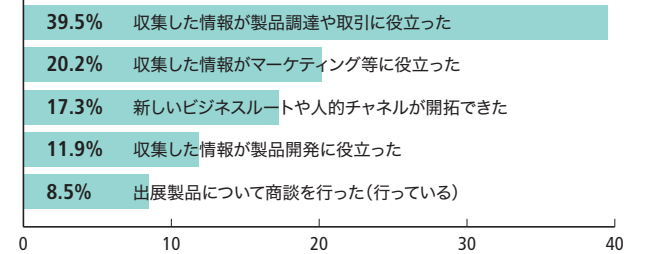
映像機器全般	54.2%	送信システム	8.8%
オーディオ機器全般	32.5%	デジタルシネマ	8.3%
カメラ	27.8%	マルチメディアシステム	8.3%
編集・制作装置	20.5%	照明機器	8.1%
映像モニタ	16.2%	各種特機・周辺製品	7.8%
ソフトウェア	11.6%	IPTV関連	7.5%
ミキサ	11.2%	3D	7.5%
スピーカ	11.2%	Mobile TV関連	6.2%
VTR・メモリアカード・光ディスク	11.2%	測定機器	5.7%
サーバ・ストレージ	11.0%	製作管理システム	4.6%
マイクロホン	10.1%	美術・舞台演出関連	3.9%
デジタルコンテンツ	10.0%	電源装置	3.4%
中継システム	9.8%	その他	2.1%
デジタルサイネージ	9.8%	無回答	1.3%
送出システム	8.7%		

## 2014年来場者アンケート

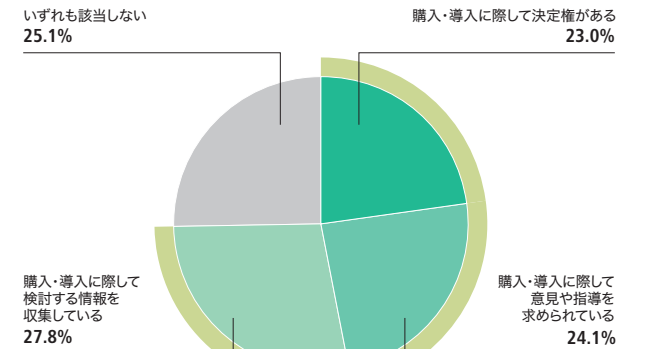
### ◆『Inter BEE 2014』にご来場された目的を教えてください。(複数回答)



### ◆『Inter BEE 2014』を見学して、その後のビジネスに役立ちましたか。(複数回答)



### ◆御社での製品・サービスの購入・導入にあたって、あなたはどの程度関与されていますか。

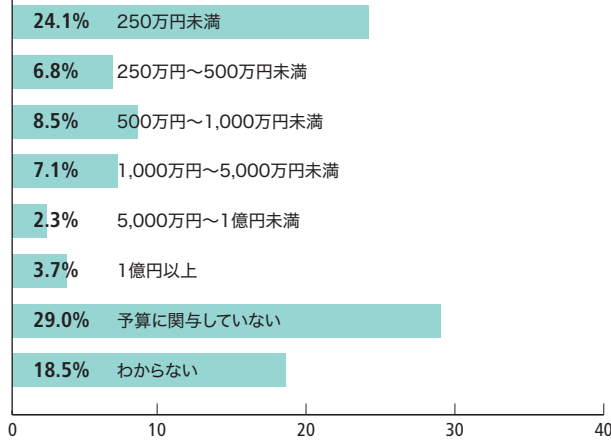


購入・導入へ関与している: **74.9%**

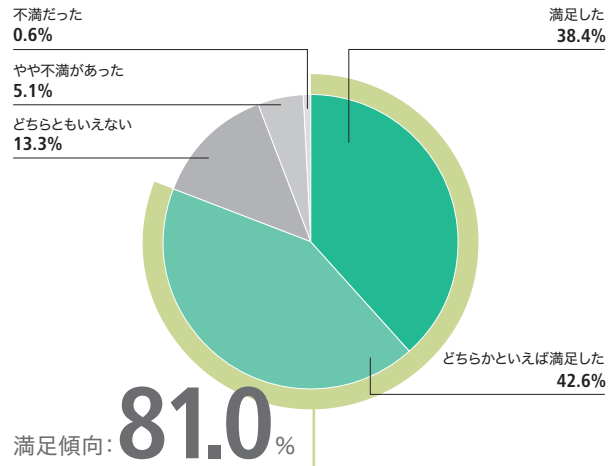


## 2014年来場者アンケート

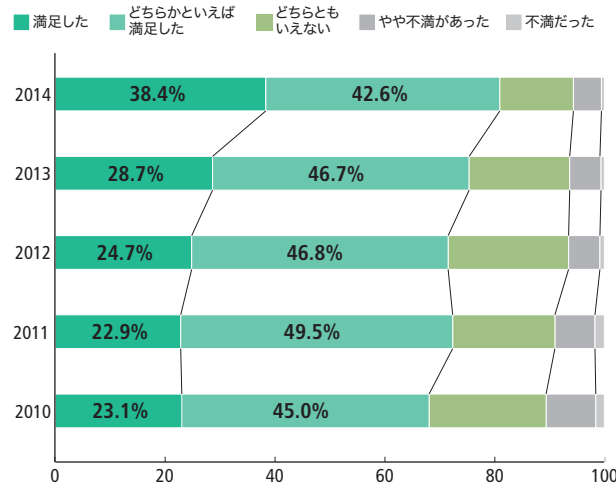
◆あなたが関与する製品・サービスの購入・導入に対する予算は、おおよそ年間いくらくらいですか。



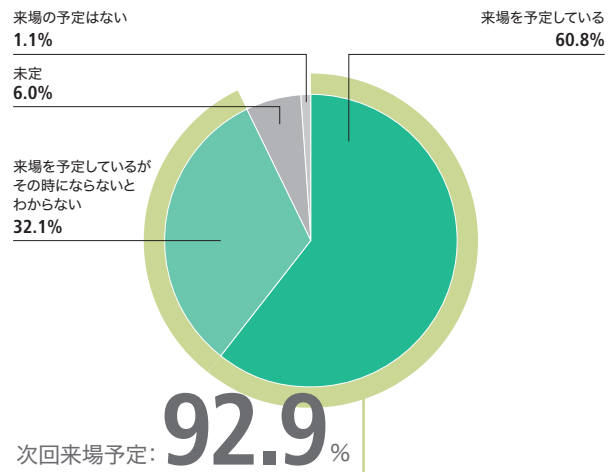
◆Inter BEE 2014全体を通して、どの程度満足しましたか。



■満足度の変遷



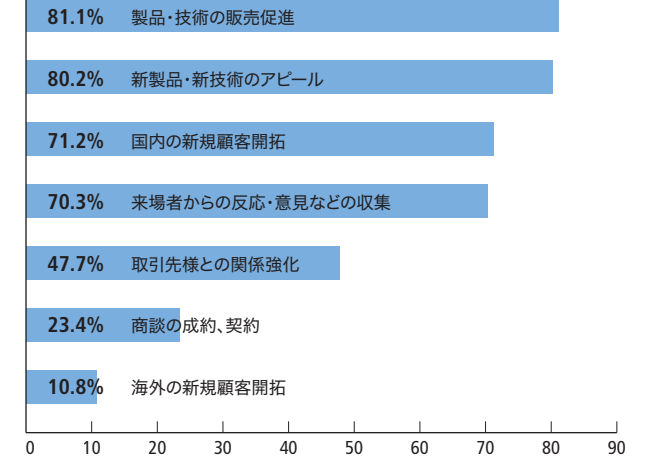
◆次回の『Inter BEE 2015』にご来場いただけますか。



## Result: Exhibitor Profile

## 2014年出展者アンケート

◆出展した目的【複数回答】



■出展者数

展示部門	出展者数	小間数
プロオーディオ部門	319社	311小間
プロライティング部門	20社	29小間
映像・放送関連機材部門	563社	1,317小間
ICT/クロスメディア部門	75社	116小間
合計	977社	1,773小間

出展者数: **977**社(過去最多)

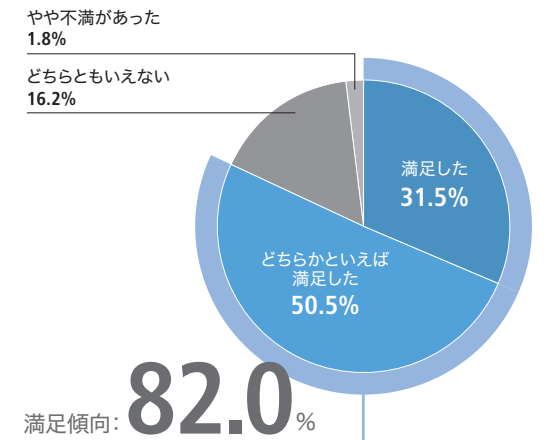
■出展者数の内訳

エリア	国・地域数/出展者数	国・地域別の出展者数
日本国内	1カ国/434社	日本434
アジア地域	7カ国・地域/77社	韓国24/台湾22/中国20/インド4/シンガポール4/香港2/マレーシア1
北中南米地域	3カ国・地域/212社	アメリカ190/カナダ21/ブラジル1
大洋州地域	2カ国・地域/13社	オーストラリア10/ニュージーランド3
中東地域	2カ国・地域/10社	イスラエル9/トルコ1
ヨーロッパ地域	19カ国・地域/231社	ドイツ71/イギリス68/フランス18/イタリア12/オランダ12/スイス9/スウェーデン7/スペイン6/ベルギー6/デンマーク5/ノルウェー4/オーストリア4/フィンランド2/ブルガリア2/アイルランド1/スロバキア1/チェコ1/ポルトガル1/リヒテンシュタイン1
	34カ国・地域	977社

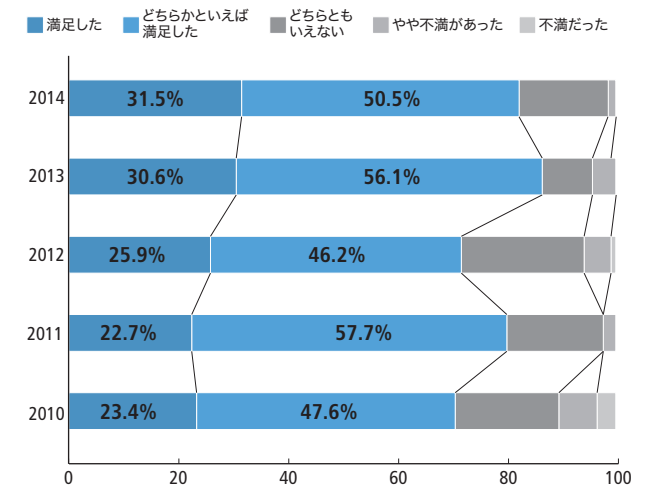
出展国・地域数: **34**ヶ国・地域(過去最多)

海外出展者数: **543**社(過去最多)

◆今回の目的達成の満足度



■満足度の変遷





# Result: Publication and Promotion



## 1. 広報活動(リリース配信実績)

- \*出展募集開始告知(3/3)
- \*Inter BEE CONNECTED 開催告知(7/15)
- \*入場事前登録開始告知(9/19)
- \*INTER BEE EXPERIENCE 概要決定告知(10/15)
- \*取材誘致案内(11/10・11/17)
- \*Inter BEE CONNECTED 概要決定告知(11/14)
- \*閉幕告知(11/18)
- \*プレスルーム設置(11/19～21)
- \*終了報告(11/21)

## 2. プレス登録者数

**411**名(うち海外30名)

## 3. 印刷媒体掲載記事数

	記事数
開催前	139件
開催中	29件
開催後	101件
合計	269件

※2015.1.20現在

## 4. 国内記事掲載(主な掲載実績)

掲載日	媒体名	内容
3/10	映像新聞	Inter BEE 2014 出展募集を開始
3/12	電波タイムズ	Inter BEE 2014 出展募集を開始 今年は何の50回目!
7/21	映像新聞	Inter BEE 2014で新企画「CONNECTED」開催 出展募集を開始
7/23	電波タイムズ	「Inter BEE CONNECTED」開催 出展募集を開始
7/28	家電流通新聞	「Inter BEE CONNECTED」Inter BEEと併催
8/4	映像新聞	Inter BEE 50周年記念新企画 次世代見越した催しも
9月号	FDI(Full Digital Innovation)	(特別記事)Inter BEE 50年のあゆみを振り返る
9月号	Stage Sound Journal	Inter BEE 2014 第50回開催記念イベント「INTER BEE EXPERIENCE」
9/3	電波タイムズ	JEITA 50回の節目を迎える「Inter BEE」 東京五輪の翌年にスタート
9/22	電波新聞	Inter BEE 2014 6ホールに1670小間 11月に幕張メッセで開催
9/22	家電流通新聞	電子情報技術産業協会 Inter BEE 2014 を開催
9/24	電波タイムズ	JEITA 入場事前登録受付 「Inter BEE」公式ウェブサイトで開催
9/25	ビデオ通信	JEITA Inter BEE 2014の開催概要を発表
10月号	VIDEO JOURnAL	「Inter BEE」50年の歩みを振り返る
10月号	FDI(Full Digital Innovation)	Inter BEE 2014 開催概要決定
10月号	放送ジャーナル	「Inter BEE 2014」の開催概要を発表
10/16	ビデオ通信	Inter BEE 2014 第50回記念イベント「INTER BEE EXPERIENCE」開催
10/20	映像新聞	Inter BEE 2014で50周年記念イベント ラインアレイスピーカーを突演
10/22	電波タイムズ	「Inter BEE EXPERIENCE」開催 ラインアレイスピーカーの体験デモ実施
11月号	APB(Asia-Pacific Broadcasting)	Inter BEE 2014 set to be biggest show ever
11月号	PRONews Mag	Inter BEE 50回開催を節目に
11月号	Sound & Recording Magazine	Inter BEE 2014 第50回開催記念イベント「INTER BEE EXPERIENCE」
11月号	FDI(Full Digital Innovation)	第50回開催記念イベント INTER BEE EXPERIENCE 概要(特別記事)Inter BEE 2014を前にして
11月号	B-maga	「Inter BEE 2014」開催概要 4Kへ本格ダッシュ!
11/10	映像新聞	「Inter BEE 50年特集」進化続ける放送機器① 「Inter BEE 50年特集」新たな催し Inter BEE Connected 「Inter BEE 50年特集」50回を記念するイベント Inter BEE EXPERIENCE 「Inter BEE 50年特集」豊富な事例と海外情報 欧米・南米から招待講演
11/17	電波新聞	話題は4K・国際放送機器展 幕張に会場移り25年 楽しみな3日間に
11/17	家電流通新聞	Inter BEE 新企画概要決定 「Inter BEE Connected」実施
11/17	映像新聞	Inter BEE 2014 展示会の見どころ 「期待のどこでもテレビ」 Inter BEE 2014 特集 幕張イベント会場で3つのパフォーマンス
11/17	ビデオ通信	Inter BEE 20日に第50回開催記念イベント「INTER BEE EXPERIENCE」
11/18	日刊工業新聞(東京・大阪)	Inter BEE 2014 音・映像・通信の総合展 開幕 幕張メッセ 21日まで幕張メッセ
12月号	NEW MEDIA	(今月の表紙)放送技術の進化を伝えた Inter BEE 50年 Inter BEE 50年 特別記念インタビュー

掲載日	媒体名	内容
11/19	電波新聞	きょう開幕 国際放送機器展 4K関連中心 50周年迎えた放送機器展 4K本放送を見据えた展示
11/19	電波タイムズ	2014年国際放送機器展 節目の第50回、次の照準は2020年… 2014年国際放送機器展 放送技術の進化と共に歩んだ半世紀 Inter BEE 50年を振り返る NAB・IBCと並び、世界3大放送機器展に Inter BEE 2014の開催に際して 一般社団法人電子情報技術産業協会 Inter BEE Special Interview 8K放送の実現に向けて機器開発進む
11/19	オートメーション新聞	音と映像と通信のプロフェッショナル展「Inter BEE」19日から3日間開催
11/20	電波新聞	第50回国際放送機器展 4K関連であふれる会場
11/20	ビデオ通信	Inter BEE 2014 開幕!
11/21	日経産業新聞	放送機器の展示会「インタービー」番組制作にもクラウド
11/21	電波新聞	国際放送機器展 4Kの熱気を 映像の鮮明度アピール
11/21	電波タイムズ	過去最多の977社が出展 50回目の Inter BEE 開幕
11/21	日経産業新聞(東京・大阪)	放送機器の展示会「インタービー」番組制作にもクラウド
11/24	電波新聞	4K時代を迎えた「国際放送機器展」① 977社・団体参加、3万8000人来場
11/24	映像新聞	Inter BEE 2014 HD/4Kの両立に焦点
11/24	通信興業新聞	Inter BEE 2014 開催 電子情報技術産業協会 IP・クラウドをテーマに講演
11/24	ビデオ通信	Inter BEE 2014 開幕!
11/26	電波新聞	4K時代を迎えた「国際放送機器展」② 超高精細映像の新技術など紹介
11/27	ビデオ通信	出展者記事
11/28	電波タイムズ	2014年国際放送機器展「Inter BEE 2014」開幕
12月号	B-maga	4K本格化へ「Inter BEE 2014」<50回目の節目を迎えた「Inter BEE」レポート>
12月号	VIDEO JOURnAL	Inter BEE 2014 過去最多の来場者数を記録し開幕
12/1	映像新聞	Inter BEE 2014レポート 過去最高の来場者数 8K時代への通過点か
12/8	家電流通新聞	Inter BEE 過去最高の来場者数 出展者数も過去最多に
12/8	映像新聞	Inter BEE 2014レポート ラインアレイスピーカー実演 9社が参加し最新機器を披露
12/12	電波タイムズ	Inter BEE 2014 50回記念、盛況のうちに開幕 昨年を大きく上回る3万7959名が来場
12/15	映像新聞	Inter BEE 50年 進化続ける放送機器② ファイルベース化の新世紀
1月号	放送技術	特集 Inter BEE 2014 第50回「国際放送機器展」概観
1月号	日本カメラ	Inter BEE 2014レポート (出展各社)
1月号	SOUND DESIGNER	Inter BEE 速報[前編] (出展各社)
1月号	ビデオ SALON	Inter BEE 2014 4K/8K環境が一気に加速!
1月号	Senka 21	Inter BEE 2014 技術力の進歩も目を見張る技師の注目度「4K8K」
1/5	映像新聞	Inter BEE 2014レポート Inter BEE Connected 番組視聴計測の最前線
2月号	無線と実験(MJ)	Inter BEE 2014 国際放送機器展 第50回を記念し、会場を拡大して開催
2月号	NEW MEDIA	Inter BEE 50回目のファーストメッセージ発信へ 過去最多の3万8,000人が来場
2月号	SOUND DESIGNER	第50回開催記念イベント INTER BEE EXPERIENCE

## 5. 国内テレビ放映

放送日	放送局	番組名
11月22日(土)	フジテレビ	新・週刊フジテレビ批評
12月1日(月)	テレビ東京	ワールドビジネスサテライト

## 6. 海外テレビ放映

欧州

放送日	放送局	番組名
11月30日(日)	LCI	Plein Ecran- Inter BEE 2014 Report
12月1日(月)	LCI	Plein Ecran- Inter BEE 2014 Report(再)
12月2日(火)	LCI	Plein Ecran- Inter BEE 2014 Report(再)
12月3日(水)	LCI	Plein Ecran- Inter BEE 2014 Report(再)
12月4日(木)	LCI	Plein Ecran- Inter BEE 2014 Report(再)
12月16日(火)	NTN24	CTS Salud Ciencia et Technologia
12月20日(土)	NTN24	CTS Salud Ciencia et Technologia (再)

LCI(La Chaîne Info)はフランス最大の放送局TF-1の配下のフランスのケーブルニュースチャンネル。24時間ニュースネットワークで視聴者数は720万世帯以上を有し、全フランスおよびフランス語圏内にニュースを提供しています。フランス語放送のCNNと言われている。

北米・南米

放送日	放送局	番組名
12月16日(火)	NTN24	CTS Salud Ciencia et Technologia
12月20日(土)	NTN24	CTS Salud Ciencia et Technologia (再)
12月24日(水)	AWE(All Wealth Entertainment)	Boys Toys
12月22日(月)	RCN-TV	Main newscast
12月28日(日)	RCN-TV	Main newscast
1月16日(金)	IFC-TV	Interstitial news piece
1月18日(日)	IFC-TV	Interstitial news piece(再)

AWEは全米放映ケーブルネットワークテレビ局、ライフスタイル、娯楽チャンネル。NTN24(Nuestra Tele Noticias 24 Horas)は北米・南米地区を中心に放映されるスペイン語による24時間国際ニュースチャンネルです。NTN24はスペイン語によりニュース、時事、スポーツ、エンターテインメントのニュース番組で、サテライト及びケーブルにてアラスカからバタゴニアまで視聴できる。RCN TVは南米・コロンビアの主要民放ネットワークテレビ。

## 7. 広告掲載(国内)

発行日	掲載紙誌
9月18日	PRO SOUND
9月20日	ビデオサロン
9月25日	テレコミュニケーション
9月27日	放送技術
9月30日	Stage Sound Journal
10月1日	FDI
10月10日	CG World & Digital Video
10月10日	MJ
10月13日・27日・11月10日	映像新聞
10月15日	ビデオジャーナル
10月15日	サウンド&レコーディングマガジン
10月15日	日本ポストプロダクション協会会報(同梱)
10月17・20・22・29・31日	電波タイムズ
11月1日	月刊 ニューメディア
11月1日	映画テレビ技術
11月7・10・12・14・19日	電波タイムズ
11月13・19日	電波新聞

## 8. 広告掲載(海外)

発行日	掲載紙誌
9/15~10/15	Asia Pacific Broadcasting (アジア放送 web広告)
9/15~10/15	Broadcasting & Cable (北米版放送 web広告)
9月27日	Video Plus (韓国映像)
9月27日	Television Asia (アジア放送)
9月30日	PA (韓国音響)
9月30日	ABU Technical Review (アジア放送技術)
10/1~10/31	科訊ネット (中国語圏 web広告)
10/1~10/31	AV Specialist (英語圏 web広告)
10月2日	Asia Pacific Broadcasting (アジア放送)
10月6日	Broadcasting & Cable (米放送)
10月9日	Broadcast India (インド映像・音響)
10月20日	Broadcast & Production (中国放送・制作)

## 9. Inter BEE Official Mail Magazine

過去の来場者データベースおよび、2014年の事前登録者に向けて、「Inter BEE 2014 OFFICIAL MAIL MAGAZINE」を配信。

約 **82,000** 件 **25** 回配信

※情報配信可能なデータ件数

## 10. Inter BEE 公式 Website

◆サイト訪問数: **190,867** 件(対前年比 **130**%)  
(11月1日~30日)

Inter BEE Online Magazineでは、年間を通じてInter BEE出展者情報はもとより、関連展示会や業界最新ニュースなど、話題性の高い情報をいち早くキャッチアップして配信しています。

出展者事前取材記事: **51**本

会場取材記事: **49**本

会場取材ビデオオンデマンド: **53**本  
(Inter BEE TV)

## 11. 公式Facebook

◆会期終了直後の「いいね!」数:

**3,200** 件(対前年比 **132**%)

◆Facebookページから公式Websiteへのアクセス数:

**17,718** 件(対前年比 **112**%)

## 12. 公式Twitter

◆Twitterフォロワー数(最大):

**561** 件(対前年比 **165**%)

◆Inter BEE関連つぶやき件数:

**7,206** 件

※つぶやきに「Inter BEE」「インタービー」が含まれるもの

## 13. メディアパートナー

関連業界紙誌にはメディアパートナーとして

Inter BEEをサポートいただき、多くの出展者の記事を掲載いただいています。







◆会場  
幕張メッセ  
石原 一彦 鎗田 守人  
高田 圭佑 加藤 慎也  
山本 雄介  
メッセトラベルサービス  
中西 達也 白石 絵里  
望月 清隆

◆通信回線  
メッセ通信回線担当  
松田 俊広  
大電テクニカ  
石川 正太 長山 隼人  
清水 克俊 河野 公弥  
河野 勝年 根本 真樹

◆アンテナ  
トーフナ映像  
宍倉 政徳 金子 恭司  
山田 麻衣子 宮崎 徹  
富山 統一

◆会場清掃  
千葉県ビルメンテナンス協同組合  
相原 信 佐藤 清一  
早川 孝志 齋藤 賢二  
松澤 人臣 本山 清  
田所 和幸 福嶋 幸雄  
鈴木 明浩 谷口 真弓  
大地 琳子 上野 茜  
長岡 美子 及川 克己  
中野 厚子 滝田 紀子  
磯村 誠 古財 拓也  
玉川 風治 石井 則文

◆保税展示  
石川組  
長谷川 麻希 西塔 英典  
石原 浩之 星野 和浩  
◆ケータリング  
ニラックス  
小谷 綾子 清水 圭  
松尾 岳 濱田 健次  
恩田 光

◆ホテルオフィシャルエージェント  
近畿日本ツーリスト  
下河 浩 児玉 靖生  
松本 勲

◆会場施工  
ムラヤマ  
山崎 和紀 大西 正剛  
赤塚 昭太 張 婉怡  
田村 伸男 熊谷 力成  
松本 昌明 佐竹 菜音子  
上野 博之 川上 敏行  
小倉 弘啓 小澤 陽一  
宮崎 智弘 岩瀬 友行  
奥村 義昭 辻村 直  
齋藤 清 林 雅哉  
小川 栄次 朝倉 淳  
末友 重雄

◆電気工事  
昭豊電機  
鈴木 崇貞 筑比地 幸生  
波田野 正行 時田 健一  
伊藤 謙三 鈴木 昭儀  
鈴木電機  
鈴木 倫之 鈴木 貴之  
飯田 展生 小谷野 洋世  
八木沼 健太 岸田 正和  
中村 功也 戸田 達成  
柴代 修三 宇野沢 綾子

◆機材レンタル  
キッセイコムテック  
奈良橋 潤一 渡邊 真愛  
望月 裕典 柳沢 梢  
篠田 裕太 手塚 香奈

◆バーコードリーダーレンタル  
ケイズティアンドケイ  
池田 勉 鈴木 猛  
山崎 修 濱田 剛

◆運営サポート/アルバイト派遣  
ケン&スタッフ  
山本 正明 山本 剛也  
徳田 雅之 梨本 和也  
飯田 稔 田中 洋輔  
東野 脩

◆会場警備  
テックス  
谷 雄介 池上 宏  
佐藤 佑亮 中西 寛典

◆休憩所ラウンジ  
丸の内橋膳  
藤田 秀昭 橋口 琢磨  
武野 美智代 霜田 知佳  
河野 祐子 初澤 章徳  
和光産業  
田中 利明 松下 聡  
佐野 隆 川口 誠  
卯月 則男 金田 有弘  
中村 美恵子 川上 百合子  
森 博

◆Inter BEE Content Forum 企画  
コーディネーター  
為ヶ谷 秀一 國重 静司  
沢口 真生 亀川 徹  
吉井 勇

◆Asia Contents Forum 企画  
ディレクター  
結城 崇史

副ディレクター  
坂本章

◆INTER BEE CONNECTED 企画  
アドバイザーボード  
安藤 聖泰 江口 靖二  
小林 直樹 齊藤 浩史  
塚本 幹夫 村上 圭子

◆Inter BEE Content Forum 運営  
アイビー企画  
高山 正宏 永井 柳雄  
室谷 行雄 守屋 典子  
富安 元  
Soundduck  
桐谷 俊彦 松尾 貴弘

Prism  
松浦 靖 川久保 賢志  
Soundman  
佐々木 敦史  
Bayseas  
永嶋 和彦

Christie Digital Systems  
吉田 ひさよ  
アストロデザイン  
松田 博也

日本コンベンションサービス  
堀 朝子 鈴木 晴晃  
高田 翔太 村上 諒  
渡辺 幸靖 板谷 絵津  
上谷 寛志 小熊 弥生  
岡本 和子 岡本 僚子  
小池 勢津子

◆Asia Contents Forum /  
INTER BEE CONNECTED 運営  
ピーシーオーワークス  
石崎 裕也 房田 隆征  
蔦澤 詩乃

On Time  
小野 雄二  
ヒビノメディアテクニカル  
毛利 元 岩崎 洋  
竹高 翔太 太田 里美  
森 弘行 櫻井 賢治  
舟貝 崇 吉澤 孝道  
小林 佳樹 杉田 久武  
樋口 研 坂本 和男  
小柳 健二

◆INTER BEE EXPERIENCE 共同制作  
ライゾマティクス  
千葉 秀憲 石橋 素  
真鍋 大度 渡辺 綾子  
柳澤 知明 坂本 洋  
原田 克彦 望月 俊考  
西本 桃子

◆INTER BEE EXPERIENCE 出演  
SjQ++  
魚住 勇太 米子 匡司  
ナガイトイサオ アサダワタル  
大谷 シュウヘイ KEZZARDRIX  
DAIKI ASARI

onnacodomo×宮内優里  
RUKA NOGUCHIla YASUKO SEKI  
DJ Codomo 宮内 優里  
Rhizomatiks×ELEVENPLAY  
MIKIKO KAORI YASUKAWA  
Ametsub

DJ  
SETSUYA KUROTAKI  
LiLi  
Jiro Hajime  
Miyuki Yukko  
Katsuhiko

ナレーション  
羅田 等 高木 礼子  
MC  
Sascha

アナウンス  
小川 千鶴子

◆INTER BEE EXPERIENCE 運営  
第50回開催記念プロジェクトチーム  
高橋 嘉樹 渡部 ひとみ

CCN  
安藤 嘉康 織田 聡  
松久 周平 古橋 正裕

マインド  
仲倉 正伸 西 亨  
山下 真理子 山口 太郎  
CLAMP  
南 慎一 阿部 弘庸  
津吹 憲宏

シネフォーカス  
加藤 俊哉 佐野 智章  
高橋 英雄 山崎 元裕  
権四郎  
杉中 敏行 松田 信哉  
上村 厚次郎 関谷 翔太  
大橋 拓仁 ホウユテン  
前田 和馬

チーム大内  
大内 健司 橋本 敏邦  
按田 宗親 東 真吾  
斎藤 民紀 天羽 陽介  
田中 光基 志賀 浩義  
須藤 由里 大津 仁  
安藤 圭祐 仁科 友香里  
湯沢 香子 小林 浩美

千葉共立  
設楽 伶奈 志村 勝  
小山 菜緒 加瀬 久義  
垣真 好江  
ビジュアルアンドエコー・ジャパン  
藤原 徹也 清宮 秀敏

◆Inter BEE プロモーション事務局  
プロデューサー  
中西 隆 菅原 貴子  
ライター  
朝比奈 朋子

◆Inter BEE ニュースセンター  
制作・進行  
小林 直樹

取材・撮影・編集  
福田 友美 三浦 明美  
榎本 摩耶子 杉沼 浩司  
橋本 雄一 隅倉 正隆  
岩元 直久 山下 香歌  
川田 宏之 境 治  
塚本 敏夫 扇田 裕太郎  
森山 正寿 豊川 裕之  
渡辺 直樹 山本 薫平  
関根 隆 大河原 徳人  
芳賀 寛之 吉田 康弘  
内藤 昭生 小林 貴之  
武谷 光太郎 松崎 浩一  
鈴木 浩二 島山 亨  
小代 巴菜子 折茂 栄一  
森 幸菜

◆広報  
インターメディコム  
洞井 巳起男 鶴 洋子

◆アートディレクション  
K-Attack  
宮坂 克己 阿部 誠司

◆フォトグラフ/ビデオ  
クラノフォトオフィス  
蔵野 幸雄 梅村 貴子  
米山 真人 加藤 彰  
服部 一人

Hul-inc  
吉原 重治  
フリーフォトグラファー  
羽瀨 みどり  
リッチフィールド・ネットワークス  
菊地 恵一 夏目 啓一郎  
景山 なつみ 豊原 ヒロ子

◆Website/登録システム  
プロット  
菟田 貴行 坂田 英彦  
工藤 岳 大浜 英昭  
浦野 義匡 佐藤 雄太  
吉田 昌平 栗本 早織  
佐藤 滯 木村 友亮  
早川 雄哉 木下 達也  
西山 翔 西村 崇  
山下 卓也

エキスポート・ジャパン  
高岡 謙二 フィオナ トウ  
平野 友規

チアーズ  
坂根 雄造 土井 孝芳

◆印刷/ノベルティ  
栄光舎  
水野 健一 浅見 真一郎  
飛山 智子  
アド・コーポレーション  
国吉 志  
シマダ記章  
島田 芳浩

Inter BEE 2014 の開催を  
支えてくださった皆様に  
主催者・事務局一同  
心から感謝申し上げます。







INTER BEE ONLINE  
www.inter-bee.com


## Inter BEEをいつも手の中に!

本誌では、INTER BEE ONLINE(公式 Website)で紹介された出展製品および展示情報をご紹介します。  
(58ページから75ページ参照)


各記事にQRコード(二次元バーコード)を付与していますので、お手持ちのスマートフォンやタブレットにて、  
QRコードを読み取っていただくと、INTER BEE ONLINEの各記事に簡単にアクセスできます。

Inter BEE TVのマークがついているビデオオンデマンドもご覧いただけます。


是非、お試しください。

 INTER BEE Onlineで  
最新業界ニュースや展示会情報を  
チェックしよう!




 Twitter でつぶやこう!



 Facebookの「いいね!」で  
情報をシェアしよう!



 YouTubeで  
Inter BEE TVを登録しよう!



Broadmedia & Entertainment

# Inter BEE 2015

International Broadcast Equipment Exhibition

11.18水 ≫ 20金 幕張メッセ

主 催: **JEITA** 一般社団法人電子情報技術産業協会  
運営・お問い合わせ  
一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)  
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-3  
大手センタービル5階  
電話: (03)6212-5231 FAX: (03)6212-5225  
E-mail: contact2015@inter-bee.com



下記サイトからバックナンバーをダウンロードできます  
**INTER BEE ONLINE**  
www.inter-bee.com